特 10
515

佐野義勇傳 全

090750-000-3

特10-515

佐野義勇伝

太田　乙治／刊

M19
DBN-1359

叙

明治十九年十二月九日内務省之付

熟々浮世を歡ずるにもとの雫末の露後るゝも先だつも結局處は同一にして咲たる花い必ず散り繁れる草い必ず枯る榮枯盛衰い世の中の脫を難きものゝ如ある然れど人慾の常として富貴喜樂は誰も希ひ貧賤憂苦はおの人希はぜ然れば凡の人の心の淺ましき此情慾に惑はされそ己が榮利を計らん爲に義を捨て利を取者の少からぬい今の世も昔も更に變りなき人間萬事慾の世によく節義を守り忠孝を盡せる佐野鹿十郎の如きい稀なり這回至誠堂主人夫が傳をものしたる佐野義勇傳を刻して發市さむ迚余に序を乞ふ余嘗て其傳を讀み其智勇義膽をば慕ふこと久しければ歡んで筆を採り思ふが儘を玆に記し以て半丁を塡ると云爾

梅亭主人誌

立花主水
浮田女お梅
大刀七郎右衛門

浮田民十郎
佐野麻十郎

佐野義勇傳目錄

○熊本の城下花見惡者狼藉の事
　幷大勇の若者惡者共を懲す事
○大勇の若者人違よて召捕るゝ事
　幷浮田傳五右衛門仁心の事
○傳五右衛門鹿藏の世話を爲す事
　幷鹿藏潔白の事
○立花主水浮田の娘お梅へ戀情乃事
　幷主水七郎右衛門を吹擧の事
○立花主水七郎衛門よ合鍵を誂へる事
　幷七郎兵衛夫婦を主水殺害の事
○立花主水寶劍を盜み取事
　幷民十郎無實の罪ゟ陷入る事
○浮田傳五右衛門閉門御免の事
　幷七郎右衛門と試合主水卑怯の事
○大刀立花ヲ合せ傳五右衛門を切害の事
　幷鹿藏大刀立花を生捕る事
　附鹿藏本名素性を明す事
○鹿十郎民之助敵討願の事
　幷太守の御前ゟ於て鹿十郎大力を顯事
○鹿十郎民之助敵討出立の事
　幷諸國巡歷大坂ゟて敵ゟ出逢事
○敵討約定天滿橋ゟて待合せの事
　幷鹿十郎民之助災難の事
○浮田民之助手負難儀の事
　幷鹿十郎民之助非人仲間へ入事

○大刀七郎右衛門民之助を闇討の事
　幷鹿十郎悲歎非人頭小車源治深切の事
○鹿十郎内々歸國民之助が死去ゟ母愁傷事
　幷鹿十郎尾張へ志ざし再び出立の事
○尾州名古屋にて鹿十郎劍術稽古見物鹿言事
　幷山田外記門弟等と試合の事
○武者修行佐藤登之助山田門弟試合大言事
　幷高弟吉田周一郎試合の事
○佐野鹿十郎登之助と試合之事
　幷外記鹿十郎を尊敬の事
○吉田尾州殿へ佐野を吹擧の事
　幷山田佐野試合御所望外記迷惑鹿十郎
　武術手練の事
○鹿十郎名譽を殘し東海道を下る事
　幷大刀七郎右衛門川越人足を頼ひ事
○大井川人足鹿十郎へ喧嘩を仕懸の事
　幷鹿十郎立腹なし歩行ゟて川を渡る事
○佐野鹿十郎大井川ゟて口論乃事
　幷水難ゟ逢行方を失ふ事
○油屋德右衛門の後妻惣領失はんとする事
　幷久治郎身延參詣災難の事
○佐野鹿十郎盜賊ゟ出逢事
　幷我慢太郎を討取德右衛門を救ふ事
○佐野鹿十郎盜賊の棲巢へ到る事
　幷鹿十郎大勇盜賊退治の事
○鹿十郎仁心女子共を古郷へ送る事

特10
515

幷 諏訪伊勢守殿へ鹿十郎目見の事
○鹿十郎諏訪家を辞し信州發足の事
幷 鹿十郎上野より大雪より逢大熊組止事
○鹿十郎危難太左衛門より救るゝ事
幷 鹿十郎災危大病の事
○鹿十郎病氣平癒の事
幷 太左衛門鹿十郎を養子より望む事
○太左衛門悴佐太郎不孝物語の事
幷 佐太郎談つて兩人を殺す事
○佐太郎熊右衛門密談惡巧の事
幷 鹿十郎無實より入牢の事
○山本儀右衛門黑白明弁の事
幷 鹿十郎無實の罪を通る事
○佐野鹿十郎奥州より赴く事

幷 藤丈之助油屋娘へ戀慕の事
○鹿十郎民十郎へ巨細を物語る事
幷 鹿十郎懇傷の事
○鹿十郎與田勘藏と試合の事
幷 敵大刀七郎右衛門の在家を知る事
○大刀の門弟大勢助太刀相談の事
幷 佐野鹿十郎勇猛の事
○民十郎門弟等と戰ふ事
幷 藤 佐藤與田等民十郎の危を救ふ事
○民十郎大刀七郎右衛門を仕留事
幷 熊本へ首尾と知る事
○佐野鹿十郎浮田民十郎歸國の事
幷 諸家家より鹿十郎懇望本末着落の事

佐野義勇傳目錄畢

佐野義勇傳

○熊本の城下花見惡者狼藉の事
幷大勇の若者惡者共と懲す事

何事ゑ花見る人の長刀といい古人の秀逸ありと世より稱る程あるより況や櫻化爛熳たる下より巡し掘り寄い早蕨の萌出るとも見なす何さま不風流の谷底ならんか茲より說出すい寛永三年彌生の中旬肥後國熊本の城下い野も山も櫻の花盛りふして白雲の墨より鶯囀が亂く又春風より飄るゝ蒐い胡蝶の狂ふより彷彿たり然ば貴きも賤きも老若男女一般て制禁酒筒を携へつゝ遠近の花を詠め詩を賦するもあり和歌を詠ずるもあり又い扇拍子を取て謠ふをあれば舞もあり實より興ある春色よして粧ひ飾る美女い櫻を恥べく思いれて是ゑ花の下より歸るを忘るゝの古語の如しと永き日脚を傾くまで已が儘々興せしが其中より一際目より立女中連子供交りより八九人花の木の間より莚を敷携へ來りし組連を開きて上下の隔をあく經居あしたゑ横からより此國の山家より住て百姓を忌ひ酒と奕博より日を送り人を人とも思いざる漢惡ありしが同氣相求る者五六人を引連先刻より遠近の花見の莚より入ていい酒肴を奪ひ取我物顔より喧ひ歩行ゆゑ是を咎むる者有ば直より喧嘩を挑け乱妨狼藉より及ぶより忽ち一日の興を醒果是を惜めど雖有て相手より成者あければ惡漢ともい彌より機より乘今此所より來懸りしが女子供の連より て花の下より

特10
515

幷諏訪伊勢守殿へ鹿十郎目見の事
○鹿十郎諏訪家を辞し信州發足の事
幷鹿十郎上野より大雪より逢大熊組止事
○鹿十郎危難太左衛門より救るゝ事
幷鹿十郎災危大病の事
○鹿十郎病氣平癒の事
幷太左衛門鹿十郎を養子より望む事
○太左衛門悴佐太郎不孝物語の事
幷佐太郎誤つて兩人を殺す事
○佐太郎熊右衛門密談惡巧の事
幷鹿十郎無實より入牢の事
○山本儀右衛門黑白明弁の事
幷鹿十郎無實の罪を遁る事
○佐野鹿十郎奥州より赴く事

幷藤丈之助油屋娘へ懇慕の事
○鹿十郎民十郎へ巨細を物語る事
幷鹿十郎懇倫の事
○鹿十郎興田勘藏と試合の事
幷敵大刀七郎右衛門の在家を知る事
○大刀の門弟大勢助太刀相談の事
幷佐野鹿十郎勇猛の事
○民十郎門弟等と戰ふ事
幷藤佐藤興田等民十郎の危を救ふ事
○民十郎大刀七郎右衛門を仕留事
幷熊本へ首尾と知る事
○佐野鹿十郎浮田民十郎歸國の事
幷諸家家より鹿十郎懇望本末落の事

佐野義勇傳

○熊本の城下花見惡者狼藉の事
幷大勇の若者惡者共と懲す事

何事ゟ花見る人の長刀とい古人の秀逸ゟりと世ゟ稱る程ゟるゟ況や櫻化爛熳たる下ゟ躍し踊り擧い早蕨の萌出るとも見なず何さま不風流の谷底ならんか玆ゟ脫出すい寛永三年彌生の中旬肥後國熊本の城下い野も山も櫻の花盛りふして白雲の墨ゟ鶯囀が巡く又春風ゟ飜る蝶い胡蝶の狂ふゟ彷彿たり然ば貴きも賤きも老若男女一般て割籠酒筒を携へつゝ遠近の花を詠め詩を賦すもあり和歌を詠ずるもあり又い扇拍子を取て謠ふをわれば鄙もあり賤ゟも興ある春色ゟして粧ひ飾る美女い櫻を恥べく思いれて是ゟ花の下ゟ躊るを忘るゝとの古語の如しと永き日脚も傾くまで已が儘々興せしが其中ゟを一際目ゟ立女中連子供交りゟ八九人花の木の間ゟ趾を艶携へ來りし組重を開きて上下の隔をおく櫻居おしたゟ欄からゟ此國の山家ゟ住て百姓を忌ひ酒と奕博ゟ日を送り人を人とも思いざる漢惡ありしが同氣相求る者五六人を引連先刻より遠近の花見の莚ゟ入ていい酒肴を奪ひ取我物顔ゟ喰ひ歩行ゆゑ是を咎むる者有ば直ゟ喧嘩を挑け乱妨狼藉ゟ及ぶゟど忽ち一日の興を醒果是を惜めど雖有て相手ゟ成者おければ惡漢どもい調ゟ機ゟ乘今此所ゟ來懸りしが女子供の連ゟて花の下ゟ

組重を開きしを見て好鳥なりと直と趾の上へ上り其酒を振舞ふべし然もあくべ此所を立去らせじと云よ一同仰天あして一言を答へず弁當を其儘よ置捨逃出すを猶面白しと中よを美目麗しき若き女を捕ゆるにゞ彼の女い一生懸命よ捕へし其手を振放し逃んとするを悪漢等い行先よ立塞りて大手を廣げコリヤ〳〵お娘と言あがら五人一同よ娘を捕へヤア〳〵酌をするがよい夫が否なら我々が念佛講をして取らせんと無理無躰よ捕へ行んとするゞゞ中よを年老ある丈駈來りて是い藉狼ありと止るを邪魔するあと蹴倒しければ老女い早最一生懸命隠し持たる懐劔を抜より早く切付るを何の小癪を老者と忽ち其所へ突倒し懐劔持手を捻上て汝が唾を嘗させるよ老女い悔さ口惜さ限りなけれど女の甲斐あさ泣より外の事ぞあさ此騒ぎよ四邊の者どを何事あるやと馳集りしが中よを氣の毒よ思ひ口を添て詫入者あれバ却て其人よ悪口あしつゝ打擲あすゆゑ是を見る者手懲して早口を利者なく皆悶れ果てゞ居たりける然る處よ見物の中を押分悪漢共の前へ出腰を屈むる人ある故是を見るよ廿一二歳位の男色白よして脊高く人品能若者ありしが悪漢等よ向ひ何等の間違かい知らぬどを女を相手のとゆゑ曲て沙汰辨下されよど慇懃よ詫入たるよ先の通り悪口をあし殊よ此者の体裁賤しく木綾布子一枚を着たるよゞ猶を見下し汝い何者あるや汝等が口を添たりとて百丈の酒手よをあらぬと何時迄ぐづ〳〵吐しをる夫とを此金拳しを喰ひ度やと罵しるよ彼の若者

い猶を詞を和らげ然樣よ仰せらるゝい沙道理ながら見らる〳〵通り年を行ざる女の事故行屆かざるとは我等幾重よをに詫致すよより平よ御勘辨下されよ殊よ老女い召仕へと見え甚だ當惑の体あれバ何卒沙了簡有べしと半分見せず頭立たる悪漢大音揚ヱ、喧しい夫者共此奴を懲よと言より早く在合棒を追取て四人等しく打懲るよ若者い右へ外し左へ躱し四人を相手よ物をも持ず會釋あがら暫く相手を勞らしつゝヤッと一聲掛て前よ進みし大男を搦ぎ上ると見ゐたるが忽ち四五間先へ投出したり續いて懲るを足よて蹴飛し後より打込南人い直と身を引て空を打せ左右よ襟首引掴み弓手と馬手よ投付るを是よを懲ず魁げよ投付られし大男い密かよ後へ立廻り無手ど組付捻伏んと力を極めて押所を一振體を振よと見えしが遙か嚇たる見物人の中へどつかを投出したり然れ共殘りの人々三人い一度よ組付を彼の若者い微笑あがら三人を手玉よ取りて那方此方と叩き廻して投付しよ頭立たる悪漢い捕へし娘を抱懸て落たる劔を取より早く切て懲るを遁遁ひ利腕取て引搦ぎ筋斗打せて投出し起んとをがく其中よ手下の奴原引掴み投付〳〵積重ね宛然子供を曾釋如くどつかと上よ腰を掛暫時息を吐居たり然ば見物の人々い皆目を驚かし聲稱る聲天地を崩るゝバかりありしが其間よ彼の娘と老女い早々よ遁れつゝ我が家を指て馳行ける又見物の中よい先刻より悪漢を憎しと思ひ力瘤を顯し切歯をあす者ありしが渠等の力量よ恐れ手を空しくして居たりし處よ

麻十郎
悪者共を
懲す

今歟より引れ蕩く有樣を見て打悦び十五六人駈寄來て惡漢の捨たる棒を取揚散々より打叩くより今は惡漢も泣聲揚ては免〳〵と詫入るより心地能こそ見あたりけれ然ば是より少しは懲しならんと掛たる腰を立下れば惡漢等ハ砂より面を押付られ目口より砂利土入て急より動くと叫ハず漸々より遁逃るを猶見物の若者越い手頃の棒を追取て頭らも尻も嫌ひなく又充分より打叩くより惡漢共い增々恐れ跡をも見ずして逃失けり因て彼の大勇の若者ハ笑止氣より衣類の塵を打拂ひ此處を立去んとあす折柄當所の城主細川越中守殿の目附役い三十人の同勢を召連來りしか今此若者を亂妨人と心得彼奴先刻城下より訴へありし亂妨人ならん殘る奴原何國へ行しや奴を生捕吟味せよと下知より隨ひ組子の面々手より〳〵十手を打振て上意〳〵と呼ハりながら打て懸るより此方い驚き是い何故のに捕方私しとい亂妨を致せし者よりハず惡漢共い逃失たり人違ひ〻し爲給ふなと雖を多勢の組子あれ〻耳よも入れず取卷ゆゑ是非なく近寄組子を投退猶も弁解あさんとするより〻ソレ役人より手向ひなすぞ折重りて捕へよと呼ハり〳〵一同より一人を中より打圍み逃さし遣じと打掛る十手い雨の降如し然〻若者と殆ど當惑なし今此處より闇々召捕れ無實の罪より陷んより遁れるだけい遁んと取卷組子を突退投退け道を求めて圍をハ出さハ役人增々焦ちて言甲斐をあき組子共彼奴一人を捕得ずハ役儀ふ對して言譯あし万一手餘らハ切捨よと大首揚て下知するより組子い十手を投捨て刀拔連切懸るを彼の若者い彌より驚き身より寸鉄を帶ざれ〻如何いせんと前後を見るより手頃の櫻のありけれ〻左右の手を掛エイヤッと引拔樣より切付る劒と破羅〳〵打落せハ散立櫻と諸共より四邊い宛然雪氷然れども組子い多勢を頼みより追取卷て切込ゆゑ今い此方も一生懸命兩の腕の續くだけ打拂〳〵半時餘り戰ひしが流石强勇の若者あれども先刻より大勢を相手より働きしかハ心身勞れて最早叶ひ難きより寧繩より懸り出べき處より云譯せんと身を働きながら思案なしけるより是元の跟々處を得たりと組子い付入て二ッより切付るを拂ひながらより身を躱せハ櫻より深く切込たり組子い刀を引んとすすを此方と隙さず飛込で組子の襟髮引掴み猶より弱して櫻を打振外の組子を寄付ねハ是非あく一同たぢ〳〵と後より逡りて惘れ果蠟卷よりそなし居けれ

○大勇の若者人違より召捕るゝ事

并浮田傳五右衛門仁心の事

扨も若者い身を遁れんと捕へし組子を猶より弱して打振ゆゑ外の者共い只遠卷よりして居たりしかハ此方い共間より一息吐直立たりし有樣い小鬼を捕へし鐘馗の如く四邊を拂つて見ゐたりけり斯る折柄遙か向の方より馬煙を立て駈來る者有しかハ若者い如勢の人數來るやと驚き見問より程あく近付ども最早日い西山より入て灯點し頃あれ〻能い見分難く馬上なるい老人より

て跡より續く者をなし依て聊か安心おしたるよ馬上の武士い扇を揚皆々靜り給へと言あがら此既へ乘着馬より飛下目付役の傍邊よ立寄方々暫く待給ふべし彼若者い乱妨狼藉の者よあらず今日我妻娘下女共此處へ櫻見物よ相越い機近隣の惡漢共狼藉よ及び難儀致しいを彼若中よ立入種々よ詫たれとも承知せざれい其亂妨の惡黨を懲し取挫し者あれい渠い人違ひなりに免し下さるべしと言ければ目付役淺野權之進い甚だ赤面おし夫い大いよ不調法ありしとて若者へを挨拶よ及び早速組子を引せたり然ども彼若者い計略よやと思ひしかば人質い放さず役人どもの有樣を見て居たるよ彼の老人い目付よ向ひ然れば彼の若者い拙者が此質ひやいとわるよど目付い答へて事故明白よ相譯る上い聊か攝ひ之おし此上い何れ共淨勝手次第よ取計ちひ給とゐべし然れどを渠が人質よ取し組子の者を返させ給へと言よ老人い若者の前よ來り某しい細川越中守の家來浮田傳五右衛門とや者なり仔細い遲々やべければ先組子の者を拙者よ渡されよと云ければ若者い浮田の有樣を見るよ物慧よして半い霜を頂き歳の頃五十三四位よして人品能く重役と見ゆる人なれば忽ち自ら天地へ平伏おし私しが無實の難相分りい上い何ど人質を取置やべし私しの働き定し卑怯共思召候とん然れども身と過れ難き儘斯無禮仕つりい此儀何卒に宥免下さるべし則ち組子の衆い淨渡しや上いと言よ傳五右衛門い大いよ悦び目付淺野權之進へ此者を渡したり因て淺野い面目無氣よ傳五右衛

門へ一禮おし逃失たる惡漢等を召捕らんと此場を分れ立去けり跡りよい傳五衛門若者よ向ひ今日圖らず其許の爲よ我が妻娘共助られ恥を消めしい再生の恩あり姓名住居とも名乘られよ此報ひよ能り出んとやければ若者甚だ迷惑の体よて私し儀い名もおき水呑百姓よい、へばや上べき樣をおし且御城下よ住居おし殿樣の淨家來方よ聊かの助力致せしとを恩を報するおぼゝは思ひを寄せ殊よ只今無實の罪よ陷入んとせしをに助け下されいへば手前よりこそ淨禮を申上るあり最早全く日も暮たれば分れや上べしと立上るを浮田い押止見れば髮を亂れ衣類も切々あれば切てい其衣類を脫替られよ先兎を角を拙者が宅迄來りいへと云よ若者い辭退おし假令着物い切々よ相成いも其儘より粗末の品あれば聊か厭ひ之おく平よ此場よてに別れや上度と云ども浮田い袖を捕らへ其許の心底い聖人を及ず依て少し頼みの儀をあるよより平よ拙者の宅迄來られよと種々の言ば聽ければ若者を今い是非おく傳五右衛門よ伴いれ城下へこそい赴きけれ

○傳五右衛門鹿藏の世話を爲事

并鹿藏潔白の事

扨も傳五右衛門い若者を伴ひて我が家へ歸り來るよ家内のものい出迎ひしが若黨久藏と云る五十餘歳の老夫い傳五右衛門よ向ひ今日いはからず御家内樣方の淨災難聊かし御心勞遊

べされしあらん然ども機よく人の助けありて恥辱よを相成らず恐悦よ御坐いとヤよ傳五右衛門も悦び彼の若者のおくべ如何なる恥を受べきよ思ひ寄らぬ助力ありて祝着せりと云おがら奥よ到り妻のお道を呼先刻其方達を助け呉たる若者を同道おしたる間逢候て禮をヤべし且彼の者の衣類破れたれバ着替を遣ハすべしとヤ付夫より次の間よ出此方へと若者を呼入れ今日圖らず我等儀同役の代りよ頼れ出仕の留守中よ先刻の騒動妻幷よ三男い遁れて先へ歸り來れども女い悪漢の爲よ恥しめよ逢んとする由の知らせを聞しよより御用い同役よ頼み直樣馬よ乘て急ぎ參ろ途中娘と乳母よ出逢ひ仔細を承まいり其許よ一言の禮を述んと一騎乘よ急ぎ來る機節諸人の評判よ其許無實よ陷入難儀せらるゝ由ゆゑ其儘馬よ鞭を加へて馳付たるよ機能其許よ面會せしい我等か滿足其許の果報なりと話しの處へ妻お道娘お梅三男民之助とも出來り今日圖らず助しれし禮の數々代る〳〵よ述居たるよ下女い入來りて風呂よ入給へと言ゆゑ若者い辭退すれどを皆々勸ひるよより風呂よ入て出來りしよ着替覽へけれバ遠慮い却て無禮あり仰せよ隨ひヤべしと衣類を着替る中よ彼老僕い煙道具まで出し髭を直し頻て酒肴を出して皆々進つゝ盃盞の數重りけるよ最早ハ暇乞仕つると云を傳五右衛門い押止め其許の音聲當處の者よ非ず何時の頃より當所よ住いるゝや又何か望みありてのとあるか苦しからずバ物語られよ我力よ及ふとあらバ相談とヤべし我小祿あれ共殿

へ一刀流の指南をヤ上且家中の諸士へも教導致すよより養ひ方も不足おし且又吻儀い當時十九歳よて民十郎と名乘殿の寵愛一方おらず其許何時迄も我が家よ止りても宜敷身分おらバ先暫時逗留あられよ併し何ど外ふ望みのあるとなれバ明し給へと再三ヤ聞信實面よ顯れけるよど若者い甚だ喜び如何ある因緣よ依てか斯賤き我が身よ御目を懸下さるゝ段有難仕合よて此禮言よ盡し難し今い何を辭進らせん私し儀い薩州の產おれ共故有て兩親兄弟共よ死別れ孤子の詮方おく當藩本よ少しの知己之ありしを尋ね參りしよ是又死よ絶便るべき處をおけれバ情ある人よ助を乞熊見川の川下よ一家を結び魚漁おして是を市よ鬻ぎ漸々今日を養罷在い段々の御厚志よ寄身の上咄しよ坐與も覺果い御縁をわらバまたを參上仕まつるべしと立上るを傳五右衛門い猶引止め其許の行ひ唐士の韓信よ似て天晴の丈夫眼心せり因てい聊かの魚を賣歩行より我が方よ止りて劔道を學び武士よ成るゝ心はおらや力量人よ勝れたれバ此上劔道を學びあべ虎よ翼を添たる如く天晴の武士なるべしと種々よ言葉を盡して勸るゆゑ若者い打喜び感よ思召し忝けなし然らバ仰よ隨ひヤさんと云けれバ夫婦も倶よ悦び若者の名を尋ねけるよ鹿藏とヤいと云ば歳い何歳よやとヤよ私しい人並より身形大きくい故廿七八歳おらんと近邊の者ヤいへ共全くい當年廿歳よ相成いと云然れバ悴よりい兄あり悴よを對面致させ度思へども只今い主用よて他行せしゆゑ四五日中よい歸宅おさ

んよりは其節知已よ教すべし早夜も深たれば臥室に豊の草臥も有べきよ長坐ハ太儀よこそと奥の別間よ鹿藏を伴なハせ其夜い皆々臥たりけり翌朝傳五右衛門ハ早く起出老僕八藏を始めとして乳母下女下男よ至る迄鹿藏を比類なるとを他言致すまじと言ひ聞せければ皆々畏まりしとて鹿藏の逗留あすとい他の者よ知らせざれば近隣の人い勿論日々稽古よ來る門弟中も更よ知る者あかりけり

○立花主水浮田の娘お梅の戀情の事

幷主水七郎右衛門を吹擧の事

斯て四五日過る間よ傳五右衛門が惣領民十郎い主用を果して歸國あしければ父母い早速鹿藏よ引逢せ過日花見の節の一伍一什を物語りしよ民十郎い且驚き且喜び鹿藏よ厚く禮を述しかば鹿藏い頭を下此度父君のは厚情よ依て卑賤身をは顧ひ下さるゝ段有難き仕合あり此上とも御目を懸玉へるべしと叮嚀よゞ述るよ民十郎い猶種々物語りを承まとり度けれどを何分主用繁多よて寸暇を得ざれば又其中よとて別部屋よこそ入たりけれ扨又民十郎ハ同役よ立花主水と言ふ者あり今年廿二歳よあり色白く少し背既わりて立派ある男なれ其佞奸邪智よして人の能を妬む曲者なり加之好色なれば平常よ婦人よ對して甘言を以て欺かすゆゑ浮たる女子ハ主水が男ぶり能きよ遂ひ密かに情を通ずる者も多く人の誹りを請ふ娘あど

往々ありしが主水い元より薄情あれば昨日よ今日と心の移り安く若き女ある家へい彼方此方と入込みてい人なき機よ文あを通じとるよ先い十よ八九成就あすゆゑ古昔の光お源氏も在五の君も我よい遜く及ぶまじと十分已惚よなり同役民十郎の妹お梅い今年三五の花盛り殊よい同家中よ並びなき美女あれば渠を何とかして手よ入んと種々よ心を碎きけれども浮田父子い手堅き家風故容易よ云寄ともならず主水い明暮心を惱し居たりしが何時迄待とも詮方なし依て生來好まざれども劍術と學ぶを名として娘よ近寄思ひを遂んと常春の頃より傳五右衛門の門弟となり日々稽古よ來ると雖を元より劍術い仕たり娘よ逢んとのみ心懸居たりし處或日不圖能き折のありしかば認め置たる文をお梅の袖よ竊と入けるよお梅い驚き袖拂拂ひ文投捨て逃入ければ主水い案よ相違あし忙然として彳み居たるよ何時の間よかい傳五右衛門い後ろより立花氏と聲を掛ければ主水ハハッと驚き振返れば傳五右衛門と若々しき面色よて若氣の至りとい申ながら師匠の娘へ戀慕あすい何事ぞや豫々好色とい存ぜしが最早見下果たる其許の心抵以後い師弟の縁を切破門致すよ依て早々歸られよ然し若き者の了簡違ひよ往々有る習ひ他言い致さぬよより主用の節い何時よても參らるべし私用よい決じて浮出ぬ無用と云捨つゝ奥坐敷へ入りたりけるよ主水い立端を失ひ赤面あ去て居たりしが頓て悄々此場を立出我家へ歸り來りしと雖を左右お梅のことい忘れ難く且い傳五右

衛門は恥しめられしを口惜く思ひ如何はもして此恥辱を雪ぎ且は御梅の辛きを歎かせんと日々此事のみ思ひて月日を送る中五月の下旬九州相良の親類より添書を持參し歳の頃三十七八にて色背黒く脊高き武士に主人は面會致し度と申込しに取次の者書面を聞取主水へ斯と通せしかば主水は早速其書面を開き見るに八重垣流の達人にて當時浪人大刀七郎右衛門と云者當地にて劍術を申立し處渠に及ぶ者なきより却て妬みを請仕官もならず依て貴所の吹聲を以て細川家へ召抱らるゝ樣取成頼み入るとありしかば早々其者へ面會せんと案内して座敷へ通させ大刀七郎右衛門は對面あせ去に何樣武術者と見受ければ先我家に止留能機もあらば大守へ申上んと見合せ居たりしが月日立て七月中旬立花主水は大守乃前にて四方八方の物語りを申上る折節諸國に劍術鍛練の者有やとの御尋ねに是幸ひと思ひ此樣私し方に逗留いたしは大刀七郎右衛門と申者八重垣流の達人にて諸國武者修行あせしに何國に於ても勝ざるなき由實空事取交へ辨口に任せて申述ければ大守には武道を勵まるゝ機からゆゑ早々其者を召出すべしとの仰に付主水は悦び早速我が家へ歸りて七郎右衛門に委細と申聞かば大刀は大いに悦び即時に支度を調へ立花同道にて大守の前に罷り出遙かの樣に平伏あすを主水は大守に向ひ彼は八重垣流の達人大刀七郎右衛門と申者私一親類より書翰を贈し能仕官をあらば吹聲致し呉よとあるにより當時私し方に止留劍道の物語り承まいりは

處少しも淀み是なく天晴の者に御座はと披露しければ大守は是を見られ大刀とやら近ふ進むべしとの仰せに大刀七郎右衛門は畏と頭を樣に摺付居たるを猶近ふ〳〵と仰されば少し進みし時大守には武道の物語を申尋ねあるに弁舌水の流るゝ如くなりしかば感心有て盃盞を下し置れしに大刀は主水に向ひ面目身に餘り有難く存じ奉つると申ければ立花も俱に有難しと申禮を上げるに大守には何思されけん近日出呼さんにより今日は退出あるべしと仰せあるに大刀は樣に相違したれども近日呼出しはとのことなれば申前を下りけり立花を遠外のとに思ひ俱に前を退きしが日を早傾く故主水は同役と交代あして我が家へ皈り早々大刀と呼出し今日始めの程は樣子能りしか追て呼出んとの仰せ甚だ其激を得ず然共武道を好まる〳〵殿あれば其術は試しあき中は召抱へに成まじ就ては近々試合仰せ付らるべきが相手は定し浮田傳五右衛門ならん彼奴老たれ共一刀流の極激に熟し居れば容易の者にあらず彼奴あければ貴所に及ぶ者有まじ夫に附浮田は我等懇意あり其仔細は樣〳〵と娘に懇荘せしを見咎られ破門されたる始終を咄しける大刀は微笑夫は申道理のとなり惜き傳五右衛門某し一計を思ひ付しが貴殿は如何思はるゝやと言に主水は先生の一計承まいるべしと膝を進めければ大刀は進み寄是は兩端の計略にて貴所には恨みを報し我が爲には邪魔を拂ひはありと耳に口寄せ暫く私語きしに主水は横手を拍き我と傳五右衛門が悪民十郎

と相役よて一ヶ月代りよ寶藏の鍵を預るとゆゑ當月立ハ民十郎の當番なり依て密よ朝日丸乃寶劔を盜みとり民十郎よ塗付くれん然すれハ親い國拂ひ民十郎ハ討首とあるい疑がひあり然樣ある時い我が讎を叶ひ貴所よも太守へ御師範となるいハ定あれば其事を計らふゝし

ゝ兩人密々物語り翌日主水い浮田の方へ罷り越民十郎よ面會して來月い貴殿の寶藏番ゆゑ例月鍵ハ廿五日よ渡しゆ先例あれども拙者儀少々用向よて隣國まで罷り越ひ間今日鍵を渡しゆ度尤も來月二日よい先例の通り立會ゆ寶物を改めゆすべし夫まで他行あすよ心遣ひあれば鍵い御預けゆと云よ民十郎い巧みのあるとと知らざれハ承知して鍵を請取しかハ主水い心中よ仕濟したりと喜びて立歸り直よ登城して夫より寶藏の錠前よ矢立の墨ゝ塗白紙へ形ちと寫し取て密かよ我が家へ持歸り素知ぬ顔よて居たりしい不敵よを又憎むべき奸賊あり

○立花主水七郎兵衛よゆ鍵を誂へる事
幷七郎兵衛夫婦と主水殺害の事

斯て立花主水い民十郎と偽り目付役へも隣國よ所用ありて相越ひ間一兩日民十郎へ御寶藏の鍵を相渡し置ひと屆け置我家よ隱れ居て其夜密かよ忍び出城下ある七郎兵衛と云鍛冶屋の方へ到り明夜中よ來りしい我が身分よ斯る一大事あり事仔細い某し當月御寶藏の鍵密成

しが市國へ失ひしか其鍵更よ見ゆず此事上へ知れてい役儀立ざるよより其方内々よて鍵と拵へ呉られよ然すれば我も安堵いたすあり偏よ願むとゆよゞ七郎兵衛い實休ある者故夫い誠よゆ困りあらん鍵と二ッ拵へひとい御法度よいへ共御身分よ關いるとゝあれハ拵へゆべし併し錠の形なくてい叶ひ難しと云よ懐より白紙へ錠の形を取たるを出し其方の拵へたるあれハ形さへあれハ宜しかるべしと思ひ斯の如く致し來りたり呉々も頼むありとゆよ七郎兵衛承知せしかハ主水い再生の恩人なりと厚く禮を云明晩罷り越ひ間夫迄よ拵へ呉らるべしと約束して立歸り万事首尾能行たりと七郎右衛門ゝも咄し兩人の悪黨い打喜びて明日の晩をゞ待さりける頃て翌晩よもありけれハ又々郎を忍び出鍛冶屋へ到り見るよ鍵い出來あし居たるゆゑ大いよ喜び主水い七郎兵衛よ向ひ其許の厚志よ依て我が身の落度を遁るゝよ付身祝ひあれハ一献を酌べし城下の酒屋よ待居間後より來られよ是い實よ寸志なりと金二分取出し紙よ包みて渡しけれハ七郎兵衛い忝けあしと押頂きて妻よ渡し私し酒い元より好物なれハ後よりと申さすとを以同道ゆべしと言よより主水い七郎兵衛と同道して城下外れなる居酒屋へいたり兩人酒肴千十分よ喰し七郎兵衛い大いよ酔の廻りたる機妻のお露い七歳ある娘おたまを背負ひて此所へ來り急ぎの誹へ物あれハ歸り玉へと云よ七郎兵衛い後引上戸の癖として兎角よ此所を立難るとゝ主水も共よ歸るべしとて酒肴の代を拂ひ其許よい

盤さの[illegible]へ物ある由あれば一足先へ行れよと無理よ追出され七郎兵衛い未だ飲足ずとぶつ〳〵小言を云ながら妻のお露よ助けられ片足高く片足低く松の並木へ來懸る頃い早夜も戌刻過よて人足絶し宵闇よ何者とも知れず扳打よ後より切付しかば七郎兵衛ハッと言て倒れしが其儘息の絶たるよう女房い驚よ驚き人殺し〳〵と聲を立る所を返す刀よ首打落し餘る切先よ頑是なき稚子さでも一討よあし曲者い七郎兵衛夫婦よ止めをさして莞爾と笑ひ何國とをなく立去けり斯る樹から向ふより提灯數多照し大勢此方へ來るい此邊よ顧母子講有し飯りなり其人々今此松原へさし懸りしが血よ染たる人の倒れ居るよ打驚き怖〳〵あから立寄見れば此い如何よ城下の鍛冶屋七郎兵衛夫婦子供さで切殺されて居たるゆゑ皆々再び驚き早々村役人の方へ走り又鍛冶屋の親類へを知らせしよ七郎兵衛の親類共い大いよ驚き此段早速奉行所へ訴へければ檢使の役人來りて死骸を改め是い正しく刀疵ゆゑ試し切よをせられしあらん不便のとあれば厚く葬り得さすべしとて家財い親類の者へ下され此後敵の者知れあば早速よ申出よ吟味を遂遂いさんとヤ渡され此一條は相濟けり

○立花主水寶劔を盜み取學

并民十郎無實の罪よ陷入る學

扨も立花主水いするとあすと手都合能行しかば太刀七郎左衛門よ向ひ限て巧みし寶藏の鍵い斯々爲て拵へさせ又右の鍛冶屋七郎兵衛を生し置てい大事の泄んを計られざるゆゑ昨夜酒を勸めし歸りよ家内殘らず殺したり因て此機よ乘ぜ寶藏へ忍び入朝日丸の御劔を盜み取民十郎親子を罪よ陷し呉んと猶相談を遂其夜丑滿頃よ寶藏へ忍び行彼の合鍵を以て錠を明難なく御劔を盜み出して其月を送りたり翌月朔日い八朔の祝義とて浮田傳五右衛門乃方よてを祝ひ居たるよ立花主水只今立歸りしと民十郎の部屋へ入來り留守中世話よなりし一禮を述寶藏の鍵い最早明日より貴殿の預からるゝ番なれば此方よ渡給へるべしと云捨て歸宅あし翌二日ハは交代日あるよより例の如く目付役立會當月鍵預りの役い浮田民十郎なれば立花主水と俱よ寶藏へ罷越先を鍵い先月浮田民十郎へ預け置しゆゑ是を請取主水い錠前を明て一同中へ立入ける處よ長持の中よ納め有べき品の外へ出て居たりしかば主水い不審ある面色よて浮田よ向ひ貴殿い我等の留守中よ寶藏を明玉ひしかと云へば民十郎い元より知らざるとゆゑ決して然樣のとあしに寶藏い諸役人方でを狼りよ明るとならじ何私しよ明るの理あらんや既よ受取渡しの節を目付方立合るゝ程の事なりと言よ主水い浮田氏是見られよ仰の如く皆々立合て仕舞僅に劔の箱外へ出たるい不審よあらずやとヤせば立合の役人を始として民十郎を是を見るよ主水が言如くあるゆゑ兎よ角中を改めんと箱と開き見れば是い如何よ劔い紛失あしたるよゞ一同大よ驚き盜賊よても入しあらん家尻を切たるを知

るべからずと寶藏の四方を見廻りけれども外より入たりと思ふ處もあじ欲て皆々不審晴さるゝ主水い民十郎ょ向ひ貴殿い何故ょ寶劍を隠し給ひしぞ早く出し給へと云ょ民十郎い面を正し是い思ひも寄ざる事かな拙者ょ於て右樣の覺ゑ毛頭是あり鹿忽ばし云玉ふあと半分言せず主水い冷笑ひ盜人猛々しとい貴殿の事是い正しく鍵と以て錠を開けしならん此鍵い貴殿より外ょ持たる人あければ外ょ盜む者いあき筈ありと言ょ浮田い彌ょ惘れ果汝主水め我を強て罪ょ落さんとする法外の過言用捨いならず今一言云て見ょ手い見せぬぞと刀ょ手を懸詰寄ば主水い増々打笑ひヤレ〳〵氣の毒や弁解あきまゝょ只力まるゝかと嘲けるょど民十郎い最早了簡ならずと切付んとするを目付役人取押へ兎も角も重役へ申遣し兩人其歸を受べし私しの意趣い不忠の至りと兩人を引連行て重役へ遣し太守へヤ上けるょ太守い大いょ怒り給ひ主水い大切の用向を持ながら其職の濟ざる中ょ頻み合他出あると不屆あり併し夫々の役向へ屆け出置しゆゑ大いょ罪い經しと跡を目通りい差扣へ慎み在べし又民十郎い己の番ょもあらざるょ鍵を預り大切ある家乃重寶を紛失させしい言語ょ絶て憎き奴手討ょ致さんょより引据よとヤさゝゝょ民十郎い身ょ覺ゑあき無實とい思へども言解べき詞もなきゆゑ是非あく庭へ引れけり然ば細川侯い立腹の餘り民十郎と手打ょせんとて既ょ庭へ立出られんとあす處へ暫く〳〵と言つゝ打出るょ當家の老職三百石ゟ領する長岡帶刀あり

帶刀い太守の前へ平伏あし只今仔細を承まいりいょ以の外の儀あれば立腹い道理ょいゝ併しゆゑ手打ょ遊され此事隣國あどへ聞ゑし節い君のゆゑ短慮と思いれんを如何ょ付民十郎は拙者へ預け下さるべし君ょ代り奉つりて某し成敗仕つるべしとヤょ太守を道理と思され然ば其方ょ任すべしと民十郎を引渡されしかば帶刀い民十郎を引連我が屋敷へゞ皈りけるょ是等の事と民十郎の父傳五右衛門い聞て大いょ驚き重役へ内慮を問合せしょ先閉門致さるべしとのとょ付傳五右衛門い慎しみ居たりけり扨又長岡帶刀い民十郎を我が庭先へ引据させ此度の罪無實といヤあがら其方の落度あれば覺悟致すべし而又家來共い次へ立と追遣ょ民十郎い土壇ょ直りて合掌あす時帶刀ハ刀をすらりとエイと聲を懸れ共民十郎い目を閉し儘ょ自若として在ければ長岡い又をやエイと聲を懸ゝ打ょ首元を打けるょ面をを變せず矢張眼を閉し儘なるょゞ扨々天晴ある大丈夫かあと帶刀い心中ょ感じ立たる折から庭の垣根を押分て急遽く此方へ來る者あるゆゑ帶刀い不審て是を見るょ五十餘の老人恐る〳〵長岡の前ょ出私しとい浮田の若黨久藏と申者ょいが若主人民十郎儀幼稚の時より此歳まで多年奉公仕つりいへども未だ一度を悪きことを承まいりヤさず然るょ如何ある災ひよや此度の大變大殿傳五右衛門い男乃とあれども母公の悲しみ譬へん樣もあく狂氣の如くに歎かるょ体如何ょも見るょ忍びず此親仁とても我が子の樣ゃ

育し民十郎殿のとゆゑ此方樣へは連戻りと承まはり矢も楯も堪らぬこそ其儘馳出し密かよは庭先へ忍び入て只今此所へ罷出いなり犯せし罪あら是非をなくいんへとを何卒して長岡樣の御慈悲を以て此親仁を身代りよなされ主人の命をは助け下さる樣偏よ願ひ奉つると大地へ天窓もめり込ばかりよ平伏て御慈悲〳〵と言聲も涙ゆ曇る眞心を帶刀い熟々聞心中に扨々下郎よい稱ある忠心ありと思へども假令汝何樣よ願ふとを殿よりの殿命い私しよ枉難し然れ共折角老人の忠義無よもあし難さよより民十郎の紀念よ同人の着類と其方が衣類と取替ヤべし然すれば其方が忠義も無よあらず如何よ民十郎早々衣類を着替遣いすべしと言よ民十郎い今迄一言を發せざりしが長岡の仁心と言久藏が忠義を感じ潸然と涙を流し有難き帶刀殿の思し召生々世々忘れヤざずと言樣久藏よ水上下民十郎ハ古布子よ着替有難しと一禮するを帶刀い一刀よ久藏が首を切落せしかば民十郎い驚き是い如何あし玉ふと云せも果ず帶刀い如何よ民十郎でいあい久藏とやら能承まれい大切あるゆ家の寶劍を失ひ刑罪よ行いれしい是非に及ばず依て久藏汝い主人民十郎よ成代り草を分て寶劍の詮議をさし來るべし憎き奴哉此庭先へ來り彼是言い俱よ死刑ゆ逢度か疾々此場を立去べしと懷中より金子百兩取出し是い是民十郎が紀念なり故よ取する早行けと言葉尖く云放せば民十郎いと、發と大地よ手をつき平伏て有難涙よ暮たるが仰せの如く久藏が命よ替ても寶劍の詮議は屹度仕つり頓て吉左右ヤべしと言つゝ立て行後を帶刀暫時見送りて不便の者やと云折柄以前の密來出來るよゞ長岡夫と差圖あし民十郎の死體をまとめて浮田へ下し憐れけり

○浮田傳五右衛門閉門は免の事

并七郎右衛門と試合主水卑怯の事

扨も長岡帶刀い思慮仁心を以て密かよ民十郎を助けしと雖を夫より直ちよ登城して浮田民十郎を成敗仕つりけと申上しよ太守を今さら心中よ民十郎を惜まれしが何思されけん閉門ありし花立主水を俄かよ召出されるよゞ主水い何事あらんと彼の大刀よ相談あせば大刀い微笑此儀い決して驚き給ふよ及ばず罪い既よ民十郎と紛されたれば是い餘の儀あるべしと事も無氣よ云ければ主水い實よもと安心して登城あしけるよ太守い直樣主水を召れ先遣て予よ目見せし大刀七郎右衛門い未だ其方よ同居あすや取紛れ其後沙汰致さゝりしが此度召抱んと思ふなり彼れよ其趣きをヤ達すべしと直々の仰あれば主水い悅び勇み仰せ畏まり奉るとは請をヤて前を下り早々歸宅して大刀を招ぎ先生悅び玉へ其許の心願成就あし我が君其許を召抱んとの御内意あり近々日を撰んで召出さるべしと言よ七郎右衛門い雀躍して打喜び是迄く貴所の取計ひゆゑありとヤければ主水い否々皆是先生れ方すよ依て事成就せしなりと賞讃し先い前祝ひをせんと夫より酒宴究し召狀の着を今日か〳〵と待けるよ一

日間を置て召出され一家中劔道の師範たるべしとて祿三百石賜る旨申渡されしかば大刀の喜び大方あらず意氣揚々として勤むるを羨む者もありとかや然ば古昔も今を新しきこと好むは凡人の情あれば家中の若者どもは是迄の師範たる浮田い此程閉門の身となりを門弟共劔道を勵むともあらぬ機から幸ひ八重垣流の師範出來しゆゑ皆々競ひて日々稽古に集りけるを大刀い奸佞の者なれば人々の機嫌をとりし叮嚀に待遇最實直らしく見せけるまで一家中の若者とも能師を得たりと評判あして月日を送るうち九月の下旬或日太守い諸士に向いれ近來抱へし大刀が評判宜しければ予が師範申付んと思へども奥が術の淺深如何あるや未だ試みざれば浮田が閉門を赦し大刀と試合致さすべしとありしに諸士い是こそ能見物よい急ぎ浮田傳五右衛門の閉門に免ありて繼るべしと申ければ早速閉門を赦すべしと其筋の役人へ沙汰せられたり扨亦彼の浮田傳五右衛門の方にて八月二日の騒動より悴民十郎い手打と事定りしかば兩親ハ言も更あり同腕の人々打寄て歎き悲しみ居たる折から表の戸の際より八重封の書翰を投込行者ありければ傳五右衛門の妻い是を取上見るに彼兩親様へ久藏よりと上書あるゆゑ是い慥なる人の書簡なり尤も久藏と言い若黨の名前あれども其久藏い何方へ行しや歎きの中故心付ざりしが今日い一向に見ざるを不思議のとあり向い兎もあれ夫傳五右衛門殿に申上べしと奥へ行て右の書面を差出し仔細を語りければ傳五

右衛門い書面を見て此筆意い民十郎が手跡あり如何にも不思議のとと開き見るに今度無實の災難ゆゑ手討と定まりし處長岡帶刀の仁心より若黨久藏の忠死のと又某し路用の爲長岡氏より百兩惠まれし等の次第を委曲に認めありしに彼傳五右衛門ハ大いに驚き扨い悴民十郎と息才にて有しか然りながら久藏ハ不便のとを致したりと暫時涙に暮けるが扨も長岡氏の深慮實に賴母しき御老臣なりと感じ又妻に向ひ此と必ず兄弟にを告べからず民十郎い死去せしと何處までも申觸すべしと堅く口止のをあしければ妻も堅く守りて我が子のお梅民之助へも知らせず久藏の死せし日を民十郎の命日となし跡懇切に弔ひける尤も世間へい久藏の國許い奥州なるにより國より迎ひ來り歸國せしと申觸し置しゆゑ誰知る者もあかりしと彼是と日數經る中九月も廿二日とあり此日い民十郎か四十九日なれども閉門の身なれば寺參りをせず只内々にて經を讀回向をあし居たるに俄に太守よりの使ありと觸込ゆゑ傳五右衛門い衣服を更めて出向ふに太守の使い閉門免の上新規召抱へに相成し八重垣流の大刀七郎右衛門と劔術試合に付られし間明日御前に於て勝負致すべしとあるにぞ傳五右衛門い有難く畏まり奉つる旨御請申せしかば役人い立歸り太守へ斯と申述たり然ば傳五右衛門の家内い打喜び翌日の支度をあしけるに彼の鹿十郎先頃より傳五右衛門乃世話に相あり何不自由なく暮し居たる處に此度の騒動を聞俱に心配して憂ひしが俄に傳五右衛門

の閉門は免とあり明日は太守のお前にて試合との事故大いに悦び何卒私しを若黨になされ
ば供に召連下さるべしと云に傳五右衛門は何が考へ否々先見合すべしと止めけれども鹿十
郎は强て望むゑより然らば供に召連んと約束して明日とぞ待居たり明れば八月廿三日の朝
五ツ時より一刀流八重垣流の試合は覽あるとて天守下なる外庭に九曜の紋付たる幕を打廻
し前後左右に警固の役人居並び正面の機敷には麗を垂て太守の坐を設け其左右は諸役人を
始め家中の諸士居並びて今や遲しと待居たり頓て辰の中刻相圓の太鼓を打ならせば右の方
より浮田傳五右衛門は黑羽二重の紋付に茶宇の袴白絹の襦を懸當年五十三歳半白の老人な
がら面体は柔和なり從々と立出て正面の麗に向ひ平伏なす左の方よりは大刀七郎右衛門は
淺黄羽二重の紋付に精好の袴紫縮緬の襦を懸歳の頃三十二三なり其相貌色淺黑く背既
わりて脊高く何さま鬼をも眼拉べき体裁なり是も正面に向ひて禮をなし東西に立分れ兩人
は今日を晴と扣へければ見物の諸士何も固唾を呑で居たりし時正面の麗さら〳〵と卷上り
太守の坐定りしかば双方一禮をなして立向ひしが大刀は心中に此老耄め只一打と思ひ竹刀
を取や否やヤッと聲懸浮田が眞向目懸て打て懸るを浮田は心得たりと身を躱せば空を打た
る大刀は仕損じたりと其儘下段に構へて附入るを浮田は中段に構へ双方暫時隙々窺ひける
が如何にあしけん浮田は大刀に附入られぬ第〳〵に四五間程跡退りあすゆゑ人々浮田は負

口ありと見て大刀は負は心中に悦び浮田は負は皆々手に汗を握りて見物し大刀が下段の構
へ上段に變ずると見る間に一聲高く叫んで打込を浮田は閃りと十間程後へ飛けるが其早さ
と眼にも止らず見物の者皆々打驚くに大刀は又を仕損じ殘念と續て渠を飛込ながら横に拂
ふを浮田は直と身を沈め空を打せて大刀の後の方へ拔るゑを七郎右衛門は猶焦立振向さま
に發止と打と手元へ入りて引搦ぎ投ると見しが其まゝ差置浮田は太守の御前に向ひ遙か
下りて平伏なすを七郎右衛門は理不盡なりを再び來つて打んとするゆゑ浮田は此奴卑怯なり
勝負は疾に分りたるを未練の振動あす上は目に物見せて呉んずと一聲ヤッと撫あがら竹刀
を宙に打上れば大刀狼狽遂巡を浮田は隙さず疊かけ腰の番ひを打据たり立花主水は先刻に
り此有樣を見て居たりしが今大刀が打るゝを見て口惜く思ひ一趨に駈寄落たる竹刀を取に
り早く浮田に打て懸らんとなせば此時早く彼の時遲く幕の外なる見物の中より一人の男顯
れ出今浮田を打んとあす主水が利腕取て七八間先へ投出せば主水はウンと言て倒れし儘抱
上ると能ざりしは心地能こそ見なたりけれ浮田は彼の男を見返り汝は前とを彈らず猥りに
此處へ出ると不埒至極なりと叱り付るに彼者は恐れ入りたる体にて慇々立入るを太守は樓
臺より彼方なる若者は何者成ぞと聲を懸らるゝに浮田はハッとは前に向ひ渠は先頃召抱へ
し某しの若黨にいとゞせしに大守は渠が力量の勝れしを感じられ天晴能者を召抱へたりと

褒詞ありけれバ浮田い恐れ入来が不禮をば咎めるべきの處却てハ賞美ゑ預り冥加至極ゑ存
來つりいと申ゑ太守い機嫌うるハしく傳五右衛門ゑ盃盞を賜いりけれバ厚くハ禮ヲ上ハ前
を退きけり夫ゑ引替大刀七郎右衛門立花主水の兩人い首尾以の外惡敷大刀い即刻扶持方召
放し暇とあり又立花主水い太守の前をハ憚らず卑怯なる振舞をおし其上若衆ゑ投付られし
事武士ゑ似合ずとて門前拂ひとありゑけり是ゑ依て大刀立花の兩人い浮田を深く怨み此意
趣を時さんと種々ゑ心を惱し密かゑ相談おし居たり

○大刀立花申合傳五右衛門を切害の事
幷鹿藏大刀立花を生捕事
附鹿藏本名素生を明す事

扨又傳五右衛門い歸宅おし妻のお道ゑ御前の首尾最も能趣きを物語り且鹿藏が今日の働き
人間業ゑい有べからず天晴の力量感ずるゑ餘りありと頓て鹿藏を呼出し種々ゑ辯應けれバ
鹿藏い天窓を撫不禮をハ顧みず罷り出し處ハ叱をなく却て太守樣のハ譽ゑ預りしと是私し
を譽給ふゑあらず全く旦那樣の常々御忠節厚きゑ稱せられしハ儀ゑ存じ率ゐりいとヤけれ
バ傳五右衛門い鹿藏が物ゑ誇らず己と卑下おす言葉を聞て弥ゑ感じ夫婦諸ともゑ深夜まで
酒を進めて咄しけるが幽がゑ聞ゆる遠寺の鐘ハ早子刻あれバ鹿藏も勞れつらんと傳五右衛

門い床ゑ入りしが晝の勞れゑ前後も知ず寢入けり因て妻も四邊を片付鹿藏を部屋ゑ行て臥
みしが夜を深々と更渡り廿三夜の月影も何時か曇りて風さへ強く雨い頻りゑ降出しけるが
庭の生垣引分て眼バかり出せし兩人の曲者浮田が寢處を窺ひ寄雨戸を密とこじ明つゝ内の
樣子を考ふるゑ浮田い寢入バおと見ゑ前後も知らざるゆゑ二人の曲者い點頭合躍居の中ゑ
入り來るゑ流石の傳五右衛門も運の盡ゑや此時初めて人の足音耳ゑ入眼を開けバ怪し氣あ
る二人の姿ゑ己曲者と云さま枕刀ゑ手を掛んとするを曲者い隙さず切付るゑ傳五右衛門
い身を飜しけれども未だ大酔の醒されバ思いず透眼打燈ゑ跌き眞の闇とありけるを曲者い
滅た切ゑ切付たる切先傳五右衛門の脇腹ゑ中り急所の痛手ゑ堪り得ず傳五右衛門い尻居ゑ
揺と倒れながら請つ流しつ戰ひ居る其物音ゑ次男民之助ハ目を覺し刀追取駈着られと父が
寢間い眞暗闇何れが敵とも分らねバ灯りを早くと聲を立るゑ一人の曲者い聲を知べゑ切撒
る刀の光ゑ扳合せ二打三打切合しが民之助い十四歳の小腕ゆゑ既ゑ危き其處へ鹿藏い燈し
火照して駈來り今曲者が振上し刀を潛り襟首を取ゑと見ゑしが投付るゑ障子を雨戸を打拔
て遙かゑ庭の飛石ゑて肋腹を打れ息絶たり鹿藏い是を見向を遣す浮田の寢間ゑ駈入り見れ
バ此い如何ゑ傳五右衛門い痛手おがらを一人の曲者と戰ひ居たると鹿藏い飛込おがら拳を
固めて曲者の横顔目懸打けるゑ大力無双の勇士ゑ打れ顚蹣く處を搔摑み宛然小兒を扱ふ如

く是をも庭より投出せば其間より妻のお道を始め家内の人々駈着き寄り此体を見て大いに驚き傳五右衛門を介抱おし下男を醫師へ走らせあどするよ傳五右衛門い痛手おれども敵い確かよ大刀立花の兩人と見受しが渠等日中の試合を無念よ思ひ卑怯よも我を闇討よせんと謀りしと覺ゆたりと云を民之助い聞て後追掛行んとするとなし又一人い最早遠く走りしならん只々父上のに介抱こそ肝要おれと言よ傳五右衛門い苦しき息の下より鹿藏よ向ひ我今斯の如く手負たれば我が命旦夕よ迫れり然ば貴殿よ願ひ事あり因て其許の素性と聞まほし初めて逢し其時より凡人あらずと思ひしゆゑ止宿たり小錄の者を厭いれずば我が娘と娶合悴民十郎が片腕と頼み度ひ何卒我が望とあり民之助へ力を添敵兩人を討取給いるべし悴民十郎と實い存生致し居れども寶劔手よ入らぬ中い歸るとあるまじきよより頼む〳〵とヤよぞ鹿藏い狀を改め仰一々に道理のに事あり我名乘べき身よあらぬ共此場のとゆゑ實を明しヤさん某しの家い薩州の藩よして万石を領したる佐野帶刀が次男あり兄出羽と共よ琉球征伐の時新納武藏守が軍令を背きしゆより今斯涙々致せども實の名い鹿十郎とヤ者よていと云ければ傳五右衛門い打驚き嗚呼我が凡眼の拙さを實よ恥べし某しが娘如き賤の者の婿よあらるゝに身よあらず然共世の盛衰い是非をなきよより我を不便と思されあば妾共あして民之助へ助力あし敵討をさせ玉へ細川譜代の家柄

よて闇々犬死せしと有ていい主家の耻辱又先祖へも申譯あし只管願むと手を合せ其まゝ息の絶しかば家内いハッと取縋るを鹿藏い生たる人よ物云如くに遺言の趣き委細承知致せしからい必ず安心おし玉へ敵屹度討せヤべしと言よ母親お道よ泣々を夫が遺言おれば何卒親子の盃盞をおし玉いれとヤを鹿十郎に道理なりと承諾しが前よ投付たる奴一人は息の絶たれば是よ活を入れて詮議仕つらんと庭へ下て見るよ投られし儘今よ息の出ざれば是よ活を入被り物を取て改たむるよ何さま立花主水なりしかば傳五右衛門い深手を負ありながらも氣象なるを感じ主水を庭の立木よ繋ぎ夜明おれば此事を訴へんと待居たり又お道を歎きの中よを夫の遺言なれば鹿十郎を促がし親子夫婦の盃盞の眞似事をおさせ夫より皆々打寄て敵討の願より後のとども相談よこそ及びけれ

○鹿十郎民之助敵討願の事

并太守の御前よ於て鹿十郎大力と顯いす事

扨彼是とおす中よ親類縁者も馳集り願て其夜を明放れしかば前夜の始末を重役へ屆け檢使を濟て立歸りしが夫より浮田民之助い鹿十郎を連て老臣長岡帶刀の方へ相越面會と乞て此度父が横死の次第い云々斯樣〳〵なり其敵と云い大刀七郎右衛門立花主水の兩人よして既よ主水い昨夜生捕置先刻檢使の役人へ引渡し置ひ間何卒父の敵を討ヤ度此儀然るべくに執

成相願いとヤけるよゞ帶刀を傳五右衛門が横死を深く惜み民之助の願道理あり早々太守へ言上し宜しく取計らひ遣すべしとのよよ付民之助鹿十郎の兩人い厚く頼みて歸宅せり頃て帶刀い登城あし浮田民之助が願の趣きを太守へヤ立しよ太守よも殊よ傳五右衛門の横死を惜まれ民之助が願を許されしかゞ長岡帶刀い浮田民之助を呼出し敵討の願ひ太守よ於てを聞濟れ旦立花主水儀い一旦其方父の門よ入師弟の約を結びたる者よて其侵破門されしといヤあがら師を害したる重罪人あるよより其方へ下さるゝ間存寄次第成敗致すべしとヤ渡しければ細付のまゝ我が屋敷へ引來り母始めへ其事をヤ聞せ鹿十郎よ云付て主水を庭へ引据させ民之助い眼を瞋して發打ち白眼汝知らずや師の影い七尺去て踏ざるとの教へもあるよ假令破門いされたりとも一旦師と頼みたる者を切害なすとい實よ人面獸心の曲者今こそ思ひ知やと言樣刀をすらりと拔放し左右の手の指切落せゞ主水ハアッと泣叫び米練よも米だ逃んとするを鹿十郎い打笑ひ是い面白〳〵我が爲よも眞の敵嬲り殺しよして呉んと同じく刀を拔放し主水が股へ突拔き刺り廻せゞ七轉八倒苦しむ体ゞ心地よし暫く有て民之助い徐々と立寄最早十分よ苦しませたれば定めし思ひ知りつらんと首打落して血を洗ひ父傳五右衛門が位碑よ手向鹿十郎を始め母のお道娘お梅と次第〳〵よ回向をなし頓て主水の死骸を取片付しが母のお道い人々よ向ひ心よ懸るい物領民十郎のと今此場よ居合せおば民之助始

め皆々と俱よ敵の片割をも討此後力とをあるべきよと又涙を流すよゞ道理ありとい思へども鹿十郎い故と聲を勵まし其仰い然る事あがら云て甲斐なき此場の時宜先夫よりい長岡殿へ我々再び罷り出敵討の出立を願ふこそ肝要あれと民之助を伴ひ長岡帶刀の方よ到りて歎願あしけるよ直樣我が登城の後よ附添來るべしとて帶刀い出仕あし兩人を下部屋よ扣へさせ其身い太守の前よ出て嫡等が出立願ひの儀をヤ述けれゞ大守い早速聞濟れ其者を是へ呼べしとのよよ付帶刀の指揮よ隨ひ民之助い大守の前よ出て平伏あす此時十四歳よして未だ前髪立の小幹なれゞ大守い甚だ心もとなく思いれ若年の其方何時と定めをなき旅路よ出儀を討んとの心如何よも殊勝あるよより聞濟てい遣すあれども家來よても供よ召連るおやと尋ねらるゝよ民之助い首を上私し父存生の砌り薩州の浪人よて大力無双なる若黨を召抱へい處其者素生賤からず依て來後の節姉あるお梅よ娶合ひ樣遺言よ隨ひ姉聟よ仕つりい在野鹿十郎とヤ者を同道仕つり度是亦ゆ許し願ひ奉つるとヤ述けるよ太守もゆ感ありて其者い先達て予も武勇強力あるを見たるゆゑ渠を同伴あさゞ若年の其方よてを安心あり其鹿十郎とやらも呼いへと有よゞ早速ゆ前へ出けれゞ大守い鹿十郎を見られ汝民之助よ力を添大刀七郎右衛門と討取歸國すべしとヤい神妙あり首尾能本望を達すべし許しの墨付い汝よ渡し證間何國よ於て敵を討取とを其國の領主へ頼みの墨付あるよより然樣心得よ又此一腰い

廉十郎
大力なる顯さ

備前助定の作あり引出物より民之助へ與ふるゞ又此刀い丹後藤國の作よて切味宜しけれバ汝より取らする兩人とも近ふ〳〵とあるよ民之助鹿十郎い只平伏おし居て恐れ入奉つるとゞ時大守おい如何思いれけん直と立上りさま當國の刀を拔放し鹿十郎覬念せよと切付玉ふゞ有合ゆ諸士いハッとバかり驚きしよ鹿十郎い遙よ後へ飛退りしかバ太守い續いて追討れ今鹿十郎が樣より底へ飛下る所をコィと切付玉ふよ果い隙さず窓の踏脫石の四尺餘りあるを引立あがらよ受止て私し儀不禮の段い何卒敵討の後まで御宥免下され度と色も變せず述ける

よゞ太守よい徐々と刀を納め給ひ天晴強勇と云ひ劍術手練其伐傾よてい彼の大刀を討取んと事最長かるべし如何よも汝等が願ひ予を安心して差許すとゞされしよ鹿十郎い大地よ平伏し有難き殿の御厚志恐れおがら私し兩添ひい上は大刀を討洩しいんといよをいまじと云う樣から長岡帶刀い白木の三方へ謹盃を乘て自身其所へ持出來りしかバ太守バ民之助鹿十郎へ謹盃を下され又旅の用意として金子二百兩賜いるゞ其厚恩心魂よ徹し民之助鹿十郎の兩人い涙の流るゝを覺ゑず暫時兩手を突て居たりしよ又太守い民之助よ向いれ其方若年なれバ今より十ケ年の中よ儀を討取て歸國すべし決して急く事勿れ浮田の家い其儘よ差積間然樣相心得よ又途中よ於て路用等左支への儀もあらバ其所の領主へゞ立て借用致し其旨帶刀の方までゞ通すべしと有けるよ何から何まで有難き仕合とに禮ゞ上に前を下り夫より直役

の人々へ今日は前よて尾首能御暇下され殊よ拜領物ありし儀よ廻り歸宅をあして民之助鹿十郎の兩人い母お道并よお梅へ替る〳〵よ今日首尾能浮暇を五いりし事どを委細よ咄しければ兩人を有難涙よ悲たりしが是より吉日を撰み母のお道い鹿十郎へ婚儀を勸めると雖も敵討の後よ兎も角をすべしと否みけるを然樣あつてい安堵成敵るよより是非〳〵祝言ゞ擇まれよゞ再應勸めけるゆゑ徐樣あく引受自出所婚儀を擇せければ母お梅の歡び言バかりあく民之助を假よ安心なし森より鹿十郎を兄とゞ稱しける

○鹿十郎民之助敵討出立の事
并諸國巡歷大坂よて敵よ出逢事

扨も十一月始めと成しかバ次第〳〵よ寒氣お向ふゆゑ母娘とをよ旅の憂を思ひ遣りて案じけれ其民之助い若年の勢ひよく鹿十郎とても寒氣あと厭ふ者よあらず頓て支度を調ひければ當所の氏神と崇めまつる清正朝臣の廟へ參詣して何卒敵を討せ給へと願念を總夫より吉日を撰みて首途なしお道お梅も途中迄見送り又家中の諸士并びよ浮田の門弟共も大勢よて送り出長旅を慰労各自餞別等を贈りて一獻を酌替し國境ひよて皆々よ別れを告行方定めぬ旅あがら先中國へと心ざし安藝の國へゞ赴きける斯て爰よ三日滯留して宮島へも參詣あし敵の在處を探れ共何分定め成されば備後尾の道より備前國よ到り岡山よ滯留あし論伽山へ

參詣して武運を祈り夫より四方を探し求め爰に七日處彼に十日と足を止め道々名所舊跡も見物しながら探しけれ共未だ手懸りをあく只徒らに月日を送りしに民之助い心中焦立樣子あれば鹿十郎い種々慰を慰めながら攝州を廻り兵庫に懸り三年目に て大坂へ出けるが大坂い人乃出入を多く殊に諸大名藏屋敷有る處あれば爰に暫く滯留せんと上堀町の旅籠屋宮本屋平助方へ旅宿あし九州邊の武士あるが大坂見物に樂りたれば暫時滯留致し鹿に慰みげるに主平助い篤實ある男故種々に待遇爰に兩人い止まりて藏内者を頼み日々名所舊跡を見歩行つゝ凡十五日程居たれども似たと思ふ人にも逢ざれば大坂にていあるまじきにより此所を立出んと思ひけれども未だ四月を上旬にて日並も殊に長閑あれば二人い天滿の天神へ參詣せんと深編笠に顔を隠し行通人々に心を付て歩行しに天滿橋の彼方より乘物二挺引續き來りしが是いた城代の使者の躰あるに片傍に寄て思い ず駕籠の中を見れば先なる駕籠い立派ある若き男後の駕籠い豊計らんや千辛万苦して探す大刀七郎右衛門なるに乃鹿十郎い彼れと躍り上り聲を懸んとせしが万一人違ひにやと能々見るに右の頬に痣有て如何にも大刀に相違あし痣い何時ぞや我拳にて打たる時出來たるあるべしと思ひ定め民之助に駕籠の中を見るべしと言に民之助い是を見て何樣大刀に相違あしアヲ嬉しや來年の夏の醫大刀七郎右衛門殿と言あがら駕籠の梯に手を懸ければ駕籠の中にて い大いに驚くと雖も彼

と落付我い大刀七郎右衛門とやらにあらず人違ひして後悔すあ駕けなくも御城代松平和泉守の使者なり不禮致すまじ其處退て通すべしと言に鹿十郎い呵々と打笑ひ是い大刀卓性あり你を探ねて三年目爰にて逢しい天罰なるアイザ尋常に勝負せに彼是なさば此鹿十郎が一摑みにあして呉んずと大音に呼はれば往來の者いソレ敵討よと大勢馳集り四方の見物山の如くあるに大刀い今さら逃隠るに處もあし然共不敵の者あれば遁るに丈い言遁れんと我其大刀七郎右衛門にあらず大脇玄蕃と云者なりと爭ふ最中先なる駕籠より三十歳位の侍士立出て鹿十郎民之助の二人に向ひ拙者儀いた城代の用役篠本六郎左衛門と申者今日主用にて天滿へ罷越の處只今承まいれば添役ある大脇玄蕃を敵と名乘るれども万一人違ひあれば麁忽の至り其許方の爲慰かるべし又假令玄蕃が七郎右衛門にあらせに主人の用事い將軍家の御用なれば其公用相濟まで暫時相待れに公用濟あば玄蕃とても敵の覺えあらば尋常に勝負致さすべし夫迄は拙者が預るふより其許方い此橋に待居給へ今日来到迄にい我々引渡玄蕃を其許へ相渡すべし是を承知あらば主人へ申立表向敵討を致さすべしと事を分たる篠本が言葉に兩人い承知あし概略敵討の仔細を語りければ篠本も道理の儀なり必らず違約あるまじと云に爰大刀を見遣して通しけり然ども一旦武士と〳〵が言葉い金鉄あれば今日こそ年來乃本懐と遂る時節到來し民之助鹿十郎の兩人天を拜し地に伏して悦び聲ん物ぞあし然

ゞ四方の見物い是を聞敵討い来の刻よ延びたり後よ来つて見物せん皆散々よ別れけゝ故民之助鹿十郎の二人い刻限と見るよ未だ巳刻なれゞ約定までい二時も間のある事故旅籠屋へ立戻りて諸拵定をなし何事を設よ心の残らざる様身軽よ出立亭主平助を呼で是まで世話よ成し礼を除我々が身分を隠し居たり共實い敵討の者なりと云よ亭主を感心あし然ゞ本國を遠らるゝよう祝ひ進らせんと酒肴を持出盃盞を取交し酒も程能飲まゆゝ民之助鹿十郎い拵定残りの金子を五十兩宛分て二人胴巻よ入下よい鎖り帷子上よい黒羽二重の紋付を着て身軽よ出立早午の刻なれゞ領て約束の時刻なりと主人よ暇を告此家を立出天満橋指て急ぎ行

○敵討約定天満橋よて待合せの事

幷鹿十郎民之助災難の事

時よ寛水六年四月四日民之助鹿十郎の二人い國を出しより茲よ三年艱難辛苦あし諸國を回歴〳〵て今日國らずを敵大刀よ巡り會既よ名乗かけし時諸司代の家來篠本六郎左衛門の扱ひよ因て是非あく時刻を延し一旦大刀の見遁しれれども猶約束の時刻來るゆゝ二人い再び天満橋に到りて敵の來るを今や遅しと待所よ嬬て来の刻も過日い追々西山よ傾き殆ど申の刻よもなりしかど様本い大刀を同道せず尚を待其〳〵皆沙汰をなかりしかゞ二人い切歯を

あし扨い渠等よ欺かれしか武士の言葉よ二言あしと思ひ時刻を延せしい我々が過ち卑怯来の狡の奴輩あり今大刀を遅さゞ又何時の時よか打事を得ん民之助來るべし浮城近く進とて横子を見聞せんと鹿十郎い先よ立ち城の大手先よ來りて誰人よか篠本を尋んと思ひ頻ひ居たりけり此時鹿十郎い三十五歳民之助い十七歳血氣盛りの若者あれゞ民之助い思いず進みて大手の橋を渡り越升形よ入て面番所の前よイみ往來の人よ眼を付居るよ番所より通れ〳〵と三聲四聲々と掛けれども國武士ぬゝ城の泥を一向よ弁まへざれゞ巳の事とい氣を付ず居たるよ番所より六尺棒を持來り何者あれゞ番所の前よ立はだかり殊よ鉢巻をなし襟を掛て帶刀したるい何の出立ぞや扨い御城内を伺ふ曲者なるべし捕押へてさし出さんと騒めくよ民之助い漸々心付私しどもい決て怪き者よあらず御城内よ大刀七郎右衛門と申者あり是い父を討て立退し者ゆゝ諸方相探しい中今朝出會勝負せんと名乗掛し時今い浮用先よ付秘刻立合べしと約束あし天満橋よ待ど雖を今よ來らず依て此處まで罷り越たるものありと言よ番人尚々怪みゝ城内よい大刀と言者決てあし是汝等偽りゝ城内を伺ふ曲者ならんソレ引縛れと言つ〳〵無二無三よ打て懸るよ民之助い是非あく是を支ゆる体を鹿十郎い遥かよ見て大よ驚き飛が如くよ駈來り大音揚卒爾ゞし爲給ふあ方々と云とも逃り切たる番人共一向耳よを聞入れず追取籠て召捕んとあす故餘儀あく鹿十郎を勇を顯し民之助を助けんと近寄者

を取てハ投退け拂ひ退け暫時御猶豫〳〵と聲を限りに制すれども追々役人ハ馳集りナニ狼藉者逃すなと突棒刺叉振廻し四方を圍んで打懸るに兩人ハ弱に臆さ大事の前の小事なれて召捕れんハ口惜と今ハ是非なく一生懸命唯逃んと働くに尙城中よりハ人數を繰出し搦め捕んと取卷を鹿十郎ハ樣ての大力多勢を物の數とをせず前後左右に投散し勇を振ひて働けども何分多勢に隔られ民之助を救ふ事能ずと殊ふ同人ハ僅十七歳の小腕と云加之公儀の役人と思へバ兩刀をも抜ず唯來る者の棒引手採て防ぎけるが今ハ力も疲足元も四度路に成るを數人の組子ハ得たりと附入難なく民之助を組伏折重り〳〵今や縄を掛んとなすを鹿十郎ハ遠目に見て南無三寶民之助を生捕れてハ叶ぬと獅子の怒りを顯ハして七八十人取卷たる組子を捕て人礫てに打付〳〵荒に荒て圍を馳脫今民之助へ縄を懸んとなす組子の襟髮引掴み七八間を投出し近寄る者を蹴倒しければ皆々驚き逃散間に民之助を肩に引懸一方の血路を求めて走らんとするを大勢後ゟ尾來り行先〳〵の木戸を打ソレ曲者を逃すなと大坂城内ハ鼎の沸が如く騒動大方ならざりけり然れバ鹿十郎を最早遠るゝに路なく如何ハ爲んと四方を見るに早晩日さへ暮果て四日の月ハ端山に入らんとして空もほの暗けれバ城中には夥多提灯を照し增々捕手の人數を繰出し唯一人の鹿十郎を數百人にて十重二十重に取圍み今ハ蟻の這出べき隙間をなく其上民之助ハ所々打疵の痛みにて歩行も出來ざれバ餘儀なく是

を背負居るゆゑ洗石の鹿十郎を途方に暮たる機天孝子を助け給ふにや俄に大雨車軸を流すが如く降來り咫尺の間を見分らざれバ鹿十郎ハ打悅び此間に一方を潛り脫足に任せて逃延つゝ美濃路の方を心ざし晝夜を分たず走りしかバ漸々に近江の湖水端迄で來りしが衣類ハ降續く雨に潤髮ハ逆に成り鹿十郎ハ身体共に勞れ背負たる民之助を半死半生なれバ暫時村外れに休みて介抱なし懷中を見るに肌に付たる細川侯の墨付バかりにて多くの金ハ失ひけるに民之助の懷中を見るに是又失ひて金子ハ少しも無りしかば鹿十郎ハ只忘然として惘れ果如何あれバ斯七郎右衛門の遲強さや迫々巡り逢敵を討んとあすに至りて珍事起りしハ未だ時節の至らざるか然るにても大坂城内に居る事ハ相違あ玄音の孫讃ハ乞食に成て仇を報ひし例しもあり今一錢の路用なく其城内に居るを見遁さんは口惜き次第なり然バ斯こそあさんと獨腹の中に觀念して民之助に眞腹を咄すに只口惜やと言のみにて涙に口籠りしかバ鹿十郎ハ弱る心を引立んと聲を荒揚如何に民之助腑甲斐なし今目前に敵の在所を知し上ハ其仇を一旦遂すとも又討取事ハ間近きにあり心を慥に持べしと叱り付るに民之助ハッと言て心を取直し何さま我あがら女々しかりし詞言の耻かしさに然バ再び敵に出逢本望を遂しなんとは云ものゝ路用に盡たる上ハ我が着類を賣代になし是を少しの足に爲べしとサセバ鹿十郎ハ頭を振最早夏季にありしとハ云ながら汝ハ痛み所あり衣類を賣ずとも此着

込を貰へ少しの代償よい成べきよより其事い心配するよ及ばず暫時休まへ百姓屋なりとを頼みて今宵は一宿せんと立上り又々民之助を脊負て家ある方へと急ぎよけり

○浮田民之助手負難儀の事

幷鹿十郎民之助非人仲間へ入事

扨まて鹿十郎い其夜百姓屋を頼みて一宿なし翌日い殿より拝領せし太刀を殘し殿さ錐帷子二ッを賣拂ひ金子よあすと雖も片田舍の事故思ひの外金高よあらず漸々金子三兩を得て民之助よ藥を與へ此家よ二三日滯留を願ひと雖も杆訥よして利合分らず滯留を除さいれば餘儀なく此處を立出けるが民之助が痛み處日々よ重りて何分一歩も運び得ざれば鹿十郎甚くも當惑なし敵大刀の在所を知ながら空しく日を過すい本意ゝ非ず去りとて旅宿を取民之助よ養生させんとをあらず且い大坂城内を騒がせたれば此上如何ある無實の難よ逢んを知ず依て一旦身を落し姿を變るよい加しと思ひ民之助よ此事を云聞せけるよど兎角もして敵を討し給いれ然れども義理よからまれし兄上よ難儀を懸るをヤ樣あき不仕合の次第ありと男泣よ泣けるを鹿十郎い呵々と打笑ひ又して女々しき詞言い省慮れよ斯心弱くてい敵を討事覺束あしと諫め勵まし頼て又民之助を脊負近江美濃の國境ある木枯堤みと云ふ處まで來るよ爰よい多く非人集り居て中よ小屋頭ある小車の源治と云ふ者大勢の非人の世話をな

し貰ひの少き者い夫々よ錢を貸與へて其日を送らせけるよ彼親分〳〵と尊敬せられたり此源治い非人あがらも弱きを助け強きを挫く心ある者ありしが今日い天氣を好四月八日い佛の誕生日あれば非人共貰ひも澤山ありしとて皆々寄集り酒を呑み樂しみ居たる處へ鹿十郎は通り懸りて是幸ひと大勢の非人等〳〵向ひ各々方よお願ひあり此間濟下さるべきやと云ふゆゑ一同振返り見るよ身よい破たる袷衣を着したれ共人品能男一人の若者を脊負居るよど非人等い口々よ何の用あるや我々い野伏故町人方のお頼みとあるい顯人の生膳でも賣て貰ひたいと言るゝとかと中よ鹿十郎猶叮嚀よ我等い奥州邊の百姓なるが其藥と嫌ひ兄弟二人連よて上方見物よ來りし處途中よて盗賊よ出逢殘らず路用を取れ殊の外難儀致す而已か弟い數ケ所の打身よて一足を歩行難叶ゝず漸々此所までい脊負て參りたり然ど此先路用もなければ今日より各々方の仲間入して弟が介抱致し度何卒此段承知下さるべしと餘儀なき体よ頼みければ彼の小屋頭の小車源治い是を聞夫い〳〵嘸かし難儀あらん誰しも困るい同じと非人とてを腹からの者い少く皆ば前樣の樣な譯柄より斯ある者多く殊よ病人でい尚々難儀成れませふ汚穢しくを此小屋い幸ひ此程明たれば是へ還入て養生を成れましと實義の見ゆゝ言の葉よ鹿十郎い悦つゝ早速の御承知忝けあしと懐中より二朱金一ッ取出し是い少々成共皆々樣へ酒一ッ差上たしと云よ非人仲間い叱驚あし昔しい見たとも有た金何

して此樣よい入ませぬと辭退をなせバ鹿十郎い無理よ渡さんとするを見て小車源治い是を止め先々夫い暫く預り置て永雨でも降た時よ遣れあバ皆々を悅バん二朱一分の金仲間中でい容易よ見る事も出來ません依て私が能樣よして進ずる程よ何事よ寄ず私よ任せて置れよと言ゆゑ其意よ隨ひ兩人い爰よ足を止めしが仲間の非人等い奥州の兄弟〳〵と呼何時か名の樣よある中廿日程も日を過し四月を末ふありけるよそ民之助い少し宛快氣方よ趣きけれ共未だ足腰とも痛みて立居も出來難く然ども敵大刀い其後如何致せしや且又彼の時篠本ふ欺かれたるい實よ口惜と兄弟窃かよ語り合日々ふ切齒を爲居たり然るよても民之助の痛み所捗々敷く快方らぬバ餘り心の焦立まゝよ鹿十郎い民之助を留守よ置大坂へ赴きて樣子と探らんと全く非人の躰よ出立四月廿八日の朝病人を小車源治始め一間の非人共へ賴み置跡よも心い引れあがふ敵の樣子を尋ねんと大坂指て立出しか餘りよ道を急ぎ去ゆゑか石よ躓き左りの小指を痛めければ見るよ爪剝れて血の流るゝよゞ鹿十郎い何か心よ懸りしが僅かバかりの疵の結ゆる迄をなしと其儘猶を急ぎて行けるい後の歎きの前表と神あらぬ身の知由なく我が行方へと急ぎしい實よ是非もあさとどもあり

○大刀七郎右衛門民之助を闇討の事
幷鹿十郎悲離非人頭小車源治深切の事

扨も民之助い鹿十郎の留守よ只一人我が身の不自由あるを詫ちつゝ敵大刀の樣子如何よやと鹿十郎の歸り來るを指折算へて待あがらも白地よ心の中のとどもを誰よ斯よと語ふべき者をあけれバ鬱々として日を過しける中早五月を四日なりけれどを鹿十郎い歸り來らず猶を案じ煩よ折から仲間の非人等い端午の宵節句なりとて諸方へ貰ひよ出跡へ殘りしい小車の源治バかりなりしが源治い民之助の小屋を見廻りコレ〳〵兄弟の衆や兄子い大坂で大分手間取い何か能咄去でを有ので御坐らふ程よ其樣苦憂〳〵病ひの事を思ハずとを些端居あどして堤を通る人でを眺め氣を慰められよ今日い天氣を好大分人が彼處此處へ出懸るあり と深切の言葉よ民之助い打悅び何から何まで浮世話よ預かる此方の恩厚情必あず忘れい致しませぬ若世よ出るとあらバ屹度恩を報ずべしと涙を流して點頭バ源治い四邊を掃あがら否恩の世話のと言事があらうか非人仲間へ故意と遣入るゝよい何か仔再の有事ならん來だ嶽若な其身の上假令仔細いあいよしろ是から先が長い浮世町人あどよもあれる事故さあ〳〵せずと身を達者よするが上分別先々此方へ出やれと楚へ民之助を助け乘往來近くへ引出し又愛い座敷も近ふて氣ゞ晴る非人の身の上い青天井を屋根として大地を床とする身あれバ錦山い富士の高根泉水の大海諸々乃立木い植込錢一文でも呉る旦那い激宿の番頭呉ぬ奴等い家來とも思ふて暮す心よさと民之助が鬱氣を晴さんせと放氣交りよ咄しながら向ふ

の土手の人通りを眺め居るゝ深網笠ゝ朱鞘の大小濃黄縮の紋付着たる侍士今民之助と源治と喃し居るを篤と見止元來し道へ引返すを此方の二人い一向ゝ心付す猶を咄しゝ身の入て日の暮るゝを忘るゝべかり非人源治い心付我獨長舌居て其方い嘸退屈あらんとれ喰事の支度して取らせませふ今日い他の奴等い遠へでを行居たと見て来た一人も歸らぬと言つゝ民之助を小屋の内へ入れ喰事拵へして已を喰民之助へゝ喰せる中ゝ日い全く暮果四日の月影雲間ゝさしかゝれべ源治い燈火を小屋の内へ點んとするゝ油少しをあく我一人あゝ油を入ざるが病人のあると故一走りと言つゝ里有方へ馳行たり跡ゝ民之助い只一人先月四日い敵ゝ出逢し所後本ゝ計られて大刀を討洩せしのみか思いぬ難ゝ遇し口惜しさ次上ゝい草葉の蔭で嘶ゞ腑甲斐あき者と思されん殊ゝ三年以來旅狀ゆゑに年忌さへも弔いず不孝の罪い如何べかり又國ゝ殘りし母上い常々獨ゝて惱れしが猶渉違者ゝ在するか姉上いに無事ゝやと親方行末を案じ居たる機から小屋を指て來る者あるゆゑ源治殿か又い兄上かと内より聲を聽れども一向答をあきゝより何者あるやと小家より道出し月影ゝ透し見れべ別人ならず敵と狙ふ大刀七郎右衛門あるゝぞ汝と言さま用意の一腰取んと小屋へ遁戻るをつか〳〵と踏込後より物をも云ず一刀あびせしかべ何かい以て堪るべきゥンと仰向ゝ倒れあがらも刀引切付るを小癪あ奴と又踏込肩先四五寸切下るゝ無念〳〵と民之助いのた打廻るを大刀

い股へ刀を突通し確かと押へ能聞ゝ己と敵と狙へ共最此あつてい叶ふまい先日汝ゝ天滿橋で見當られたが百年目其場い同藩篠本が云延たれべ安堵せし其甲斐もあく篠本めが汝の肩を持をつて約定通り勝負せゝ卑怯者めの未練のと四の五の言中刻限の遲くあつたゝ汝等を大手先ゝて曲者と捕へる騒ぎゝ是幸ひと思ふゝ汝等い逃延くさう夫のみあらず漸々といまつた屋敷を急暇再たび元の浪人と返す〳〵も忌々しい汝を生して置時い大刀樣い枕を高く寐られぬ儘ゝ何かして殺し呉んと思ひし所今日幸ひゝ你を見付宜さま此所へと踏出せしが勿々强氣あ鹿十郎へ容易ゝ手出しい浮雲もの欺討ゝと氣を配り樣子を聞べ留守とのと弼ゝ都合は最上と今こそ是へ來りたれサア立上つて勝負しろ何ぢや〳〵口惜か其は道理ぢやァレ悠然や今ゝ冥土へ鹿十郎も暇を取せて遣る程ゝ二人三途の川端ゝまお〳〵迷つて待て居ゝ大刀樣が百万年の後ゝ死だら其時い敵と名乘て討れて遁ふと言度まゝの惡口たら〳〵股の刀を引拔て首打落さんとあす處を病手あがらを民之助は闇々你ゝ討れんやと刀打振死ゝ者狂ひゝ聲々て切付る孝心凝たる切先と大刀思はず受損じ膝の番ひを切裂れ溺狂あがらを大きゝ驚き無性ゝあびせる一刀左の肩より切下られ數ヶ所の痛手ゝ民之助いゥンと共儘悶絶たり因て大刀い止めを差んと立寄折から人の足音あずゆゑ其間あく早々彼方の藪へ身を隱したるゝ小車源治い途中ゝて逢し鹿十郎と俱ゝ歸り來りしが小家の此方ゝ人の倒れ居る

様子を不審端山嶺れの月影より遠し見れば民之助なりし故鹿十郎い驚きて抱き起すより惣身血より塗れ居たるより是い何者の仕業あるや今一足早くば此事い有間敷よと呼べど叫へど疾風の外より響へる者ぞあし小車も倶より取付歎しが彷徨の水を持來り口より泯がんと爲を鹿十郎い押止め手負より水い無用ありとて國を出る時始より貰ひし氣付を取出して口移しに含まするより血筋の緩の通せしよや民之助いはつと一息出したるより已大刀遥さしと聲を立れば鹿十郎い驚きナニ大刀とあコリヤ民之助心を慥より持べし鹿十郎が歸りしぞと言ふ聲耳より入たるよりやヤ〻兄上遅ありしぞ今大刀が來りしなれど口惜や病ひより足腰立ず討洩したる殘念さと云さへ息い絶々たるより鹿十郎い涙を流し扨々武運を盡果たか三年四年の艱難辛苦適々敵より出會ふ日い我れ居合さず闇々と民之助をい返り討よさせたる事の口惜さ非道の者の榮えるい神を佛もあき事かと彼を怨み是を怒り前後不覺より歎きしが頓て民之助の耳より口を寄れ我れ傷身より成替り敵い必らず討取はどより迷いず成佛あとべしと云聲魂ひより通じてや民之助い莞爾と笑ひ其儘息の絶ければ鹿十郎い暇時忙然として居たりけり非人頭源治い始終の樣子を見聞して俱より涙より呉たりしが鹿十郎より打向ひ扨々貴所方い始めより高貴の人とい見たれ共敵討の爲より艱難あさるゝとい存せぬと線て樣子を傷咄しあらば非人い非人丈敵を探す傷力ゝを成べきものを今さらより奚止の事より成行たりとい言をの〻何時まで云とも同じ醇言第

公樣の死骸を如何よもおして埋葬進らせんと實意ゆ深き言の葉より鹿十郎い打喜び種々厚き傷世話ゆ相成り添けあくに禮い詞より盡されず殊より武士も及ばぬ清貧實より以て感じ入方一某し世より出るとあらば其節山々傷禮をヤべし何い兎もあれ弟の死骸を片付度を手當をおし然べとて此處へ埋ひべきよあらず國元より渠が母姉在故切て骨ありとも見せ度と思へとも最早金より代る品もなく僅かより太刀二振あるも是い殿より拜領の品あれば手放す事もあらず如何いせんと思案より呉し体を源治い見て何樣二振あらば其中一振の太刀を私しより預けあれ金子を調へ差上ん然とて私しが所持致すより座おく此村で口利の庄屋庄左衛門殿と云い遠引のある傷方故其人より預けて金子を借受此處の始末と取片付傷國元へ傷歸りの時金子を此方へ傷返しあれば傷太刀い何時まても差上んとヤより鹿十郎も外より爲術あければ段々の傷深切然らば宜しくに頼みヤと源治より太刀を渡しけるヤ源治い直樣庄屋の方へ持行て概略を物語り金子五兩借受來るより鹿十郎い大より悦び近隣の山寺へ頼みて民之助の亡骸を火葬より なし又源治始め非人仲間の世話よありし禮として二百疋贈りけれども源治い是を受ず是より 國元迄い長の旅路用を多分より入ものあれべと押戻す故其意より任せて支度を調へ一先民之助が白骨を國元へ届んものをと肥後國熊本を指てゞ急ぎける

○鹿十郎内々國民之助が死去より母慈傷の事

井鹿十郎尾張へ志さし再び出立の事

扨も肥後熊本なる浮田傳五右衛門の後家お道い娘お梅と只兩人留守ゑ殘りて傳五右衛門の亡跡を弔ひ四十九日や百ケ日何時しか來る一周忌と早くも循環年月ゑ佛事供養を爲ながら明暮民之助鹿十郎の長旅ゑ頻ひあき樣ゑと神ゑ祈り佛ゑ念じ指折算へ今日い便りのあるとか明日い背尾能敵を討て歸國するかと案じれば一月の日も千歳の思ひをなして暮す中早くを三年を打過て寛永六年七月十三日い亡魂の來る夜とて皆家毎ゑ精靈を祭りけるが浮田家よても傳五右衛門が精靈と祭り先祖の同向あし居たる處ゑ案内ある故取次の小女立出何方よりとゆゑ我は佐野鹿十郎ありと言聲奥ゑ洩聞なければお梅い玄關へ駈出しに歸りあるか嬉しやと心浮々女と呼洗足の湯を取らせつゝ浴足を洗ひて進らすべし母樣ゑ我夫の歸りたまひしと云ゑ母のお道い俱ゑ玄關へ出來たり先々無事で目出度〳〵シテ民之助い何處ゑおぢやといいるゝ詞ゑ鹿十郎い胸も張裂思ひを忍び何か其場を拵らへて奥へ通れべお梅い嬉しさ母をいそ〳〵おしあがら先い衣類を着更られよとの差圖ゑお梅が持出る帷子い脱更鹿十郎い頓て其坐ゑ直り久々浮目ゑ悪らざりしが母人ゑいに息才我が妻も遠者の樣子滿足ありとの挨拶も濟や濟ずゑ母親い如何ゑも樣子の不審面民之助い何とせしや同道いせざりしかと問ゑ鹿十郎いハッと俯向迫來る涙を呑込べ母い彌おろ〳〵聲コレ鹿十郎ゑ悴い敵

大刀の爲ゑ返り討ゑを成たるやと云れて猶さら答へも出來ず鹿十郎い默然とつゞみ居るゑい妻のお梅も傍邊より顔さし覗さて打案じ弟ゑい如何致せしや如何ゑ〳〵と右左問詰られて鹿十郎い洩おす涙を漸々押へ嗟云も今さら胸苦しく然とて云いすゑ濟ことあらず先一通りた聞下されよと三年以前ゑ國を出諸所種々ゑ彷徨て艱難辛苦の有樣より大坂ゑて敵大刀ゑ出會時刻を延し圖らず災難ゑ會漸々其場を逃延近江路より美濃路へ掛る折から非人と逃ゑ零落木枯堤ゑて我が留守中民之助ゑ敵大刀の爲ゑ返り討ゑありし事云々ありと差出物語り火葬ゑあしたる白骨を取出しければ母も娘も且驚き且歎き暫しい涙ゑ咽かへりしが民之助の骨を取上恩知の數々操返し〳〵お道い狂氣の如くあるゑ鹿十郎い涙を拂ひ今さら歎きても是非おき民之助が薄命此上い兄上民十郎殿の行方を尋出し供ゑ大刀めを討取亡なる怨みを晴しやべし就ては我又明日ゑも此所元を發足おさんゑコリやお梅今宵い七月十三日あれば亡魂を母公を大切ゑ看護給へ頓て吉左右を知せゆさんゑ一日を爭そひしとて詮なければ切祭る爲一夜通夜して明朝出立と言を聞母親い首を振否々一日を爭そひしとて詮なければ切ては十六日を過して再び發足あれとゆゑ鹿十郎を如何樣路用おとの才覺をあれば仰せゑ隨ひいんとて夫より路用五十兩外ゑ用意金三十兩調へ同月廿日熊本を出立おし彼の小車源治へ預け置たる拜領の太刀を受戻玄且又禮ゑを遂るべしと約束せしとをあり其上那の邊ゑ

大刀の隠れ居るを計り難しと思はしかば一先大坂へ立寄密かに薩本に逢て聞き所同人の情に
て大刀の在所を粗分りしかば兎角も義濃屋張へとゆきし足に任せて急ぎけり

○尾州名古屋にて鹿十郎劍術稽古見物並言の事

并山田外記門弟等と試合の事

扨も佐野鹿十郎い夫より本枯堤へ到り非人頭小車源治に逢て段々の禮を述太刀を請戻し金子を倍にして返せしに庄屋い是を受取ざるゆゑ有の金子に猶又五両を添え源治へ遣し是にて足を洗ひ汝も町人に成るべしと言に小車い斯多分の金子を賜はるべき謂なしと辭退なすを強て是を渡し又線をあらば再會せんとて此處を立出猶又道を急や名有屋の城下を通りし處武士小路に山田外記と云る劍術の道場あり鹿十郎も好む道と云殊に太刀が隠れ居るやを知るべからずと道場の中を覗き見たるに何れも若き人々あるが未だ未熟にて其太刀筋の定まらざれば慎み深き鹿十郎も思ひず微笑なしたるを門弟共見咎め理不盡に道場の中を覗き何故に笑いるゝや貴殿とても習ひ始めなれい斯の通りあるべし夫を笑いるゝ上からい定めし腕有に腕前ならんにより道場へ入て一試合致されよと五六人の門弟立出て罵りければ鹿十郎い大いに遜謙なし某しが劍に心得遊ひ平に有免下さるべしと謝り入るに乃思慮あき若者共集い武士あれ其劍術不鍛練故詫入る事と心得嘲り者にせんと誰を來に彼も來よと門前

へ呼出し種々様々に嘲哢あしけれども鹿十郎い望み有る身なれば只々堪忍なし何分に宥しあれとヤを聽したりと心得笑ひたる遲報に大勢して渠を打据呉んずと寄集り竹刀を持て打懲るに鹿十郎是い無体なりと言ひ機先に立たる若者の小手下を搔潜り持たる木太刀横取に見なしが左右より打込太刀を奪止〳〵と受止打返し忽ち四五人の竹刀木太刀を打落しければ是い叶いじと一同に天窓を抱へて逃出すを山田外記の高弟尾崎倉四郎と言者此体を見て耐へ兼竹刀追取駆出さず鹿十郎の眼向眼がけて打て掛るを此方い閃りと身を躱し二ツ打三打戦ひしがいかで尾崎の及ぶべき鹿十郎が打込太刀稲妻の如く目先を遮りたぢ〳〵と遂る隙を左の腕をのべて尾崎が脊筋を取るよと見えしが七八間向へ投付たる有様さあがら小兒を扱ふ如し續いて掛るい花本强四郎勇友吉郎と名乗是又剛人とも免許の高弟なるが左右より打て掛るを鹿十郎い心得たりと飛違ひさま足を上て强四郎の腰の邊りをいたと蹴れば强四郎い其儘俯向に撞と倒れたり勇い是に懲をせず打て掛るとかッキと受止一上一下と七八度戰ひしが鹿十郎い一盛高くヤッと叫びて友吉郎が右手を充分打けるに竹刀をがらりと取落し後をも見ずに逃行けり斯りし程に若き門弟中い免許取の三人手をなく打負たるを見て猶々殘念に思ひ十五六人一同に前後左右より打て掛る木太刀と雨霰乃如くなれ共鹿十郎い事共せず四方八面に薙立〳〵追捲る体風に木乃葉の散如くばつとばかりに逃入たり此門

前の騒動と聞山田外記い高弟なる吉田周一郎を連て物見の窓より見居たりしが鹿十郎が働き天晴強勇一騎當千と云い此者あらんと感心あし周一郎ょ向ひ貴殿那者ょ論し門弟等を鎖め給へと云ぞょ吉田い畏まりいと門外へ出鹿十郎ょ向ひて禮義を厚くし門弟等の無禮を詫けるょ鹿十郎を早速禮を返し誠ょ以て拙者が鹿忽ゟ門前を騒がせいのみあらず ゟ門弟方へ失禮仕つりいを ゟ咎めもあく禮義を厚くし玉ふい赤面の至りなり何卒貴公樣よりは相弟子樣方へ無禮乃 ゟ詫下され度願ひ奉つりい拙者儀い遠方の者殊ょ用事を抱へし身思いず鹿忽仕つりい段幾重ょも ゟ勘弁ょ預り度と言ょ周一郎を渠が禮義を感じ其 ゟ言葉分ょ過たり師ょていい山田外記詫出門弟等の失禮は詫仕つるべくの處拙者名代仕つりい先々此方へ入玉ひて勞を休め玉ふべしと言ふょ鹿十郎い喜び厚き思召忝けあし然れべ仰ょ隨いヤさんとて内ょ入るょ外記い出迎ひて鹿十郎を坐敷へ通し其來歴を問某しい尾張殿の家士ょ門弟多くありて何不足あく暮し居るょより急がぬ旅ょいへべ寛々滞留あし給へ此來是を緣とあし ゟ懇意ょ致すべしと叮嚀ょ述けるょ鹿十郎も禮を厚くし員ならぬ武士あれ其佐野鹿十郎とヤ須入者は叮嚀の ゟ言葉近來恐入奉つる又此邊通行致すとい私し主人の悴儀五ケ年以前ょ家出致し其後少ゑを便りは坐あく主人い老病何かと不仕合故主人の悴美濃尾張小遊歴せる由灰に承まいりい間呼戻さんと當國へ詫越いありと素性を包みて咄しけるょ外記を始め門弟中其 ゟ主人の年格好い如何あるやと尋ぬるょ鹿十郎い差支しが是却つて敵の手懸りよをならんと思ひ付其年三十五六歳ょ相見て色淺黒く右の類ょ痣わるが證據ょ ゟ坐いとあるょ成程先月中其人ょい之なき哉と云ふょ鹿十郎を扨い大刀名を變玄て當國ょ隠れ居ると覺ゑたれたり若其人ょい之なき哉と云ふょ鹿十郎を扨い大刀名を變玄て當國ょ隠れ居ると覺ゑたり併し輕率て人違ひあす時い一大事と思ひ名い違ひい其武者修行の流儀い何流ょて ゟ坐いか哉と問ょ山田其い八重垣流とヤとょて拙者と試合いたし度由望みい問面會あして武術の論談ょ及びい處頗る鍛練のものと見受いとあるょぞ鹿十郎其者こそ大刀ょ相違あし併し一且主人の悴と言ひしかべ今更何と言ふべきと心中ょ思案なしけるが一計を運らしヤけるい右の人物い確ょ相違いは坐なくと存じいへ其國餘を立出い節生て再び歸らずいょ付弟ょ世を譲り呉よとヤて家出をたしれべ某し突然と面を合す時い逃去るは必定依て各々樣ょは願ひヤい此事なり拙者義此處ょ在事をは隠し下され試合ょ事寄は呼入傾ょ願ひ奉つりいと云ょ山田も道理ょ思ひ委細承知なして佐藤登之助方へ使者を差立試合の儀係て御望ょ付明日い門弟等へは指南下され度いとヤ入けれべ佐藤登之助承知致せし旨返答ょ及びたり依て其夜い鹿十郎を止め種々ょ饗應しけり

○武者修行佐藤登之助山田の門弟と試合大言の事

并高弟吉田周一郎試合の事

扨も山田外記と鹿十郎の言葉を緩と思ひしゆへ佐藤登之助を招かんと門人等よ談合其用意をおして翌日を遅しと待居たり明れば早朝より門弟等來りて道場を飾り舟鹿十郎を深く隠し覆高弟吉田周一郎を始め勇友吉郎花本彌四郎尾崎倉四郎等免許の者と上席よ居並び其外の門弟達い夫々よ席順を定め凡四五十人程居並び待かけたるよ約束の通り佐藤登之助い徐々入來り客座よ着時山田外記い立出是い能こそ入來ありしぞ未熟の門弟等へは指南下さるべしと挨拶よ及ばしよ佐藤い呵々と打笑ひ御門弟方と試合致すい臆よ窪の向ふよ似て長者なくい間尊公との立合あらば望む處よいと傍若無人の大言如何よも面憎ければ門弟等い心中怒ると雖も鹿十郎が主人の悴と言と故互ひよ目と目を見合せ爪彈きして居たりける此應對の内鹿十郎い透見をおすよ咄しの通り年齢三十七八歳色淺黑く鼻高く頬よ痣有ども赤きあざよて大刀ふあらず依て鹿十郎山田よ偽言を言たるを如何と案じ居たるよ漸々安心おしたりけり扨も外記は其樣子と一向知ざれば登之助を宣敷取扱ふよ佐藤い彌よ附上り大言雑言々ばかりおし然共山田い勘弁おし居たるよ是非〳〵試合をと望みける故山田い周一郎よ向ひ其方佐藤先生よ御立合を願ふべしとすけるよ周一郎い畏まりいと支度をおせば佐藤い是を見て望みとあらば一太刀ゆ指南すさんと道場へ出て二王立よ立たりけり周一郎い憎さを憎しと竹刀持出禮儀正しく立向ふよ佐藤い木太刀取上双方よ分れ暫時位を取合しが吉田い佐藤の隙を見て上段よりヤッと聲かけ打上すよ佐藤い受止おがら竹刀を刎上肩先目懸て打んとなすを吉田い敏くも身を開き佐藤の足を斜めよ拂へば佐藤い隙さず飛上り吉田の眼向切付るよ此方を心得受流し一上一下盛々寳々勝負の程も見へざりしよ吉田い焦つて打込を佐藤い確と十字よ受止双方押合居たりしが吉田い未だ佐藤よ及ぶ者よあらざれば周一郎い追々精神の弱りしを見て佐藤いヤット聲懸肩先を強止と打て飛送りしかば怒ち勝負い見ねたりけり是よ依て登之助い猶々高慢ある面色よて如何よ山田氏は高弟と豫て吹聽あり し吉田殿斯負らるゝ上い外御門人方の手い大方知し者あり若又立合度い五人三人一時よ懸り玉へと言よ勇花本尾崎の三人寸合せ佐藤ふ迎ひ指南願ひと言つゝ木太刀迎取三方より打て懸るを佐藤い心得たりと身を翻すよ二人い空を打是い殘念と木刀取直し一時よ懸るを登之助い左の足を上勇友吉郎を蹴たりしかば勇い仰向よ三間許り先へ倒れしよ續いて打込花本尾崎を右手よ一人受流し左の手を延花本を取よと見る間ふ投付つゝ尾崎の太刀を打落し片手擲よ打据たり因て是又三人共負よおりしかば佐藤い益々慢じ如何よ山田先生八重垣流の總入斯の如くおり此上い他先生立合あくてい叶ふまじと言よ山田い心中怒ると雖も鹿十郎よ頼れし事あれば面を和らげ何さま先生の他手おみ感ぜりと挨拶おすよ佐藤い如何

は山田氏立合給わぬ迚も及ばぬと思いるへやと蜘蛛しければ山田い大よ怒り假令今佐藤は負れべとて一試合せんか併し今三人の者打負殊よ周一郎い我父よりの高弟よして我と對々の勝負あり其者すら登之助よ叶いず然るを我立合負る時い聽の上の聽あり試合せざるよ如しと心中よ思ひしかべ未だ何とも答へざるよど佐藤い如何ゝ〳〵と迫るゆゑ山田い實よ迷惑の樣子よ見ゆし時山田外記が門弟佐野鹿十郎師匠よ代りて佐藤氏と一太刀試合仕つらんと次の間より聲を懸あがら立出たり是を聞佐藤い呵々と笑ひ今高弟方を打据し手此よ懲もせず又出らるゝい片腹痛し然ども望みとあれべ立合呉ん率來れと云よ鹿十郎い添けあくゝんと木太刀追取向ふよど山田を始め門人共鹿十郎の擧動を不思議よ思ひあがらも兩人の勝負如何よと固唾を呑で見物す

○佐野鹿十郎登之助と試合の事

并外記鹿十郎を尊敬の事

然る程よ佐野鹿十郎い佐藤登之助よ向ひて指南願ひいと一禮あず時佐藤い此人を見るよ色白く風眼よして口去まり眉濃く背六尺よ餘り其人品天晴勇士と見ゆけるよど心中よ疑ひを生じ先日山田よ對面せし時斯の如き門弟あるとを聞ず扨は山田め此奴を組み我を負さんとの事成べし然ども何程の事わらん只一打よして我武勇を顯し呉んと立上り鹿十郎とやら一

本參るべしと云より早く打込太刀を鹿十郎い丁と受止じりゝ〳〵と付入けるよ彼方も然者是い仕損たりと再び上段下段と打込〳〵打べ拂ひ開けば附入其疾き事電光石火の如く二十餘合戰ひしがさらよ勝負い付ざれども動もすれべ鹿十郎の方危く見ゆけるよゑ門人等い手よ汗を握り見居たりしが流石よ山田外記吉田周一郎の兩人い鹿十郎の太刀先是迄戰ふ中よ佐藤を五度まで打べき隙ありしを宥したる有樣を見て心中よ舌を卷此鹿十郎凡人よ非ず天晴の勇士ありと心よ譽ず感ろざるもせず見物す又佐藤い鹿十郎を只一討と思ひの外手練の早業よ辟易なし精神を盡して何卒勝を取んと戰ひけれども素より天魔鬼神も恐るべき鹿十郎よ奚ぞ佐藤の及ぶべき然れども此方も八重垣流の妙手を盡しヤツと云樣打込太刀先鹿十郎い身を沈めエイと一聲懸たるよ如何なしけん佐藤い忽ち木太刀を投捨後へ撞と倒れしかば見物の門弟等思はず一同聲を揚仕たりや〳〵と譽たりけり佐藤い倒れし切髮時い起も上らざりしが漸々に遑起しとい雖を何時の間よ打れしや右の腕紫色よ腫上り少しも遑ふと能はず加之倒れし時腰を強く打しかべ遑々の体に支度して面目無氣よ暇を乞旅宿へこそい歸りけれ跡よ山田い鹿十郎よ向ひ扨々驚き入たる貴殿の御手の中かゝ既よ佐藤を五度程打匿よ隙ありしを宥されしと勿々凡人の及ぶ所よあらずと只管よ賞感し給ながら段々樣子を見聞するよ御尋ねの人よい是あきやと云よ鹿十郎心落付成程渠も頻よ癒れ其赤き癒よて其

人よ非ず俤て先生の御加勢とアも嗚呼がましくゐへ共渠が餘り憎き雜言故止む事を得ず斯の仕合御高免下さるべしと云よ吉田周一郎始め外門弟等も一同よ鹿十郎を賞歎し暫く此地よ止まり玉へと勧めけるよより其意よ隨ひ殺よ足を止めしよ人々武術の論談い及びし所劍術鎗術弓馬砲術の話し一ッとして欠たるとあく加之歌俳諧を始め諸遊よも通じたれば吉田周一郎い別て鹿十郎を愛し何卒して當所よ永く止めたく思ひ種々よ深切を盡し折よ觸て止まり給ふ樣よと勧めるを鹿十郎い望みある身あれば永く止り難しと斷るとも雖も彼是と名を付終よ八月中旬まで止められたり然るよ今宵い十五夜よて殊よ快晴あれば山田外記い鹿十郎を饗應さんと門弟吉田を始め尾崎勇花本等を招き佐野を上席として廣坐數よ居並び月觀の酒宴をぞ催しける山田い曾々よ向ひ各々方武道に出精あるい天晴の事よい然れども今宵い月も能晴風とてもあく豊かなる月の宴なれば隨々に心慰の発歌一首宛伺ひ度武の中よ交を備へされば文武兩道といヤされしと醉よ乘じてヤけるよ花本尾崎い是を聞我々歌道い一向心得ざれども俳諧あれば出り形よを十七文字綴るべしと言よ外記何さま發句い十七字よして心をまとめるとあれば又格別よ興あり吉田氏勇氏秀吟を聞せられよとあるよ皆々料紙硯を持出し暫く考へしが頓て各自筆を取一番よ吉田周一郎

月〳〵の月の中よも今日の月

山田い是を見て誠よ感じ入たるあり何さま毎月觀る月あれ共中秋い格別あり日々変る門人方も物改まる時い又夫だけの感覺を備へちるゝなれば月々とい毎日違ひん心今日の月どい改まり行義正しきのとあり名吟よいと言よ吉田い微笑先生の辯談過分ありと言ふ時次よい尾崎と始め四人の者ども先生お笑ひ下さるべしと差出も

尾崎倉四郎

隣りよを客の聲あり今日の月

勇友吉郎

武士もこぶしを摩る月觀かな

花本强四郎

客も待ち月も待得し今宵かあ

山田い皆々の名吟を感じ自分を一句致さんとて案思げるが胸よ浮まじ俤て鹿十郎に一句を望みければ鹿十郎い各々方の名吟の中へ拙者及ぶべきよあらずと辭退しけれども皆々是非よと進るゆゑ餘儀なく筆執て

故さとも同し影かや今日の月

と認め淨一笑下さるべしと赤面至極と差出しければ山田い是を見る筆跡い嵯峨樣よして天晴の名筆あり又發句を吟じ見るよ阿部の仲麿が三笠の山よ出し月かもと故郷を思ふ歌の心よ一對よて旅の宿りも我家も觀る月い同じけれ共故郷懐しと言心あるべしと推察あし外記い殆ども感じ入打返し〳〵吟じ〳〵が嘸々長き旅國をあさるゝからい古郷も離しからん又辭ぬ

る人よを逢たかるべしと山田い筆執をさらく〜と認め鹿十郎へ渡しければ是を見るよ
陰かくす雲い晴たる月覩かあ
とあるよ鹿十郎悦び是い名吟あり又我等が身よ當りし何卒して晴たる月を覩度ものありと宜しく挨拶あると雖も鹿十郎心中よい山田我を脱て主人の悴よ逢んとを思ふ故斯詠じたるあらんが爰と言ふい誠大刀晴たる月い本望を遂て歸國すす前兆ありと我と我胸よ吉凶を考へ心嬉しく思ひたり頓て夜も深更よ及びければ門弟等い暇乞して立歸りけり

○吉田尾州殿へ佐野を吹擧の事

并山田佐野試合ば所望外記迷惑鹿十郎武術手練の事

扨も翌日鹿十郎い外記の前よ來り永々滞留中世話よありし禮を述最早彌々暇立よ及ばんと云よ山田い如何よも名殘を惜み切でい當月中を止まり玉へとヤ居たる機から吉田周一郎今日い使屋形よりの使ありと入來り山田外記よ向ひ先日佐野氏のとをば屋形のば聘に入し慨然樣の勇士なれば何卒召抱へ度間山田外記よヤ通し吹擧致さすべし尤も兩人の試合ば覽成れ度此儀をヤ通すべしとのとなりと云よ外記い是を承まいり一度い悦び一度い驚き佐野氏の心い如何かい知ざれ共屋形のば所望と申あがら拙者儀立合い思ひも寄らず何とて佐野氏よ及ぶべき此儀い扨た迷惑あり併も君命を否ヤべきよあらざれとも佐野氏の某し

よ優りたる儀を御前宜しく御取なしを願入と山田外記い己の及ばざるを少しも隱さずヤけるい誠よ正直の者と言つべし鹿十郎い是を聞是い思ひ寄ざる御屋形樣の殿命冥加至極有難く且山田氏が只今ヤさるゝ所是又此身よ當らざるとよて甚だ赤面の仕合あり因てい殿命よ聽ひヤべき筈なれとも我等儀い慮てヤせし如く望をある身よいへば此儀は何卒御免を蒙り度又試合の儀山田氏卑下ある共某し爭で山田氏よ叶ふとを得ん此儀兎々吉田氏の使取あしを以てば免下し賜るゝ樣願み率つるとヤ居たる所又々尾張殿より使者來りて是非ば目見得致すべしと有よど鹿十郎い斯迄厚き御を辭むい恐れ入る儀あればば目見仕だけい願ひ率つらん然あがら試合の儀い何卒御免下さるべしとヤければ使者い立歸り吉田と共よ此段をヤ上けるよ大納言殿よを鹿十郎を召抱へ度思召けれ共望み有る身と云ふい敵討あどふても致す所存ならんよより强てを召抱へ難し試合い是非共致さすべしとの仰ゆゑ猶又此儀を通達よ及びければ外記い愈々當惑の樣子あり依て鹿十郎い右の趣きと察し猶胸ふ納めて使者よ聽ひ大納言殿の御前へ出けるよ正面よい御籠を下られて居給ひしが頓て御籠の上りし時鹿十郎を近く召れ其方格別よ武術鍛練ある由よ付予が目通りよて山田と勝負試みよと仰有けるよ鹿十郎い慎んで御側の御近習よ向ひ某し機御潛中ある山田氏よ及ぶべき武術ふ之なく以間試合の儀い御宥免よ預りたし然れ共嚴命を背き率つるも恐れ入奉るよより未だ鍛練い

せられ共私し一人よりて是迄學びたる藝術一通り上覽に入奉つらん此儀御取成下さるべしと申上げるに大納言殿聞し召れ然れば故一人よりても苦しからず早々武術を見せよとあるに畏まりいとて御前を下り來り役人へ申て本太刀を乞うけ上下の裾高く取上て廣庭へ飛下り本太刀を以て居合を遣ふに宛から蝶の花に戯れ又陽炎の濱邊に立昇るが如く縱横無盡に遣けるにぞ皆々感じ居たりける頃て鹿十郎い水太刀を旋々と水車の如くに廻しければ己の姿い木太刀の蔭に隱れ眞實に幻しの如く眼にさへ遮らざる有樣なれば皆々舌を卷て感じ何樣巢が武術にても是を切んと附入共勿々及ばぬ事ありと譽る聲暫しい鳴を止ざりける然れば大納言殿御感淺からず次に鎗術を御覽に入るに鎗い九尺と二間とのを持出ければ鹿十郎い又役人に乞て十俵十俵を取寄廣庭へ一間宜に並べ二間柄の鎗を追取立上りしが又遙下つて鎗を擔ヤッと一聲懸て突出すに其鎗先十俵へ突込しと見る間に七八間先へ土俵を投捨次ある十俵を突ていに投捨〳〵十俵の土俵を悉皆く投出せし其早き事飛鳥の如く又輕く扱ふ事明俵を投るに異ならず是に因て又を皆々感色けり次に弓矢を持出し射術を御覽に入よと有るに是又鹿十郎い畏まり奉つると御請をなしたりける

○鹿十郎名譽を殘し東海道を下る事

幷大刀七郎右衛門河越し人足を頼む事

人に生質種々ありと雖も一心茲に居る者い刀能に遷すとかや扨も佐野鹿十郎い尾張大納言殿の御前に於て迫々藝術を御覽に入し處尾張殿を始め諸士の目を驚かし猶此次い弓矢の術を御好み有しかば鹿十郎い徐々と廣庭へ下立しに折ふし中空に鴈金多く列を正して啼渡りければ是用意と弓に箭を番ひ岐度見上て待かけたるに一連の鴈金二三十羽低く來りけれバきり〳〵と滿月の如く引絞り颯と放つに過たず先に進みし鴈金一羽忽ち廣庭へ射落したり因て人々彌に感じ射止し鴈金を御前へと申に贈ひ鹿十郎其儀御前へ持參あすに鴈い羽がいを縫れしまでにて體に少しも疵付ざれば大納言殿い殊更に御感わり矢を抜取て飼置べしとの仰あり夫より又馬術の御所望あるに是又豊まり奉つると申時舍人い馬を引來る此馬産生至つてつよく尋常の馬樂にい手に餘り皆し小栗判官が乘鐵めし鬼鹿毛を斯やと思ふばかりの駿馬あり鹿十郎い御前に向ひて一體をあし頓て俄然と乘移るに馬い其儘舍人を振切一趨に築山の方へ駈出さんと爲を鹿十郎い三四遍左右へ折切る折ドット一聲撥自若として居たるに如何あしけん此馬初めの氣色に引替徐々と歩行出せしかば人々い不思議に思ひ尾州殿の御廐中にて又と無き惡馬あるに今日い斯程當ある事合點行ずと一同眼も放さず見物なすに序破急の足色少しも乱さず七八遍乘終り又除々と乘上地道を元の所へ乘戻して下馬あしければ大納言殿を始め皆々又も思いず聲を揚て褒られたり然れば大納言殿益々御感ありて此

者こそ實に當時の英勇あれ是非とも召抱へ度ものありと再應御願望ありければ山田外記吉田周左衛門（周一郎の父）の二人鹿十郎の前へ來り其許望みある身の趣きい豫て承まいり及ぶと雖も我が君深く其許の武術を賞美致され何卒召抱られ度旨申され候因て其許得心あるべき樣に致し度と種々に勸めければ鹿十郎も今い是非なく實い敵討と致す者に御座候と肥後熊本の一條を申聞未熟の業しを再應御召抱へ下さるべき御沙汰冥加至極有難く候へ共右の次第故御前宜しく願ひ奉つると申陳げれば山田吉田を然らば道理ありとて此段大納言殿へ申上しに尾張殿にも餘儀なき事に思し召猶當人を召出され本望遂したる上い當家へ仕へよとの仰にて御盃を下され種々賜り物等ありしかば鹿十郎い面目を施し本望遂し候上い兎も角も仕つるべしと御請申上山田外記と同道なし同人の宅へぞ歸りける是等の事に取紛れ九月中旬迄此所に止りしが何時迄滯留するとも果しなければ是まで厚く世話に成し禮を申陳頓て暇乞して出立致しける外記い甚く名殘を惜み關境まで送りて別れの盃を取交し居る所に吉田周一郎を來り本望を遂し上い是非〳〵當處へ來らるべしと名殘を惜みける鹿十郎も段々の御厚志忘れい置じと禮を述て立別れしが夫より鹿十郎い何國を當とすべき方をなければ先東海道筋へ出て金谷宿迄來りしに秋も中旬を過ける故然らでも物淋しきに行來往事を思ひ出心鬱々として樂しからざるを我と心を慰ましつゝ歩行に日脚の最短く稍

來刻半頃金谷宿へ着けるに今一足にて大井川を渡り今宵い島田に旅宿せんと思へども歩行に力あき心地せらるゝ故鬱氣を散せんと或料理屋に立寄在合の肴にて酒と飲あかし往來を眺め居たるに種々の旅人諸家の人足引も切ず鹿十郎い少しく酒の廻るに隨ひ大いに愉快覺ゑ猶彼是を眺めてころい居たりけれ共又大刀七郎右衛門い大坂御城代松平和泉守殿藩中の知己を便りて武術を申立召抱へに相成しを歎び居たるに不圖民之助鹿十郎等に出會歓と名乘懸られしを民之助鹿十郎が災難に逢しより其日い過れたれども篠本六郎左衛門より卑怯未練の者と殿へ言上に及びしかば急暇とあり爰彼處と漂入して歩行しが美濃尾張の國境ひ木枯し堤にて民之助を返り討にあし一旦い敗ぶと雖も未だ鬼神と思ふ鹿十郎を討ざれば遺だ猛惡惡く往來するに笠を深くして形を替遠迂と通れ歩行中駿州府中に知己有事を思ひ出し是を便て隱れんと寛永八年九月廿六日此金谷宿へ差掛りしに最早申刻に近ければ急ぎて大井川を渡らんと來る處に或料理屋の端近に一人の武士酒を飲居たるを能々見るに別人ならず佐野鹿十郎なるに大刀い心中大いに驚き見咎められい一大事と此家の前を斯扱川原に到り見るに七八日以前より大雨降て水嵩增り渡し錢九十三文とある程なれば水勢の物凄き事云ばかりなし七郎右衛門い川原へ來りて渡らんとするに人足共酒手をねだる故大刀い幸ひと思ひ懐中より金二朱を取出し是い少しなれ共先其方共に遣すなり而又酒

手い別よ遣す間我が願む事を聞入呉るやと云よ川越六人い逆盛を其所よ聞イヤモウお武士様此上よを酒手を下さるゝとあれば御願事い何なりとも致しませんとふで我々い生涯裸體で暮す借金よさへある事なら命を惜みい致さずと言ふよ大刀い小盤よなり我い藩紀州家の者ありしが同藩と口論よ及び之處 重役の者俠侠最負を以て我い渡人あし相手の者い未だ仕官致し居るよ依て其無念忘れ難し何卒同藩たる者を討果さんと思へ其巣い大力よて怒々手よ合ず今此金谷宿よ休み居るよより程無此川を渡ずよ相違なし其方共申合何とかして巣を亡ひ呉よ其人体い白色く鼻高うして背六尺よ餘り衣類い御納戸地よ錦林胴乃紋付着たる男こそ我が爲の仇敵あれ何分願むと有けるよ川越共い何の思慮もなく如何程力戦有とても向ふの島田宿よ五百人此金谷宿よ五百人都合千人の川越仲間あれば天魔鬼神も及ばぬ事御禁心成るべしと事も無氣よ請合ければ大刀い大いよ悦び懐中より金三兩取出し少々あれ其是い酒手なり向ふへ越あば島田の者へも又遣すべしと言よ川越共い見た事もなき金子よ澤山よ下されたれば命を的よ働くべしと約束なして大刀を逆盛よ乗逆若水を難なく島田宿へ渡し仲間の川越等よ大刀の願みを委細聞りけるよ同氣求る悪漢等い僅の金子よ目が昏て鹿十郎を討取らんと其用意をどあしたりける大刀い此宿の者へも酒手を遣し其身い其邊の茶店よ身を隠し鹿十郎の様子を伺ひけるい卑怯ありける事其なり

○大井川人足鹿十郎へ喧嘩を仕懸る事

并鹿十郎立腹あし歩行よて川を渡す事

扨も佐野鹿十郎い息繼よ酒を飲居たる中大刀が裏を通りし事を時節至らずとい言ながら毫程も必付ず大いよ驚をを散じて爽快ありければ率大井川と渡らんと此所を立出河原を指て急ぎ來るふ役所よでい早く渡し錢を出し給へ九十四文の賃錢最早川い止るありと言故一丁餘りある川原へ駈來るよ數百人の川越等騒火して流り居たりしが鹿十郎を見るよ大刀が願みの人物よ相違なければ皆々申合せ夫來と言より早く鹿十郎の側へ進みお武士様溺水よて向ふへ渡すい大骨が折ます酒手を下されと言よも鹿十郎い仕組たる事とい夢よも知らず成程道理ありと懐中より錢取出し渡せば川越共打笑ひ此錢い百文是見られよ此川を越者い親分を退て四百七十人親分ぐるみ五百人其中へたつた百文面い立派あ侍士だが錢がないと見えると云ば先渡りの久とて此川越の親分ある者出來り是々渡いお侍士様よ向て何をぬかすモシお侍士様此方等い無我夢中の者其御勘弁下されて何か少々の酒手をお遣成るゝ様願ひます云よ鹿十郎い顔を和らげ其方い親分とでも申者か此方渡し錢を出したる上い別よ遣いすべき謂あけれ其酒手をねだるからい其方等が別て働呉んと存じ僅の錢あれ其心ざしよ遣いせし處夫を是彼中なり拙者世よあらば多分の酒手を遣し度存ずれ其今い渡人の身ゆ

為貯へ置渇く是よて勘弁致すべしと又二百文出せい先渡りの久い吹出し是いお武士様有難ふ存じますがお返し申させふ何程裸で其日を送る私等でも此滿水よ向ふ越の酒手二百文や三百文でも否お事此川い渡せませぬ酒手が惜く〻水の落る迄金谷よ滯留成れましイヤ馬鹿〻しい汝らが腹立を道理だ此樣者共の侍士よ掛て居てい際が入外の業を樣て渡てし仕舞と云よ無禮なる奴とい思へ共斯る小人よ何を云とを耳よ入さじと心を取直し是い我が誤り なり然らば酒手を遣いすべしと金二朱取出して渡すよぞ皆々顔を見合しが十四五人の川越口を揃へ二朱や一分の半金返して仕舞と鹿十郎よ投付るよ堪忍強さを是迄と刀よ手を掛んとせしが大事の前の小事ありと心よ意見あして然樣よ多分の酒手をねだるい何か子細有るべし渡し錢い役所へ置たれば此上汝等よ用いあし此川い我一人ふて渡るべしと云よ皆々打笑ひ數年馴たる我々さへ此滿水よ難儀あるよ何とて向ふへ越らるべき笑止と言ふを耳よも入す鹿十郎い衣類を脱下帯一ッとあり頭よ大小衣類を乘逆卷水よ飛入んとするを見て川越等い一人立よ川を越せてい關所破りを同前なりと十四五人駈寄つ〻鹿十郎が下帯の三ッを取て引戻さんとあすを其儘よ引摺て三四間川原近く來りけれい是を見て殘りの人足共鹿十郎の大力よ舌を卷て恐れけるが大勢を頼む若漢共猶懲ずまよ鹿十郎が左の足よ取付をエイ五月蠅と蹴返しながら遙四間程距れたる逆卷水中よ飛入よぞ川越等い口々よヤヤ渡さすあ

〻と同じく續いて飛入よぞ此騒動よ金谷宿の川越五百人い一同ヤ合鹿十郎を追取卷搦め捕んと水中へ皆々飛入追行程よ島田宿の川越共を隙てヤ合あれば此方へ渡らば打殺さんと多勢い岸よ待掛たり鹿十郎い前後よ敵を受萬夫不當の勇士と雖を水中の働き故其危き事云ふ許りなり

○佐野鹿十郎太井川よて口論の事 并水難よ逢行方を失ふ事

扨も鹿十郎い思ひ寄ざる災ひよ逢て詮方あけれ共一大事を抱へし身あれば胸を摩りて謝り入よ何分果しあきゆゑ終よ心を決して逆卷水よ飛入拔手を切て泳き行よ川越共前後より追所破り遁すあと口々よ囃り〻追迫るよぞ鹿十郎是を見て小賢きうじ虫めら向ふへ上らば皆々投殺し呉んと怒りつ〻此大川を泳ぐよ常さへ水の増時い大石を押流す水勢あるよ九月の末旬大雨降續きし上なれば水勢益々烈しく既よ九十五文川迄よあり往來を留らんとする程ある故數年馴たる川越共鹿十郎を追留んとなせ共渦卷川波よ隔られ近附事成難し然れども鹿十郎い此水勢を厭ず泳き行事元熊本よ在し時漁りを以て世を送る業とあせしが〻大井川の水勢を敢て事とせず夫い熊本よ珠磨川と言大川あり此水勢い常さへ銳ければ雨上りの節い勿々漁をあす者あし然を鹿十郎い何時も歩立よて魚を取事あるよぞ今大井川滿水よて

大石を押流す水勢あれ共恐る色なく游ぐ体水の魚よ遊ぶが如くよして水滸傳の張順も是よい勝ち志と思ふばかりなり兩岸よ見物したる旅人ども〻皆舌を巻ア〻涼然き有様やと賞歎なして居たりけり鹿十郎い拔手を切て游ぎ行よ川越共大勢を頼みよ鹿十郎よ取附どを足もて蹴返され水よ流され行方知れざるもあり是ふも懲ず又々前後より鹿十郎を押べ水中よ引入れんとするを水を潜りて向ふへ拔れば川越等い猶を彼方此方と追廻る休水中の魚が鵜の雛と遁るゝよ異らず鹿十郎い大井川の中程よ至る頃左右の川越等一同よ掛るゆゑ愛を專途と或い突退掛倒し又蹴返し刎返し前後左右よ追散すを數百人の川越代る〳〵取付ていい水底よ引入んと爲ゆゑ流石の鹿十郎を防ぐど雖も水中の事あれば何分自由ならず殊よ頭よい品々を乘たるよど思ふ程よ働き得ず只來る者を寄付じとあすのみ其中よ廿人ばかり鹿十郎が手足よ取附折水勢尖き大浪一時よ來りしかば川越諸共早瀬を川下へ流し行と見て外の川越を仲間を助けんと又々四五十人鹿十郎を目掛て取附よ其中大木流れ來つて鹿十郎を始め六七十人の川越共押流され行方も知ず成よけり嗟哀れむべし義氣勇膽世よ稱ある英士よして殊よい大事を抱へし身の斯災難よ逢生死を知ずなりける事淺間しかりし有様あり斯て大刀七郎右衛門い疾より此有様を大勢の中よ隱れて見居たりしが今鹿十郎が水よ溺しを見て心中大よ悅びしと雖も大勢の川越も俱よ水よ溺れたれば仲間の奴原必らず彼是云べし然ば面

倒なり此騒ぎよ紛れ逃去んと行方を知れず立去りよける依て島田金谷兩驛の騒ぎ大方あらず双方より役人出押流されし川越共い是非よ及ず喧嘩の次第い如何よと取紛せし處よ川越等は已どもの勝手能様よ申せしかば其次第よて事漸々よ濟たりける

○油屋德右衛門の後妻惣領を失とんとする事

并久治郎身延參詣災難の事

爰よ奥州白川宿よ一軒の大百姓あり金銀い藏よ滿米藏文庫藏とを都合十五戸前男女の召仕多く何一ッ不足なく暮すのみか又見勢商ひも手廣ふして其名を油屋德右衛門と言兄弟二人の子あり兄久藏い先妻の產しよて十六歳弟久次郎い後妻の儲けしよて十歳よ成けるが兄弟の中睦じく兄い弟を憐れみ弟い兄を敬ひける故近隣譽ぬ者もなく德右衛門こそ仕合者あれ金銀よ不足なく二人の子供い親孝行實よ羨ましき果報人と噂あしてど居たりける然れども滿れば欠る世の習ひ後妻い元兄の乳母成しが兄久藏六歳の時母死去したれば乳母のお咀を母の如くよ思ひ暮ふ子心を德右衛門不便よ思ひ青年心の知ざる者を後妻よ娶んより此乳母貞實あれば と跡へ直せし處其後德右衛門の胤を妊し男子を產落しければ是を久次郎と号たり因て後妻い追々增長して此久次郎よ世を讓らせ我身後々迄安樂よ暮さんと思ひ兄久藏を憎み動とをすれば打擲あどあすよど弟久次郎い當年十歳なれ共此事を子供心よを疎しく思

ひ母を諫るとも一向聞入ず德右衛門を見棄て時々叱る事あれ共其言葉を少しも用ひず德右衛門ハ生得愚直なる故然のミ妻を懲す事も出來ず使て猶々憑心增長して兄久藏を亡いんと思ふゑ今年十六歳ゑなりければ德右衛門ゑ勸め商賣見習ひのため江戸表へ見物ゑ出し給へと云ふ此事計畧とも知ず德右衛門ハ手代を呼て兄久藏を十六歳なれば江戸表を見物させんハ如何ゑと云ゑ宜しかるべしとて久藏へ右の咄しをあしけるゑ久藏ハ悦び勇み一日も早く江戸見物ゑ參らんと支度と調へ手代共三人程を召連江戸表へ罷出し處手代の中ゑ鎌七とて廿七八歳の男有しが豫て後妻お嵯より申付られ居る事なれば馬喰町ゑ旅宿あし主從四人今日ハ上野又ハ淺草兩國と諸方の盛り場を見物して歩行頓て吉原へも行けるゑ仕組し事あれば久藏を勸めて或遊女屋ゑ上りし所數多の美女珎璐の櫛笄を挿飾りて出來り殊ゑ座敷ゑハ酒肴を盛並べ種々樣々ゑ待遇しかば久藏ハ只々身慄ひをして居るのみなるを鎌七始め殘り二人ハ天下晴ての遊びなりと其夜ハ後ゑ夜を明し翌日も遊び樂まんと云ゑ久藏ハ頻りゑ歸り度とヤゆゑ鎌七ハ久藏が相方ゑ昨夜の樣子を聞けるゑ相方ハ微笑客人ハ勿々打解給ハず只夜の明るを遲しと待詫らるゝのみなりしと申ゑ夫ハ未始めてと云殊ゑ田舍者故なれば此後ハ斯々待遇給へと吹込置其日ハ歸りしが又翌日鎌七ハ久藏を勸めると雖も元ゑり手堅き生質あれば更ゑ聞入ず依て段方あく日を送りたるゑ久藏ハ皆々ゑ向ひ概略江戸も

見物あしければ最早歸國すべしと言ゆゑ鎌七ハ密ゑ相邀なしたれ共詮術あければ一同國許へと歸りける又國元ある後妻お嵯ハ謀りし如く久藏を江戸へ出せしかば必らず女ゑ心を奪はれ大金と費すべし其時ハ千兩を二千兩と言あし半分ハ已の懷中へすり込申さんと獨り心嬉く何卒久藏儀放蕩をあす樣ゑと日々念ゑ居たるゑ遊女などハ見向をせず歸國あしけれそハ樂ゑ相違したれども又計略を巡らし追出さんと思ひ居たりしとゑ然るゑ久藏ハ其心を知る故用心堅固ゑあしけれ共ハ空しく日を送り久藏廿歳の春ゑ成けるゑ家督を讓るべしと親類皆々ヤゑより お嵯ハ心宜らず思へ共止むる事もあらず終ゑ身代を讓り似合しき嫁をも貰ひ德右衛門ハ隱居して安心あすと雖もお嵯鎌七の兩人ハ是を心よしとせず種々ゑ惡巧みを爲かゝを左右ゑ其便りあく過す中久藏ハ半年程家督を受繼しが或日偶然家出をあせし切一向歸り來らざれば隱居德右衛門始め親類の者ども大いゑ驚き種々ゑ行方を探しけれどをさらゑ手掛りをあく依て出たる日を命日とあし跡を弔ひけるが嫁ハ年若成ゆゑ里方へ歸さんと思ふ最早懷妊なし居るゑより身二ツゑありたる上兎も角を相談せんとの事なり然れば お嵯ハ嫁て腹みの通り久治郎を家督と定めければ其嫁ひ一方あらず是ゑりしてお嵯ハ大いゑ威權を張氣隨氣まゝゑあし居たる中隱居德右衛門ハ老病ゑて死亡お嵯も引續き死去なしたり又久藏の妻ハ其後安々と女子を產落しければ其稚子を久治郎ゑ任かせ已

い江戸表へ一生奉公に出たりけり因て久治郎い名を德右衛門と改めしが重ね〳〵の不幸に越し種々往事を考ふるに兄久藏家出あしたるい母が嘖しみを請し故ありと思ひしかば兄の菩提の爲にとて久藏の子と我が子とをし育けるが月日に關守あく早十八年の星霜を經たるに久藏が娘い親の爲とて出家あし度由を望むと雖を是を再々留めしに然らば罪生消滅の爲身延山へ參詣あし度と申に夫を止る事もあらず許せしかば早々旅立あさんと用意あす中久治郎の德右衛門い俄に病氣起りけるに其年を過整年い娘が十九歳の厄年あれば德右衛門を同道して參詣致さすべしと心懸し處に親類中に差支ひの事あど出來彼是隙取て漸々七月の末に至り漸に出立と取極供にい出入の角力取兩人外に下男下女上下六人是い德右衛門の道中女連成ば万一の時の用心に角力取を連たるあり夫より皆々發足あし日積り通り身延山の參詣を濟し是より名所舊跡殘る所あく廻りて見物せんと急がぬ旅なれば泊々を早く着しが甲州より信州境に來る頃い些少道も張日い良西に傾き申刻過にありしかば峠を越早く泊らんと駕籠に女を乘德右衛門い先に立金澤峠に來懸るに峠の中程に五六人の大男狼火をあし居たりしが今德右衛門が主從來るを見て往來に立塞り見れば田舍の大盡が紫帽の遊山旅此山中を通り度ば酒手を置て通らるべしと言に供に立たる角力取越見山熊太郎荒子山權九郎の兩人い惡漢共を白眼付已等人を見損じたるや我々供をしたる上からい酒手あど出

す法やある其處退て通しをれ万一ぐずぐず吐さば張殺すぞと口を揃へて罵るを惡者等い笑ひ出し掠し搦さの大若衆大言も程にしろ皆々掛れと一同に兩人の角力に討て掛るを小癪あると取ていい投付〳〵兩人ば力に任せて働くにさしもの惡漢叶いじと一目散に逃行を越見山い何國迄もと追を見て荒子山い永追すあと呼返せ共壯年の荒男耳ふも入れず追行けり德右衛門い大いに怒き駕籠を後へ返させんとするに此騒動に駕籠屋い這々逃行ける故詮方あく越見山の歸ると待て角力兩人に頼まんと見合せ居たるに暫くして踏り來りしが德右衛門い悦び急ぎて峠を越んと娘の乘たる駕籠を兩人の角力に昇がせ德右衛門い下男を先に立腕を指て急ぎけり

○佐野鹿十郎盜賊に出逢事

幷我慢太郎を討取德右衛門を救ふ事

扨又惡漢等い兩人の角力に追立られて逃去しが此山中に幾等が張本我慢太郎と呼大力無双の盜賊有り手下の者凡五十人程付隨ひ隣國又い金澤峠の邊に旅人をおびやかし路用を取夫を渡世とし如何ある事をも厭はざるが故自ら我慢太郎と号しける今逃散し惡漢等も渠が手下ゆゑ栖巢へ來り角力兩人に叶はずして逃たる趣きを語りけるに太郎い打笑ひ角力取よもせに是よあるに徑二尺の松の木と折力いあるまじ是見よと言つゝ立上り拳を固めて地上

より生出たる松の幹を打けるよぼつきと折たり然れば何ぞ恐るゝよ足んや好鳥の掛りしものを見逃す道理あらんや未だ遠くい行まじ續け〳〵と言ながら山刀を差飛が如くよ追掛たり又油屋德右衛門ハ麓へ下らんとあせす折節人の足音夥多しく聞ゆるゆゑ德右衛門ハ荒子山よ向ひ那足音ハ先刻の悪漢徒輩して追掛來るあらんと申よ荒子山ハ越見山と兩人して追散したれば其樣の事ハ有まじと言中我慢太郎ハ先よ立旅人の奴們逃るとて逃すべきや有丈の路用身ぐるみ脱で行と罵りあがら頓て傍近く來るよぞ兩人の角力ハ是を見て憎さうじ蟲めら先よも慾ず又來りしか目よ物見せんと言つゝ鬼髭を下し德右衛門と下男よ是を守らせわり合棒を追取て打て掛るよ我慢太郎ハ冷笑ひちよこざいな大將乘我が目からは小兒も同前手臣よ取て呉んずと云よ荒子山ハ大いよ怒り無二無三よ打て掛ると太郎ハ身を躱し荒子山を引付ると見えしが二三間先へ投付たり越見山ハ是を見るより駈寄て太郎よ組付を太郎ハ心得たりと無手と組ヨイヤ〳〵と暫く揉合居たる中よ手下の多勢德右衛門下男下女を縛り揚娘を見るよ此近隣よハ稀なる美女なれば手取足とり引擦ぎ棲眞く運行んとあすよぞ娘ハ咄嗟と聲を揚泣叫べども越見山ハ我慢太郎と組合荒子山ハ投付られし時撼よて左りの手と折けるよぞ倒れ居たるが此体を見て荒子山ハ多勢の中へ飛込右の手ばかりよて手下共を投付けれ共大勢よ一人孤よ左の手痛み働き自由ならず終よ多勢よて荒子山を組敷打擲あす

よ生死ハ知ず悪絶たり又越見山ハ一身の力を極め太郎と組合しが爭太郎よ及べき是を又組敷れ拳を堅めて頭を打れけるよぞ是又生死を知ずおりよける然程よ太郎ハ大いよ悦び相撲兩人を捨置娘を駕籠よ乘德右衛門下男下女を縛り栖家へ連行んとあすよ日の暮たれば手下の者よ松明を燈させ荷物を纏めて寛々と立去る折から向ふよ提灯の火影見えければ我慢太郎ハ是を見て今宵ハ好鳥の掛りし上又を提灯の見ゆるハ旅人あるべしとても骨折序でよ渠をせしめて呉んと待處よ追々近く來るを見ば一人の武士故太郎ハ手下よ下知して道を塞せ近付武士よ向ひ如何よ侍士我等ハ此山よ住居する盗賊なり汝儻の武藝を頼み夜中よ山越なすハ大膽と云べし我等が目よ掛るからハ身ぐるみ脱で通らば命ハ助けて呉んと云よ彼の武士ハ黙だ黙さて大地よ平伏是ハ〳〵お盗賊樣某しハ武士よこそ侮れ刀を扱術も心得ず路用とても乏しき浪人者故御宥し下されよと云よぞ手下共是ハ身悪よ寄ぬうつけ武士命ハ助くる身ぐるみ脱で行と立悪るよ武士ハ猶頭を下げ仰の如く衣類ハ脱でれ渡し申べし併しお見悪申せば大分人を縛られて居る樣子しつかり金子もお取成れたで宥んよより私じも願ひが御座る夫を聞て下さらば此衣類ハそつくり差上申さんと云ければ我慢太郎ハ是を聞汝が望みと云ハ何事か次第よ依てハ叶へて呉んと問よ彼の武士ハ起上り早速の承知添けあし我が望みは外でもあし頭始め手下の者の首が貰ひ度と云しかば皆〳〵ナニ己がと憤るゝを我慢

太郎は忽ち面色を變じ此素浪人め命い助けて遣いさんと慈悲心を以て申聞たるを却つて其大言狂氣せしが憎き奴我が一刀を息の根止んと三尺を餘る山刀を拔より早く討て懲るを武士は閃りと身を躱し拔合せをせず彼方此方と搔潛り只相手を空を切せるを流石彌勇不敵の我慢太郎も心中大いに驚き此奴如何なれば斯武勇の者あるや然りとて何程の事あるべきと山刀を水車の如く振廻き打とも切とも空而已あり手下の盜人共を是を助けんと二十人ばかり皆拔連て前後左右より切て懲るを武士は事ともせず飛込よと見しが先に進みし小盜人の刀横取當るを幸ひ切立れば小盜人等是は叶いじと右往左往に逃行に一人の盜賊武士の後へ廻り物をも言ず切懲るを武士は振向さま袈裟掛に切捨たり然ば我慢太郎は此武士の働き勿々只者ならずと思へ共心を勵まし鬼神も我を恐るゝに只一人の武士何程に働くとも遁すべきやと傍邊ある松の木に手を懸エイヤと言樵根こぎにして無二無三に打て懲るを武士は打笑ひ小賢き盜賊めと云つゝ打來る松乃末を確かと取て暫時が程捻合しが松は中よりめり〳〵と折る機會に思いずも太郎は前へ俯向に彼の武士は起しを立ず太郎が首筋踏付るに大力無双の太郎あれ共此武士に踏付られ起んとすれ共身働きあらず無念〳〵と言而已なり其時武士は大音揚汝等如き微力を頼みて往來の旅人を惱す事憎き振舞あり我は望みある身なれば汝等と力を爭ふは好まざれ共多くの旅人を縛り殊に女を連行恥しめんとする巧み

なるべしまた此後とも旅人を惱さんに止を得ず此處にて往生させんと引起して首尾落せしが四邊を見るに大前髪兩人倒れ居たりしかば熟々見るに相撲取にて脚伴を拿たれば旅人あるべしと立寄つゝ引起さんとするに息絶居れり然れ共未だ身内温かあるゆゑ活を入て蘇生らせ有る次第を物語りければ角力兩人は大いに悅び我は奥州の者にて越見山今一人は荒子山と申角力取なるが旦那場の供をして身延山へ參詣の戻り道にて此災難我々必死に働きたれ共何分叶はず既は旦那方に彼等が爲に捕縛となり今しも連行れたり故意〳〵供をしたる甲斐もなく面目なしと申を聞扨は今の旅人達あらん三丁ばかり麓に手下共守り居たれば我取返し呉ん共に來るべしと武士は馳出すに角力兩人を痛手を耐へ連立行んとなす折傍に半死半生なる小盜人共居ければ彼を引摯〳〵麓の方へ來り見るに最早一人も居ざる故今引摺來りし小盜人に責問ひしかば此山奥に隱れ家あり其處へ皆に到りしならんと言より然ば巢内すべしと巢を先に立て元の道へ小半丁程戻りしが夫より徑路に入角力兩人共小盜人を追立〳〵巢内させて賊の樓巢へ急ぎけり

○佐野鹿十郎盜賊の樓巢へ到る事

井鹿十郎大勇盜賊退治の事

斯て三人は山を登り谷を下り辛に上にて金澤山の奥へ入平地の處に出たるに折しも九月十三

日の月高く登りて興盛の如く小家三四軒見えけるが武士い小盗人を呼止是い百姓の家なるやと問ふ小盗人答て是家こそ我々が住家ふ候向ふの大なる家い首領我慢太郎が家ふて是小家い一二の親分遠の住居あり斯別々ふ家を建設事一ッふい用心の爲一ッふい夫々ふ妻を持居る故あり尤も妻を向ふるふも近國ふて美目能女を盗み來ると申ければ武士い然を有べし先々案内せふ先の旅人が居る處迄行んと言ふ盗人い承知なし是より北ふ一軒の寄合所あり此處い何程金銀を取來る共一ヶ月宛持寄又取押へたる旅人を右の處へ連來り衣類を剝取殺す事ふしへ共皆仲間の者此處ふ寄合居いありと申ふゞ然らば其處へ案内致すへしと猶又先ふ立ち其家近く來りしふ大勢の物語る聲聞えけるゆゑ武士い小盗人を角力兩人ふ守らせ其家の樣子を聞くふ盗人共の聲として親方太郎殿い武士ふ殺されたれば此上い有合の金銀を以來月番持ふして物体乃失費ふ遣ふべしおどし咄し最中あり武士い是と聞て大音揚汝等金銀の配分ふ面倒あらば我ふ渡せと云ひながら直と進み入るを盗人ども何者ありやと見返る所ふ武士い一刀を抜より早く片端より切立ければ暫くうちふ七八人手を負たり殘る盗人ども集い先刻の武士なり首領の敵が發へ來るい自ら薪を負て火ふ入るを同じ此武士を討取たる者を以來頭ふすべしと云ふ皆々是い面白し我討取んと切て掛るを武士い騒がず多勢を相手ふ切結りしかば盗人共い叶いじとて逃出さんとすれども此家い一方口あれば逃ることもあらず皆々隅の方ふ追つめられ武士の爲ふ五六十人枕を並べて討れけり依て角力兩人ふ云付主人徳右衛門幷ふ下男下女娘の縄を解せ介抱して恤りしかば皆々再び蘇生たる思ひふて大いふ悦び始終の樣子を角力兩人ふ聞て武士ふ向ひ扨々有難き事かな御禮言葉ふ盡し難し地獄で佛ふ逢しと申い此事なりと涙を流して平陳しかば武士い微笑其御禮い過分あり此事決して我等が助けしふあらず全く天此盗人を亡す時節の來りしありと言ふ徳右衛門い其言葉物ふ跨らぬを感じ里近く出て勞を休め其上御禮の致し方を有べしと云ふ武士い頭を振否々禮い受べからず殊ふ今より里へ出る共餘り遲ければ今宵い爰ふ夜を明し明日當所の代官あり領主ありへ此事を訴へ宜しく計らいせべきふより氣の毒ながら關係ゆゑ一兩日滞留致さるべし我等も滞留して盗人共を討取たる次第を屆け又一ッふい外々ふ捕いれし者をあれば何れも故郷へ返し遣べし是迄盗人ふ遣いれしい不便の至りありと平を聞徳右衛門始め越見山荒子山の相撲も至極道理ありとて其意ふ任せ爰ふ其夜を明しけり

○鹿十郎仁心女子供を故郷へ送る事
幷諏訪伊勢守殿へ鹿十郎目見の事

斯て徳右衛門主從六人い武士ふ助けられて其夜を明したれと住馴ぬ山中なれば皆々烏と共ふ起出盗賊共の死骸を山の如く積重ね慥彼の案内爲たる盗賊を呼出し此住家ふい定し近國

近隣の娘子等を盗み來り中よい妻とおしたるも有べし夫々よ古郷へ歸さんと思ふおれば汝知りたる丈をヤべし有休よ云ば命い助け遣さんと云ければ小盗人い喜び渠い何國の娘又離々い彼所の妻なりしを盗來りしと委細ヤより一同女共を呼出し歸宅おし度やと問ふよ皆々悦び是迄い命惜きよ心ならず盗人の妻とおりたれども國元へ歸し給いらば喜び此上なしと口を揃へてヤよぞ然らば朝飯を食し其上領主へ訴へて後汝等が國々へ返せべし早く我々始めへ喰事を調へ出すべしとおりければ女共い大いよ悦び各自勝々の着を取並べ皆々へ馳走なしたるよ頼て彼の武士い德右衛門始め一同を召連此處を立出跡い角力兩人と下男よ守らせ又々以前の盗人を案内として里へ出當所の名主よ逢某しい通り懸りの者あるが旅人の難儀を見兼金澤峠よて盗賊を一人も殘らず打取たり當所い御代官か領主成か其方役向おれば此段宜敷取計らひ給いるべしと言よ名主い一伍一什を聞一度い驚き一度い悦び扨々夫い有難き事かな右の盗人い我慢太郎と申て勿々强勇の曲者おれば容易よ捕押へる事叶はず百姓共難儀たいすよより當處の領主誠訪伊勢守樣へ訴へ役人衆近々御召捕成れべき御懼しの處おるよ貴處御一人よて大勢を打取下されいい所の氏神と申べし我慢太郎い十八人力ある極き勿々容易の者よ非じ其上手下六十人餘有て此邊の富農を惱し又い往來の旅人を殺し甚迷惑よ有しが亡びたるい實よ有難き仕合おり先々緩々休み給へ村役人とも相談致し早々領

臣の役人方へ申上べしと夫より村の者どをを呼集めて此事を申聞領主役場へ訴へよ及びしかば早速檢使の役人出張して盗賊の棲巣へ到り見るよ賊の死骸山の如く有しよ役人を武士の働きよ舌を卷夫より女共を呼出して何れを素性を尋ねて夫々よ故郷へ送り遣し又金銀の類を取上殘る雜具類い建家とともよ燒拂いせて役人い引取此趣きを委細よ諏訪伊勢守殿へ申立ければ伊勢守殿も武士の働きを感じられ早々其者を召出し對面せんとおりければ役人い武士の旅宿へ到り領主伊勢守對面致され度よ付罷出らるゝ樣よと申陳げるよ武士い不束の某し御目見い御免を蒙り度と申を德右衛門も傍より左よ右御目見成るべしと勸むるよより止を得ず役人と同道して登城なしければ早速伊勢守殿出座致され彼武士よ對面有て生國其外履歷を尋ねられけるよ侍士い平伏おし拙者い肥後國熊本の者よて佐野鹿十郎と名乘いと言よ諏訪殿此度の武勇を承まいるよ勿々凡人の及ぶ處よあらずと深く賞感せられ品々の引手物を賜りければ佐野い御禮ヤて下らんとする處よ襖の陰より組子兩人十手を持て不意よ打て懸るを鹿十郎い少しも驚かず慮外なりと言ふ聲と共よ遙よ兩人を投退たり隙をあらせず二番手四人打て懸るを然知たりと左右の手を伸兩人を引附ると見ゐしが後より打込十手を先なる兩人よて受止るよ後の兩人打損し口惜やと云さま又打懸るを人礫よ四人一同投出し鹿十郎い大音揚何故斯い手込ふおし給ふぞ卑性未練の振舞ありと云よ重役い組子の者

曾々引べきと聲かけて其所へ立出鹿十郎よ向ひ失敬御免あるべし其許の力量勝れたりといえ承まいれども未だ其實を見ず依て殿より御差圖を以て斯計らひいあり其許の諸藝天晴英勇主人始め銘々を感ずるよ餘りあり未だ定る主家なくば小錄ながら當所よ足を止め勤仕あるべし如何よやとヤければ鹿十郎い其處よ着座あし是い有難き御沙汰よひへ共某し儀い望み有身分よひへば此段御宥免願ひひなり決て御家の大小などを論じひ所存よ之あく宜しく御聞譯下し置れたしとヤ陳けるよ諏訪殿い左右よ好もしく思いれ種々よ勸め給へ共鹿十郎元より望みある身あれば種々御斷りヤ陳ける故切てい暫く當所よ止るべしとて其日より旅宿へ歸されず種々の馳走を賜いりけるよぞ鹿十郎を餘儀あく御殿よ止りける扨德右衛門等主從い鹿十郎が御殿よ止る由を聞一件を埒明上い一刻を早く歸國せんと國所住居等委細よ認めて鹿十郎よ送り奥州白川さして出立あしたりけり

○鹿十郎諏訪家を辭し信州發足の事

幷鹿十郎上野よて大雪よ逢大熊を組止る事

斯て鹿十郎い思いずを日數二十日程逗留よ及ぶ中役人更るゝ來りて馳走なし又殿よを屢呼出されて御盃を下され厚く饗應さるゝが爲義理よ絡まり據ろあく敵討の儀をヤ陳けるよ然云事あれば本望を遂し其後來るべしとありしかば鹿十郎い有難しと御禮ヤ上又々四五日

程も滯留よ及びけるが鹿十郎い心の内閑へ苦しみ一刻の早く敵よ出會戀慣を晴さんと或日重役よ向ひ永々御懇命を蒙りあがら爲事をなく止り居るを本意よあらず何卒出立御免下され度願ひい光を敵討て本望遂しい上い當御城主樣へ御禮よ罷出ヤべしとヤ陳ければ此段重役より取次しよ殿よを是非あく御暇を下されしかば有難く出立の用意をなすよ又々殿より盃を下され引出物目錄等數多賜いるよより鹿十郎い厚く御禮ヤ上漸々御前を立直役へも禮をヤ彌々明日出立と極りけるが何國をあてと云事あければ繁華の土地を心ざし翌朝未明皆々へ別れ上州高崎の城下へと赴きけり因て道々を敵の在所よ心を配り日數を經て高崎の城下へ出たり發よ一兩日滯留して利根川を渡り前橋より伊勢崎を心あてよ歩行しよ頃い十一月の中旬よて此邊い殊の外寒國ゆゑ雪降積り八九尺を積りしかば往來道筋定かあらず流石の鹿十郎も雪よい甚だ困る而已か一ッおい道路不案内あれば早晩道よ踏迷ひけん行共〳〵山又山よして日い西よ傾き降來る雪い益々強く猶里を求めんとすれども何國と云處を知らず鹿十郎い强氣盛んありと雖を道あき山坂を心々勞れけるを心よ心を勵す中早日い暮て彌よ方角定かあらず兎角して里へ出んと急る處よ吹雪さつと落し來るを凌がんと身を屈る折柄よ足を踏辷し遠の谷へ轉々と落入たり然れども鹿十郎い豫て柔術の妙を得て身を輕くなす事自在あれば何丈となき谷底へ落ながら少しも怪俄をなさずと雖を持合たる衣類等

い何處へなくせしや一品を身ゝ添ず夜い追々深更ゝ及け寒氣厳を劈くが如く如何とも詮方おし然るゝ風の吹廻しゝや雪の少し浅き處ありしかゞ其所ゝ立寄て一ト息吐居たるゝ宵ゝより空腹おりしゆゑ腹中頻りゝ痛みを覺えけるゝゞ是全く寒氣ゝ中りしおらんと腰を探り見るゝ纔ゝ餅ゝ一ツ遠方ゝ暮たる折遥か向ふより降積雪を蹴立駈立來る者あるゝゞ是い定めし狼か野猪おるべし我今心身勞るゝ共何程の事やあらん然ども未だ敵ゝ會ざるゝ畜類の爲ゝ万一怪俄をおさゞ心外の至りおり弓矢八幡何卒此場の危難を救とせ給へと祈念おし居たるゝ大きゝ小牛乃如きもの馳來るゆゑ何やらんと雪明りゝ透し見れゞ是大熊おり鹿十郎思ふゝ熊い寒氣ゝ弱くして雪中い穴居すると聞けるが如何ゝして此雪ゝ馳來るならん但し外の獸ゝやと猶樣子を見居たるゝ熊い早くも人の居るを知りて鹿十郎ゝ飛掛るを心得たりと身をひねりしかゞ熊い外されて巖角ゝ噛付處を脊の方より抱き止寧を固めて只一ト打と打けるゝ熊い振返り樣人の如く立上りて鹿十郎ゝ飛付んとするを引外し〳〵二三度熊を勞らしエイと云つゝ頸筋取て捻倒し頸脳を目がけて續けさまゝ打けれゞ呻く聲凄然く流石ゝ猛き大熊を頭脳碎けて死したりけり嗚呼勇なる哉鹿十郎宵よりの空腹殊ゝ雪中心身勞れし折から此危難ゝ出會しを天孝心を感し斯る猛獸を打留させ給ひしい當人の勞力とい云おがら實ゝ得難き僥倖なり扨鹿十郎い〻ホット大息を吐や否や其所へ撞と倒れ伏其儘悶絶おしたりけ

り

○鹿十郎危難太左衛門ゝ救いるゝ事

并鹿十郎再厄大病の事

扨も佐野鹿十郎ハ雪中山道ゝ踏迷ひ難儀の折から大熊ゝ出遇しを運能仕留しが心弛みしゝや其儀倒れ伏生死も知れずおりたる中箱雪い降止て夜ハ白々と明渡りしゝ此所い碓氷峠の有手おる妙義山の麓ゝて仲仙道の間道おり然るゝ高崎なる檜屋太左衛門といへる者兩三日以前親類中へ相談の事有て行し處大雪ゝ降込られ今朝しを雪の晴けれゞ急ぎ我家へ歸り來る折から此處を通り掛り見れゞ年若き武士の雪中ゝ倒れ居るゆゑ太左衛門い不便ゝ思ひ扨い道中ゝて雪ゝ凍ゐし成べし扨い氣の毒おる事哉と立寄て抱起すゝ未だ胸先ゝ温ありけれゞ助る事も有べしとて此者を脊ゝ引掛三四町程西の方へ歩行し處ゝ一ツの宮居おりしかゞ四邊の木の葉を搖集め腰の燈火打を取出して火を移し彼の武士を暖めけるゝ此者の運の強かりけん頓て息を吹返せしゆゑ太左衛門い悦び御身を介抱せしい斯樣〳〵と有し事ども語りけれゞ鹿十郎ハ三拜なし是實ゝ再生の恩人おり某ゝい斯々の次第ゝて山中ゝ踏迷ひ又大熊ゝ出逢たりと昨日よりの事ども逐一ゝ物語りしゝゞ太左衛門一度い驚き一度い悦び其熊い此邊ゝても稀て人々恐れをなし獵夫の手ゝも絶りしおり失を只一人して仕留給ひし

ども凡人よりも御在さゝと大いに感歎あし然れ共其許樣よい雪の中に臥給ひし姿を見止しが其熊い如何あされしぞと云に鹿十郎も小首を傾け我い熊の頭を打碎きし迄と覺えたれ共夫より後の事い恥しながら一向に覺ねず今考へ見れば我等が姿も雪に埋まるべきを貴殿に見止られしい若其熊の上に打臥たるならんかと言ければ太左衛門い横手を拍光も然樣あるべし五尺余り積りし雪あれば地に倒れ給ふ時い所詮我が目にも掛らず又我助けんにも冷凍のとても介抱行屆くまじきを貴方樣の御運よく熊の上に居給ひし故御身を凍えず助り給ひしなり命自出度御方かおと申すに鹿十郎い厚く介抱の恩を謝し夫より右の熊を探して其報ひに參らすべしと太左衛門に案内をさせ以前の所へ到り見るに案に違いす熊に跨がり居たる樣子ありしかば引出して見るに頭脳い碎けたれ共身い其儘あるまゝ太左衛門い腹を消忘然と打ゝ居たりしかい鹿十郎い頓て熊を肩に掛以前の宮の前に來り其許い我爲にい再生の恩人あれども報ふべき物もあく路用も既に谷へ落たる時失ひし事ゆゑ詮方あし此熊い寒熊あれば定し嘗い太かるべし此膽を取て貴時い價ひ能あらんあひだ是を其許へ禮の爲に進らすべしと云ふに太左衛門い痛く悅び然らば貴所樣よを昨日よりの御勞れもあり又空腹にもわられんよりも兎に角我が宅へ來り給へとて鹿十郎と俱に熊を荷膽我が家へ歸り來りしに妻い出迎へ客を迎歸り來りたるを見て下男に盥付洗足の湯あと取らせ彼是あす中鹿十郎

い衣に體し熊を家の内へ擔入れければ妻い驚き如何にして斯大きやかある熊を打取給ひしぞと暫く忙れて居たりけり太左衛門い鹿十郎の災難樣〳〵と始終を語りければ妻も夫いくとて鹿十郎に悅びを述四方八方の咄しの中に盞飯の支度を調ひけるゆゑ手造りの酒なども添て鹿十郎に進め暫く勞れを休ませけるに鹿十郎い太左衛門夫婦に向ひ我等當九月下旬東海道を下る砌り大井川滿水にて川越人足共無法の酒手を望むより渠に喧嘩を仕掛られ水難に逢既に命も危かりし所僥倖流れ木の爲我に追迫る人足共四五十人皆押流され其中に某し岸へ游ぎ着れければ問道と廻りて漸々に其所を通れ來り其後認所經歷せし處又此度の災難も御介抱により不思議に命を全ふしたる事實に忝けなしと語るに夫婦も喜び仰の如く此運目出度御方ありと賀ぶきつゝ夫より鹿十郎い熊を裂膽を取出して太左衛門に渡し肉を我も喰し人にも喰せ皮を竹に張て其夜い俱に打伏たり然るに鹿十郎い深更に及び不圖目の覺けるが頻りに胸痛みて絶難く依て樣々に胸を撫摩りあとする中次第〳〵に痛み强くして今い勿々耐難く殊に寒熱往來あし頭痛い割るが如く終夜苦しみしが漸く夜の明るを待て起出んとせるに足腰立ず心い彌猛に逸れ其如何とも詮方あければ只男泣に泣沈み其不運をぞ歎じける折から主人太左衛門い鹿十郎の朝粥を不審て此所へ來りしが此体を見て大に驚き御身の病ひい昨夜よりの事なるやと問ひければ鹿十郎昨夜深更に及び目覺ひより斯樣〳〵と病

薬を物語るゝ太左衛門ハ早速ゝ醫師と呼て見せしめれバ全く寒氣ゝあたりたるゝて腹内餘程損じたるゝ付早く療治をなさゝれバ屆くまじと云ゝど太左衛門ハ其だ心配あし早々藥を乞受鹿十郎ゝ呑せけるゝど鹿十郎其深切を深く感じ怠らず服藥あし凡一七日を經れとも更ゝ其効しあく晝夜熱氣差引ありて苦しび事増々烈敷流石ゝ鬼神を恐れぬ勇士あれとも病ひゝハ勝事能はず徒らゝ其年も暮寛永九年正月ゝど成ゝける

○鹿十郎病氣平愈の事

并太左衛門鹿十郎ゝ養子ゝ望む事

扨も年改まり春ゝもありしと雖も鹿十郎の病ひ兎角ゝ同樣ゝて捗々敷藥の功驗もあけれバ心中燃るが如く思へども如何共詮方あく只我身の運の拙あきを歎き悲しみけるを太左衛門ハ種々ゝ慰め看病ゝ少しも怠らざる程ゝ鹿十郎ハ其深切を喜び我萬一此處ゝて死あバ犬死なるゝより國元を打明度べしと思へども敵討の事ハ容易ゝ語り難きゝ付太左衛門へと據ころあく主人の兄を尋ぬ國々を廻る故何時國元へ歸るやら限りあき旅ありとゝ聞万一此身死あバ國元へ知らせ給ハるべしと言ゝ太左衛門ハ樣子を聞然樣ゝ心弱き事をゝ給ふあ未だ壯年の事ゆゑ心永く養生あらバ急度全快ハ知し事なりと種々ゝ慰め春も良立て彌生の始め草木も花の咲出る頃とありけるゝ少しづゝ快氣ゝ赴きけれバ鹿十郎の喜び大方あらず太左衛門も俱ゝ喜び彌ゝ厚く世話致しける故三月中旬頃ハ床を放れて庭あゞを詠むる程ゝあり

しが同月末ハ全く病氣平愈ゝて髪を取揚湯ゝも入りけるゝ扨鹿十郎ハ神佛の加護又一ッゝハ太左衛門が深切再生の恩ある上ゝ又々命を救ハれし事御禮何共言葉ゝ盡し難しと朝暮厚く禮を述けるゝ太左衛門も増々喜び是等ハ恩と言ゝあらず我ハ貴所樣同年位ある悴の有けるが不孝ある者故ゝ勘當をしたり依て貴所樣を見るゝ附他人とハ思はれず少しのお世話申せしありと言ゝ鹿十郎は聞て離しを子を思はぬ親ハなし然るを子ハ親を思はずして不孝を爲ハ鳥獸ゝも劣るべし又何時〳〵迄を子ゝて居られず已れ子を持て想ひ當る成と歎息あして居たるゝど太左衛門ハ尙々鹿十郎が優き言葉を聞貴所樣の如き子を持親ハ仕合ありと跡ハ言葉をかゝりしが稍有て狀ちを正し身不肖の我等貴所樣の如き高貴の御方ゝ申出御聞入ハ有間敷あれ共物ハ當つて碎けろとの俗說ゝ任せ申出す儀を御聞濟下されハやと申ゝど鹿十郎ハ望みある身故其だ困りしが再生の恩人あれバ否其言ひ難き樣て御話し申せし通り主人の兄を尋ぬる身あれバ其事を果したる上ハ假令命たりとも其許の爲ゝハ惜みゝずと答へけれバ太左衛門ハ打喜び然ちバ兎も角も我と親子ゝ緣を結び給ハれと餘儀あく申出ける故鹿十郎を心の内ゝ思ふ樣斯まで深切ゝ申言葉あれバ今太左衛門の心ゝ隨ひ其中ゝ勘當なせし悴ゝ逢て異見を加へ親子元々通りゝさせん夫迄ハ假ゝ太左衛門が意ゝ任すべしと終

よ承知しけるよど早速親子の盃をなし親類あどを呼寄酒宴よ一夜を明したり然るよ鹿十郎を既よ此處へ足を止めしより以來あす事をおく半年餘りを過早當年も六月中旬どど成よけるを愛よ又太左衛門の悴佐太郎い勘當の身ど成たれども一向よ悔る心もおく日々よ亂妨狼藉を働き人を人共思いず終よい惡黨の仲間よ入たり父子よして斷も心の善惡相違あすい如何なる過去の因緣よや

○太左衛門悴佐太郎不孝物語の事 幷佐太郎誤つて兩親を殺す事

嗣子い門あし人の招く處とかや扨も太左衛門の悴佐太郎い親よ勘當請しを幸ひど思ひ猶悪心止ずして博徒の仲間よ入り此節い惡漢頭熊右衛門方よ同居して無頼の徒のみ友とあし酒と博奕よ耽り錢の盡る時い離よてを喧嘩を仕掛て錢金を騙る故近隣の人々是が爲よ難儀な者多き或日佐太郎い博奕よ負一錢の錢もなく熊右衛門の方よ戻あがら何か惡巧みを業き居たるよ仲間の千里足の虎と云人者來りて佐太郎よ向ひ如何よ佐太郎手前が本宅よ祝儀あり依ていたぶりよ行酒の一升を救舞よべきと言故佐太郎い不思議よ思ひ我い今始めて聞たり何の祝儀わるやと問よ虎い笑ひあから手前い未だ知らねへか今日其方の本宅へ聟子が來て萬々歳などゝ唄つて居るぜ早く云へ彼身代い曾手前の物だよ今親の太左衛門が外から聟子をおせへ手前い一生捏木と言ものだ家よ付た一人子を遣置他人よ身代を渡すい親の了簡違ひ又夫を手前が見聞しながら一言も云ずよ居るい馬鹿〳〵しい聟子い武士の浪人と云事故知ず顔よして居るよ違ひいなし他人よ身代を取られ見て居る番鹿がわるものかと扇動るよど佐太郎い切齒をあし好々我是より親の處へ切込で身代を引取呉ん假令武士よもせよ我力量あて叩き付るよ何事かあらんと大ゐよ怒りけるよど虎い猶も惡意を示せへ佐太郎今より直よ押掛んと立上る處へ熊右衛門歸り來り佐太郎の顔色變りたるを見て何故と咎めけるよ千里足の虎より一伍一什を咄しけれへ熊右衛門を惡者ゆゑ夫い能事あり然れども短氣を以て是を成就させんと云い不覺悟あり先々氣を長く事を計らんよい如じ此事い已よ任せへしとて佐太郎の耳よ口を寄暫時咄きけるよ佐太郎い悦び其日い止りて五七日待ける處或日熊右衛門よりの差圖よ隨ひ佐太郎い夕暮方より我が家の門を切亂〳〵歩行あがら覗き見るよ父太左衛門も又鹿十郎を見ゐされへ母親のみと思ひ何の釋會もあく内よ入るよど母い是を見て汝何の用ありて來りしぞ早々歸るべしと云よ佐太郎空涙を溢して母の前へ手ゑ若是迄の惡業ヤ分あし何卒敬し給へれ今更親の罰を思ひ當りてい依て御暇乞よ參りしありとていら〳〵と涙を流しけれへ流石よ不孝の子あれ其血肉の緣故母い心中藏き然樣よ後悔なすならば早く善心よ歸り其身の行ひを改むべし然ど物堅き親父殿勿々今勘當い敬されまじ此

後善心より返りし証據顯るゝあれば取成衛もありぬべし早く親父殿の歸らぬ内何國へなりと行れよと錢四五百文指出せば佐太郎は是を押戻し私と最錢金あゝの入用あし明日は八州方より召捕れ江戸へ引るゝ此身ゆえ言葉を変ず事は出來ずとも切て此世の暇乞よと思ひ來りし處母樣御一人の樣子より家へ入て陳謝詞とゆゑ親父殿が歸られたなら此事をゆて私が死だ後と子と思ひ一遍の回向を願ひさし併し翌日よりも死を不便と思されあば親父殿の仕廻置るゝ在金を密かより惠んで下されよ然樣すれば私も何國へなり其逃延て命が助るあり死ぬを生るも母樣の了簡一ッ何卒御慈悲を願ひたきとさめ〳〵泪を落しければ母親と是を興實と思ひ助るものあら逃延て命を延すが肝心なり幸ひ親父殿も留主あれば少しの金子を遣程より身を隱して善心より立歸り折を見合せ記事仕たがよいと言つゝ納戸より入て金十兩程持來り渡さんとあす時父太左衛門は歸り來り此躰を見て汝佐太郎憎き奴又母を欺き金を衒らんとあすや我が目より憑る上からは其儘より置べきかと四邊を見れば鹿十郎が刀ありしを取より早く只一ッ斬と切付るを佐太郎は身を飜し金をさらつて逃んとあせば又切付るを引外し駈出す機會より懷中よりばたりと金子を取落すより母は金子を隱さんと駈寄處を佐太郎は足より蹴と蹴返せば哀れ急所を蹴たりけんウンと仰向より倒れしかば太左衛門は驚き汝れ親殺しめと切付るを佐太郎は母の氣絶より猛狽し折又切込れたる事あれば迚も遁れぬ此場の時宜と刀横

取胸打より發止と打たる手が狂ひて父の羽先七八寸腋腹へかけて切下たれば太左衛門は老人と云深疵ゆえ二言と云ず息絶たり因て強悪の佐太郎も大いより驚きしと雖も今さら詮方なく何せ殺した物あれば大騒よも再び奥へ踏込で在金彼是探索め六十兩餘を懷中あし人の來ぬ間より小時を早くと後晦まして逃行しい大惡無道の曲者なり夫より佐太郎は熊右衛門の方へ逃來り斯樣〳〵すて母を甘く欺したる處へ父親歸り殺害なす中思いず兩親を殺せしと大變の事ありと驚くを佐太郎は一向騒がず此事我より一ッの計略有り夫は幸ひ嬢子の刀で切たれば此人殺しを渠より塗糊親の敵と地頭へ訴へ我等家督をせしめる工風成とゆければ熊右衛門横手を拍夫は實より妙策よして貴樣を立派な男より成べし先前就より迚惡徒等は打寄て酒を飲其夜を明けるこそ愚より又憎べき惡漢なれ

○佐太郎熊右衛門密談惡巧みの事
并鹿十郎無實より入牢の事

扨も鹿十郎は同國の山名八幡は弓矢神なれば武運を祈り且敵討の願顯を願日々より參詣あしけるが今日を夕暮より參詣あし夜より入て歸り來るより何よあく朋輩ざしければ急ぎて我が家へ戻りし所家内より燈火をなき故不思議より思ひ下男下女を呼立るより是も今日は暇を遣て各自親里へ行未だ歸り來らず然共太左衛門夫婦は如何あせをやと燈火を點て四邊を見るより納戸

の方より人の倒れ居る故能々見るに太左衛門夫婦い朱に染て臥居たりしかば鹿十郎是いと驚き暫時忙れ居たる處に男共を歸り來りて此体を見るより皆々慌へ出し一向に物も得言ず居を鹿十郎い申付て近所の者を呼びに遣りしに程々近所の者共馳集り同じく是を見て只忙れたるばかりなり其内村役を來りて談合すれ共外に詮方なく此事領主へ訴へたり又親類縁者も集り得て種々評議あすに鹿十郎い一統へ向ひ御子息い勘當あされしなれども斯死あれたる上い一目逢せて遣されあば幾心にかへる事を有べきか依て早々呼寄死體を見せしめんと云に道理なりと佐太郎の方へ人を走らせければ左太郎い故意と遲きたる而色に て馳來り兩親の死骸を見るに然も悲し氣に泣けるに親類共も心の内に左太郎い悪黨ながら親の死目い斯も哀しきかと俱に涙を催しけり彼是する中村役人來りて明朝検使出張の由申せしかば皆々其夜い番をおして翌日を待居たるに朝辰刻半頃領主よりの検使來り夫々の口書を取しに昨夜家内中留主にて如何なる事にや存ぜずと尤も鹿十郎い何れもより先へ歸宅致し見付たる趣きを立検使い疵口を改むるに太左衛門い肩先い八寸切れ一刀にて息絶たり又妻い疵所もなくして息の絶居たるい不思議なりと鹿十郎へ種々尋ね有けれ共兩人共死したる後歸宅せしかば一向に様子い相分らずと言時左太郎い役人に向ひ私し事い太左衛門が實子に御座候是迄親共の勘氣を請居久く我が家へい出入致さずして共父母共死去致しい事故

親類より呼に參り罷り越候處疑いしきい是れある鹿十郎とやらず者其譯い兩親の切害に遂ひ去体盗賊に候へば在合の刀にて切殺し候事い有べからず然るに右鹿十郎所持の刀に血の跡是ある上い同人が切害致したるに相違なし縁に早く歸り來りしとて人先に騒ぎ立しい不思議なりと云に鹿十郎い甚だ迷惑おし佐太郎とやら謂おき事を云ふ者哉我い八幡へ日參おし何時も夜に入て歸るおり依て比騒ぎも知ず下男下女い所の習ひとて夕暮前より暇を遣し遊びに行し故此事を弁へず我又何意趣有て太左衛門夫婦を切害すべき又人先に騒ぎ立しい某し餘の者より先へ歸り來りし故おりと云を佐太郎い打笑ひヤア巧みたり痩涙人口賢く云共天道是を赦さんや我が父い正直なる者故汝を不便に思て扶助せに汝却て悪心増長に此家を横領せんと巧み父を害ぜたるに相違なしと云に居合す親類始め黒白を評に難く只獣に て居たりける検使の役人兩人に向ひ已れ等此所にて爭ふ事勿れ佐太郎汝い父を害されたると思いば奉行所へ出て尤立べき鹿十郎汝も覚ばおくべき奉行所にて弁解す可とて村役人に付死骸を假に葬らせ鹿十郎始め下女下男迄領主の役場へ召連たるに當所の奉行役二人有ども月番持にて川口軍右衛門當番なり此者い私慾のみ深く黒白を弁へ難き故佐太郎が偽言を誠と受て鹿十郎に疑ひを懸兎角に非儀の沙汰あるに鹿十郎種々云解と雖を軍右衛門い當地の者ゆえ佐太郎を自から贔屓の沙汰に及び鹿十郎い身分不分明ありとて入牢に付られけ

れば鹿十郎い餘りよ憎恨遣方なく玉石の弁へあく出て能も非行を勵る者かなと川口へ搭言を云ひし故猶更軍右衛門い鹿十郎を怕み歸よ落さんと思ひ種々拷問よ懸んとすれとも鹿十郎い只々身よ覺ねあしと云切其後更よ言葉もあく俯伏てそと居たりけれ

○山本儀右衛門黑白弁明の事

弁鹿十郎無實の罪を逃るゝ緣

扨も佐野鹿十郎い思ひ寄ざる無實の罪よて入牢申付られし以來日々拷問よ遇ると雖も唯の役人川口軍右衛門い渠を他國の者と見あし左右よ依怙贔負の沙汰多きよより鹿十郎い只覺えあしと答へるのみよて其他い一言も發せず依て猶又佐太郎等を呼出し吟味あるよ前以て申立し通り鹿十郎の刀よ血の附居るい渠の所業よ相違あき慥なる証據なりと言張よど鹿十郎が一世の災難遁るべき期なきの盛其月を暮日と成月齡替るよより川口軍右衛門い同役山本儀右衛門へ人數しい鹿十郎の態さを委しく申次たりけり因て山本儀右衛門承知あし一同呼出して吟味よ及び去所鹿十郎の有樣人殺しなどすべき人体よあらざるゆえ腹心の家來を以て太左衛門方并ふ佐太郎等が始末内々取調べけるよ鹿十郎い其日全く入牢へ參詣よ行違く歸りし事又佐太郎い豫て實父さへ疑想をつかし勘當あせ主者とあり依て一件い盜賊あとの仕業よて鹿十郎よいあるべからずとの趣きあれば山本い然もあるべきと心得て佐太郎等

を呼出し又々吟味あるふ佐太郎い幾度御尋ねあるとも私し儀い又太左衛門より勘氣を請候身なれ其實父の仇よ候へば渠を解死人よ取申度渠如何よ偽りを申候共此一件盜賊乃所業と い存申さず外より道入候賊よ之あき証據い絶戸よ仕廻置い箱を打壞し貯への金子五十兩紛失致し居候然すれば勝手を存じ候者よ相違御座なく尤も召使の者い皆々留守よて鹿十郎一人早く歸りしと申が慥なる証據よ御座いど他まで申立るを山本い暫く無言よて聞居たりしが佐太郎よ向ひ如何よ汝今申たるよ相違あきや若又違よ事あるよ於ていい其方も同罪なるか と言よ佐太郎い如何よも偽りい申立ずと言切まかば山本儀右衛門い佐太郎と發打と白眼發な不屈者め汝い鹿十郎よ何か意趣よでもあるや其方い親よ勘當を請たる身よて太左衛門が仕鮮盜し金子の在所并よ其多寡へ辨へ居るい第一の不審あり其上親類組合を指置刀よ血の附たると証據とあし人よ抽んでゝ申立る是又不審の二ッあり疑迄錢を大事と思ふ心有ば何故存生中よ孝養を盡ざりしや殊よ汝い當所張弧者鳴と吟味の筋あるよより入牢申付るど云渡し此日佐太郎を入牢よ成たり山本い思慮深き者故組内々取調べし處佐太郎が仲間千里足の虎と言者或日與漢伸間一角の才太と兩人酒屋へ道入醉よ乘じい時才太は虎よ向ひ佐太郎が今度の働きい大仕事五十兩せしめた上よ太左衛門が跡式迄せしめるとは實よ甘く遣たせ手前あとい一日乘て居れば今日の幸い少し間尺よ合ぬと申よ虎以是々才太壁よ耳あり

大願成就迄い秘すべし〳〵と囁きけるを折節山本が隠密の者此事を聞取直に立歸りしを二人い夢ゆを知ず飲居たる處へ山本が組子十四五人今の隠密を先ゆ立て入來り上意と聲を掛ければ虎も才太も驚く處を忽ち召捕領主の役場へ引立たり因て山本儀右衛門い兩人の惡淡を引出させ一々吟味あすゆ始めい糺々ゆ僞りけれ共終ゆい證拠詮議ゆ隠し課せず佐太郎熊右衛門が悪巧みを殘らず白狀に及びけるゆを兩人とを入牢申付翌日又佐太郎を呼出し吟味あるゆ兎角強情と〻張けれ〻彼の才太と虎を引出して突合せしゆ流石の佐太郎も大いゆ驚き終ゆい親を殺したるよう金子を奪ひし事迄白狀あしけれ〻同類熊右衛門も召捕吟味の末此一件終ゆ裁決とありて一同を呼出さ山本い鹿十郎ゆ向ひ其方儀無實の罪ゆ陷入んとせし處此度無實の儀明白ゆ分うしゆ付出牢ア付る併さ嫌疑をあるゆよう當處ゆ足を止る事あらず早々何國へありとも立退申べさと有るゆ鹿十郎い山本が明察ゆ感じ白洲を出て一先太左衛門が宅へ歸り村役人へ申斷り我が大小衣類等を一二品持太左衛門が跡を宜く弔ひ給と れと頼み置て當處ゆ出立たり又佐太郎い親殺の大罪磔架ゆ相成間類熊右衛門才太虎吉い死罪ゆ行われ此一件落着ゆ成たりけり哀むべきい太左衛門ゆて其身無實の者なりしが非業の最期い因か果か

○佐野鹿十郎奥州へ赴く事

并藤丈之助油屋娘ゆ戀慕の事

斯て鹿十郎い無實の難を逃れ太左衛門夫婦の落命を歎きしが遠ゆう江戸へ出て敵の樣子を探らんと思へども路用乏ければ何分必細く然れど思ひ立し事ゆを道を急ぎしが偶然心ゆ浮みけるい奥州白川の城下油屋へ尋ねあ〻路用い何とか成べ玄殊ゆ奥州い大國なれ〻民十郎ゆ出逢事をあらん又い大刀ゆ巡り逢も知れずと俄ゆ思ひを飜へし白川指て行し處程あく白川口へ着けるゆを油屋を尋ね德右衛門の方へ來りて案内を乞佐野鹿十郎ゆ申者御主人ゆ面會致し度と云入けるゆ德右衛門い夫こゝ先頃乃恩人ありと自身ゆ玄關へ立出鹿十郎を迎へ入一別以來の挨拶を述先年の御恩を報じ度存居候處能も〳〵御入來下され添けなしとて妻娘を出て彼是と立働き何時迄を滯留あるべしなど云て種々ゆ饗應け れ〻鹿十郎も喜び是迄旅行中艱難辛苦をなしたる事を物語り又民十郎と大刀の人体を咄し右樣の者い此邊ゆい居さるやと尋ねしかべ德右衛門い是を聞て一度い驚きたれとを又其隔遠あきを喜び右ゆ兩所の如き人体い更ゆ承せいりすさず尤を此城下い多く人の入込處故此處ゆ足を止め永く探し給へと深切ゆすけるゆを鹿十郎い此處ゆ暫く足を止め秋も中旬を過たりけり扨又同村の郷士ある藤丈助と云者の悴丈之助い當年廿八才色白く才知もありて天晴の男あり然れ共心立善からず已れゆ諂ふ者を好み聞いさるものを憎むの癖ありしが此油屋德右衛門の娘ゆ

吹之助
油屋の
小女
戀
蝶

聚懸して千束の金を贈ると雖を此娘い物堅き生れあれい手よだよ取らず返しけるゆゑ丈之助人よ負るを嫌ひ如何よしてか手よ入んと思ふ處よ劔道修行あす佐藤登之助よ云者尋ね來りしよより是を止先て懇應中九月朔日の事ありしが丈之助い登之助を伴ひ城下へ出て彼方此方を見歩行たるよ不圖油屋の娘よ出會しよ丈之助い豫ての戀人あるゆゑ身も震ふ程嬉しく云寄らんと思へどを登之助同道あるよ致し方あく只茫然と見送り居たりしを登之助い見て貴殿拙者よ心遣ひ云給ふせと早く追付て一献を汲給へと云よ丈之助赤面あ云貴殿よ迄斯見らるゝ上い何をか隠さん實い斯樣〳〵と女の强面を咄しけれい登之助夫い近來珍らしき烈婦なり妻よ娶い賴母しかるべし貴殿と渠とい至極似合しき緣なれい表向よ貰ひ給へ我媒妁せん万一彼是ヤさい刀よ懸てを貰ひ進らせんと云よ丈之助い甚く悦び夫より歸宅して登之助よ萬事賴みしかい登之助い油屋へ到り德右衛門よ對面して娘を貰ひ受度由をヤけるよ德右衛門い是を聞不束の娘御懇望添けあし併し渠い義理ある者ゆゑ他へ嫁す事と相成難く此段宜しく伺ひ斷り下されよとヤけれい登之助威猛高よなり武士が手を下て賴む一條假令義理い有よをせよ是非〳〵貰ひ請度否とあらい刀よ懸てを承引させねい成ずと言よ德右衛門い殆んど持餘したれ共當時鹿十郎が逗留してあれい自然から心丈夫と思ひ明日伺返事ヤべしと云云かい登之助然らい明日乾度吉左右伺待ヤと云置て立歸り翌日を遲しと待居たり明れい九月二日登之助い丈之助同道よて油屋へ來り昨日の返事を承まいるべしと云よ奥座敷へ通し只今よ德右衛門御目よ懸り候ヤ暫く爰へ待せ置しが頓て正面の唐紙を押開き徐々と立出るい德右衛門よ非ざれい兩人い不審あがら熟々見るよ登之助い見覺へある人なるよアヲ是いと思ひ言葉もなし扨珍らしや登之助殿今承まいれい其許よい聞ずくよて女を所望せらるゝ由某しも望みし女あれい我等相學よ罷成申べし手柄よ寄てい貴殿へ女を進らせん我又勝い以後女よ心を懸らるゝ事勿れ殺手術い先年尾州よて示し置れい覺ゑあらん併し貴殿を其後諸國を修行せしゆゑ上達の程を試みんとあらい立合れよと聲を懸たるい是別人あらず佐野鹿十郎あらしかい登之助い案よ相違なし暫し忙然ゝりしが丈之助の手前を恥かしく忽ち我慢の心を生ヒナヨ小賢き大言哉腕負い時よ云云其大言の口を閉させ呉ん卒勝負せんと言よ鹿十郎然らば此所い互ひよ足場悪きよより廣野よ出て雌雄を決せんと立上れい登之助丈之助を俱よ立出四五丁西へ到るよ一里四方の野原あり鹿十郎と イヤ此所よて勝負せんと申を登之助と心得丈之助よ目配せしながら一刀を引拔唯一討と切付るを鹿十郎と刀を拔ず閃りと身を躱せば登之助是い殘念と再び上段より切下すを鹿十郎後ろ樣よ五六間飛逃る所を丈之助と左より橫擲りよ切込よ鹿十郎い刀を拔放ゑあがら發止と受止しかい登之助と隙さず飛込兩人烈敵切込を鹿十郎い事とをせす右よ拂ひ左りよ醐し飛鳥の如く戰ひたり

此騒動を城下の者聞及び我も〳〵と見物の人夥多敷く馳集り極々よ評判あしたりけり斯る所よ歳の頃廿四五よ敷て色白く眉秀たる町人体の者人を押分て見物あし今鹿十郎の振舞天時の働き殊よ少しく太刀筋よ見覚ねありと感し居たりしが登之助丈之助兩人盛かけて一度よ切込ゆゑ流石の鹿十郎もあはやと思ひ見物の人々手よ汗を握る折から鹿十郎は身を翻がべし前よ在るか思へば後よ現われ宙を拂へば身を沈め裾を薙れば飛上り千變万化虚々實〳〵さらよ勝負を果ざりけり然るゆ見物あし居たる彼の町人とずか〳〵と近寄三人切結ぶ中へ割よ進居たる刀脇差の風呂敷よ包みたるを踏入て止るよを丈之助聲を揚小癪なる素町人其處退をれと言つゝ顔を見るよ此邊へ來る刀商人民右衛門と云者なるゆゑコリヤ民右衛門邪魔ぞて怪我するゆと云よ民右衛門ハ騒がず御三方の御爭ひ何ある仔細と存せぬを兩雄爭そへば必らず一虎滅ぶ各々方何の意趣あるか私しよ死を歎め給ふい大丈夫のせざる處先々御爭ひを止め給へと云弁舌と云其挙動勿々町人の業よあらず鹿十郎ハ感心あし天晴の格肯如何よも恥入たり登之助殿其許何と心得らるゝやとヤよ登之助ハ先到より何も百ざりしが此時よ至り佐野氏得心ならば我ハ兎も角も丈之助殿如何やと云よ丈之助と迎を勝雖きを知りし故御兩所よ異存あくば我亦何とか云んと終よ各自刀を鞘よ納めければ見物ハ彼の刀屋民右衛門が割らひを感ぜ皆々罷る罷暫しは鳴も止ざりけり此折から德右衛門家來引連來りしが皆々へ一禮あし此起りハ私しよりの事なれば先々拙宅へ御入下さるべしと言よ登之助丈之助は否みけるを民右衛門も口を添の者且那先々德右衛門殿の方へ御越あるべし双方和熟が肝心ありとて皆々同道あし德右衛門の方へ到りしよ酒肴を出して饗應ければ丈之助登之助を彼の刀屋民右衛門よ段々と論され一同和睦して民右衛門が計ひを悦び酒宴よ時を移せしが兩人ハ暇を告て歸りけり跡よハ民右衛門鹿十郎よ向ひ貴方の御太刀筋恐れあるから感心仕つると言よ鹿十郎ハ會釋あし其許町人よハ珍ら敷人物出生は何國よや今は町人の姿なれども昔こそ忍いられ定ぞ武家出あらんとヤホ民右衛門切々然機なる者よ非ず元より町人ありと答ふるよ否や隠し給ふゆ我人の相を見る事幼年より好みたり今試みよ其節の出生を當申べしと暫く面を視りしが許出生ハ肥後國あるべゑと言ふよ民右衛門面を赤らめたれば鹿十郎は心中よ扨こそ我が推量的中せりと思ひ猶を實否と糺さんと其許よハ國を立退大切の品を尋ね給ふゆるべゑと申けるよ民右衛門慈さ如何よを國を立退大切の品物を尋るありと言を民十郎扨ハ我が尋ねる異人と猶も酒宴を催ぜけり

○鹿十郎民十郎へ巨細を物語る事

并民十郎慇懃の事

斯て鹿十郎ハ猶民右衛門の實否を糺さんと看相よ托して顔を眷め其節よハ兄弟三人の中然

る物語りして父上い鎗一筋の主なるべしと言ければ民右衛門大いよ驚き仰の通り我は肥後の熊本父い武士なりと申よ鹿十郎ハ彌よ其人と思ひ姓い浮田氏名い民十郎殿あらんと言ば民右衛門仰天あし如何して我が素性を委細知らる人や是よい何か仔細ぞあらん併し多明を憚る故外の座敷へ行て物語るべしとヤを鹿十郎い止め否々當家の主よは万事打明たれバ心遣ひあし給ふ事あかれ我い其許の父傳五右衛門が大刀よ討れ玄學より敵討よ出たれ其許を尋ぬる既よ三年其仔細は斯樣〳〵と傳五右衛門殿よ厚恩を請し鹿藏とヤ者なり熊本を出て共不運よ玄て民之助い返り討よ遭玄事迚一々物語り玄かバ民十郎い聞度毎よ驚嘆あ玄無念の涙雨の如く拳々握り切齒をなし男泣よぞ泣たりける鹿十郎を俱よ嘆きしが良あつて涙を拂ひ然らバ貴所と諸共よ仇討せんと是迚若ゐなしたる甲斐有て圖らず廻り會しい天道來だ捨給い ぬ驚しありとヤよ民十郎い其志操を賞び然らバ少しも早く讐敵と討んと血氣よ逸るを鹿十郎は押止め兩人斯廻り會上い急よ及ばず能々思慮して渠が在所を尋ね索んと其夜い四方八方の物語りよ深行るを知らざりしが主人德右衛門い傍邊よて是を聞增々兩人の孝義をかん玄自然御入用あらバ路用の金子の何程よてもよあらすべしと力をそへるよ兩人い其深切をゞ喜びける扨民十郎い兩人よ向ひ我い領主の咎めを受一旦死したるを同前我が爲よ大刀い父が仇我が仇あり殊よ我が死よ代りし久藏の生國い奥州も云ふ事故此國よ身寄もあ

らんと來りしが我が事を外をでい久藏と呼び候へ共當處でい民右衛門と名乘刀商賣となすも一ッい寶劔を尋ぬる爲二ッよい久藏の所緣と尋ぬん爲なりとの咄を聞德右衛門い膝を進め其久藏と申い年頃五十餘才眉と目の間よ切疵の痕ある者よてい御座あきやと言ふ民十郎實よ其通りあるゞ申せバ德右衛門い莫さら夫こそ二十年以前家出せ玄私し兄よて其忘れ紀念の娘より此度の騒動起りたり今貴兩樣の御咄しを聞兄よ逢たる心地すれと涙を流し不思議の對面を娘お喜代よを咄しければお喜代の悲歎言ばかりあく暫しい物も得言ざりしかバ德右衛門是を慰め餘り夜の更たれバ皆々樣も嘸かし御勞れあらん早々御臥まあれとて一同臥床よ入よけり頓て夜も明けれバ德右衛門始め皆出久藏の命日を佛前よ記し娘お喜代諸俱よ暫時同向をなし居たるよ源次乃者 跡樣佐藤樣外御一人の御武家御入御座候と云ければ德右衛門差圖して奥座敷へゞ請じける

○鹿十郎奥田勘藏と試合の事

并敵大刀七郎右衛門の在家を知る事

頓て德右衛門い座敷へ出三人へ對面あすよ丈之助い少し進み昨日の不埒い御宥免よ預りたし就てい同道の武士奥田勘藏と申さるい人諸修行なし給ふよ佐野氏の手續を咄せし處對面致し度旨乞るいよより同道仕つりしあり此段宜敷賴み入るとあるよ德右衛門承知仕つる

と有て奥へ行鹿十郎へ斯と申聞れゞ對面すべしとて直ゑ立出丈之助登之助へも昨日の失禮御宥しあるべしと會釋なしけるゑ兩人を痛み入るとの挨拶ゑて互ひゑ禮儀を述暴し時眞田勘藏い鹿十郎ゑ向ひ初對面の禮ゑ及びけれゞ民十郎も出來りて四方八方の咄しをおしける中勘藏い試合を望むゑより然らゞ先民十郎と試合あるべしとて立合ける勘藏も一刀流の名人ある故双方禮義有て暫く上段下段と打合しが勘藏技や勝りけん民十郎が打込む太刀を引外しヤッと懸かけ肩先を打たりしかゞ皆々天晴成りと譽けるゑ勘藏い徐々と下ゑ居て民十郎殿の太刀筋こそ天晴あり今我が勝たるい過ちの功名ゑ候とヤゑ民十郎ゑ送つて禮をおし眞田氏の傍言葉分ゑ過たり左右未熟の某し爭及ぶべきと互ひゑ挨拶あるゑ薩佐藤の兩人扨い民右衛門殿町人と思ひの外天晴の武士ゑあられしかと是迄の不禮を謝夫より皆々酒宴とあり世の雜談ゑ時を移したり時ゑ眞田勘藏い佐野浮田の二人ゑ向ひ某越前福井ゑて町道場を出せし八重垣流の達人大刀玄蕃と云る者と試合を致せしが彼者ゑ二本迄討れ候と言ゑゞ民十郎鹿十郎聞て夫い何時頃の事ゑいやと兩人等しく尋ねるゑ勘藏申い拙者出會しい當年七月上旬の事ゑ御座いとあるゑ兩人い打喜び天を拜し地を拜しけるゑゞ座中の三人い不審ゑ思ひ何成事ゑて斯喜ばれ候やと問れて今更隱す事もあらず餘儀あく敵討の次第を咄しけれゞ三人の者を聞度毎ゑ憤ほり夫い憎き奴あり我々を助太刀申べしと言を鹿十郎眞段添

けあく候へ共討い民十郎助太刀い某しなり其上貴所方の助太刀有ていい外分を宜しからず殊ゑ卑怯と思はれんも殘念ゑ候間此儀い御斷りヤべしと言ゑゞ三人を道理と同意おしたりけり扨丈之助い鹿十郎ゑ向ひ佐野氏の御手練い見事ながら大刀とやらも諸國を廻りたれゞ手練の程計り難し幸ひゑ眞田氏と試合ありていい如何とヤゑ鹿十郎道理の儀あり然らゞ眞田氏御立合下さるべしと言ければ勘藏を一禮おし未熟の某し御立合下さらゞ忝けなしと夫より支度を調へ双方立向ひしが眞田い力を極めて戰ふと雖も子供を待遇が如くあれゞ勿々及び難く只息のみ切る樣子ゆゑ皆々聲を揚て止めしかゞ兩人共立別れて一禮おし眞田い鹿十郎ゑ向ひ聞じゑ增る貴殿の武藝此上い何卒御弟子ゑ成下されたし某しい佐藤登之助より聊か優りし故是迄い貴殿が斯程の御業前とい承知せざりし處御力量と言ひ武術と云ひ恐れ入て候ゞ平伏して遁けるゑ登之助を進み寄某しとても此上い御指南願しく候と言を聞て佐野い慧き勝負い時の運各自方い天晴の武術ゑて我等如き者の指南を受らるべき道理なしと辭退あすを兩人とを達て望むの体眞實ゑ見えしかゞ終ゑ師弟の約を結びたり此日い九月十三日ゑて今宵い後の月見あれゞ夜と共ゑ語り明し翌日民十郎出立せんと云ゑゞ右衛門等も尋常の事なれゞ止むべきあれ共歟討と有ゆゑ別れの盃をおし翌日未明ゑ出立ゑ及びしかゞ皆々國堺まて送りて別れけり夫より兩人い昨日迄敵の在家を白川の尋ね詫たる旅枕頓て曾

津と勇み行氣を若松の張強く鑑破と向ふ諏訪峠九々折さへすら〳〵と越路よ入べ五十公野や新潟田も過て新潟の湊を餘所よ潛薄ひ亡人忍ぶ寺泊り出雲崎と神々の寄台國の名よを似て兩人か武運長久と祈る柏寺柏崎今日か明日かと今町し甲斐こそあれや離討の名を末代よ高田ある城下よ一先着たりけり此所より越前福井迄い六日路あるよ心も道も急ぎしかべ早三日目乃夕方よい福井の城下へ入ま玉よど民十郎べ逸て直樣敵の屋敷へ打入んと云を鹿十郎制し止め急てい事を仕損じると言べ鶴と心を落著給へ最早我の物を取より安しても其夜い旅籠屋よ泊りて兩人手筈と喋し合せ翌日鹿十郎い深網笠よ顔と隠し一人大刀が道場へ立寄見るよ表札よ大刀玄番とゆり内の樣子を窺ふ處よ頃猶古と見え福井城下の若侍士數多居並び上段よ大刀七郎右衛門若座なし門弟共よ差圖して居たるよど深網笠を取て案内おし取次を以て先生よ直談なし度と云入けれべ大刀聞て失禮なる者かお來歴も言ず我ふ逢んとハ氣遣ひおり如何樣ある姿の者おりやと問よ取次の者答て年頃三十一二歳人品能者なりと予ければ先透見おさんと立出て覗き見るに豈計らんや佐野鹿十郎おりしかべ玄番い大いよ驚き面色變じけるが果假令方夫不當の勇有る共今一人なり何程の事わるべきと思ひ門弟を以て只今い客あるよより明日來り給へ面會せんと云せけれべ鹿十郎い懐中より手紙一通取出し取次よ渡し明日い必らず出會有べしと言捨て立歸りたり跡よ大刀い是を開き見るよ明日

い尋常よ勝負有べしとの文言おるよど書面を引裂門弟等よ云樣我等九ヶ年以前肥後よ有し時武道の意氣地よ依て主家の爲よおちさる浮田傳五右衛門と云者を討果したり然るよ渠等が身内の者我等を敵おりとて尋ね來り明日勝負せんとおり傳五右衛門の悪事既よ主家を亡さんとせしを我よ見顯されしと意恨よ思ひ敵呼いり憎さを憎し使て我渠を明日討んと思ふなり各々助太刀なし給へと言よ血氣の若者等何の思慮もなく偽りを誠と思ひ如何よを先生よ敵たふ奴們我々御助太刀申て給よなし呉んとて我も〳〵と馳集る事三十餘人よ及び何處よて出會給ふよやと申よ場所い未だ定らず依て此方より其場を見立申べしと相談最中又々若き男衣服大小立派よ出立案内おすよ取次い何方よりと申せべ我い浮田民十郎と申者明日尋宅へ罷出し間他出おく御待下さるべしと言捨歸りしゆゑ取次此段を大刀よ申聞けるよ大刀扨い民十郎も存命おりしかと驚くと雖を門弟の前をあれべ其日い門弟等よ計略を喋し聖日をこそ待居たれ

○大刀の門弟大勢助太刀相談の事 幷佐野鹿十郎勇猛の事

扨も佐野浮田の兩人い七ヶ年の艱難苦心の甲斐ありて父員弟の敵大刀が在家を尋ね得しかべ天へも昇る思ひよて明れば寛永九年申十月二日未明より支度を調乃へ其日の出立よい民

十郎は白茶羽二重の小袖に萌黄仙臺平の野袴を著し白布の鉢巻をおし下には鎖帷子を著込たり鹿十郎は黒羽二重の小袖紋付に勝色純子の野袴を穿是も下に鎖帷子を著し宿屋の主人を呼我々斯樣〳〵の次第にて今日敵討ゐ向ふありと言聞するに宿屋の主人は驚け其詮方あければ首尾能く我本望を遂られよと云時兩人は細川侯よりの墨付を取出し此墨付は當地城内の御家老本多内藏之助殿へ差出し呉られよ尤も願書は別紙に添あるより其方の勘儀よある事あし急ぎ取計ひを願ひと申す主人は兩人の勢ひに恐れ畏まりひと云ければ又頃あるべし急ぎ取計ひを願ひと申す主人は兩人の勢ひに恐れ畏まりひと云ければ又頃ある者に掛酒等を持來るべしと金子一兩遣はせしに是又畏まりひと酒肴を持參おしければ兩人は盃盞を取交して首途を祝ひ頓て駄ちをとさて立出るに未だ夜の明ざれば東天に向ひて何卒首尾よく敵を討さしめ給へと武運を祝りつゝ一歩を百歩の思ひにて太刀の門に來たり見るに門戸を閉居たるに兩人大音に太刀玄蕃といふ假の名本名七郎右衛門來たれ目覺ずや七ヶ年以前汝の爲に横死なしたる浮田傳五右衛門が一子民十郎幷に鐵砲ある佐野鹿十郎昨日約せし通り父弟の讐敵を討んと只今是へ來りたり早く目を覺して勝負を決すべしと呼ばる聲の耳に入りしかば大刀伝へと目を覺し門弟等へも豫ての手筈を諜し合せ充分準備整ひし時門を明よと申付る中猶表の方に聲高く卑怯なり大刀七郎右衛門早く門を明ずやと呼ばるに七郎右衛門は充分に支度を調へ玄關へ出て床几に凭り門弟等數十人を所々に配りて後門を

開きければ兩人一度に飛込んとあせる小鼠のあり鹿十郎是を見て呵々と打笑ひヤア巧んだり七郎右衛門汝は武士と思ひしに卑劣極まる畜生ありと大音に呼ばりしかば大刀が門弟等は是を聞我が師匠を罵る憎き白痴遣きとて十五六人拔連て破落〳〵と打て懸るに鹿十郎は各々方に恨みはなけれど斯の如く手向ひ致さるゝ上は是非もなし相手になりて遇らせんと傍邊なる樹の古木に手を懸ると見なしが中より捻折是を打振〳〵若者共を追散すに血氣の若者等は大勢を頼みに敵てと集り〳〵鹿十郎を追取卷体宛然一羽の鷲に烏の簇る如く暫しの間挑み合に鹿十郎は心焦ち一挫ぎとは思へ共當所の武士に怪我とさせては後六ヶ敷と胸を摩り故と對戰居たる中民十郎は大刀目懸て近寄を門弟等十五六人遮隔てるに民十郎邪魔入て怪我ばしせんより其處退給へ敵きは大刀通さとて獅子の怒りを顯はし駈入らんとなすに門弟等は師匠を討せじと民十郎に切て懸るゆへ是又余儀なく渡り合多勢を相手に戰ひたり大刀は玄關の上より門人等に其所を付込此所を討と指揮おしければ民十郎心は彌猛に逸れども多勢に無勢追々力衰へ既に危く見なたりけり

○民十郎大刀の門弟等と戰ふ事

并藤佐幾與田等民十郎の危急を救ふ事

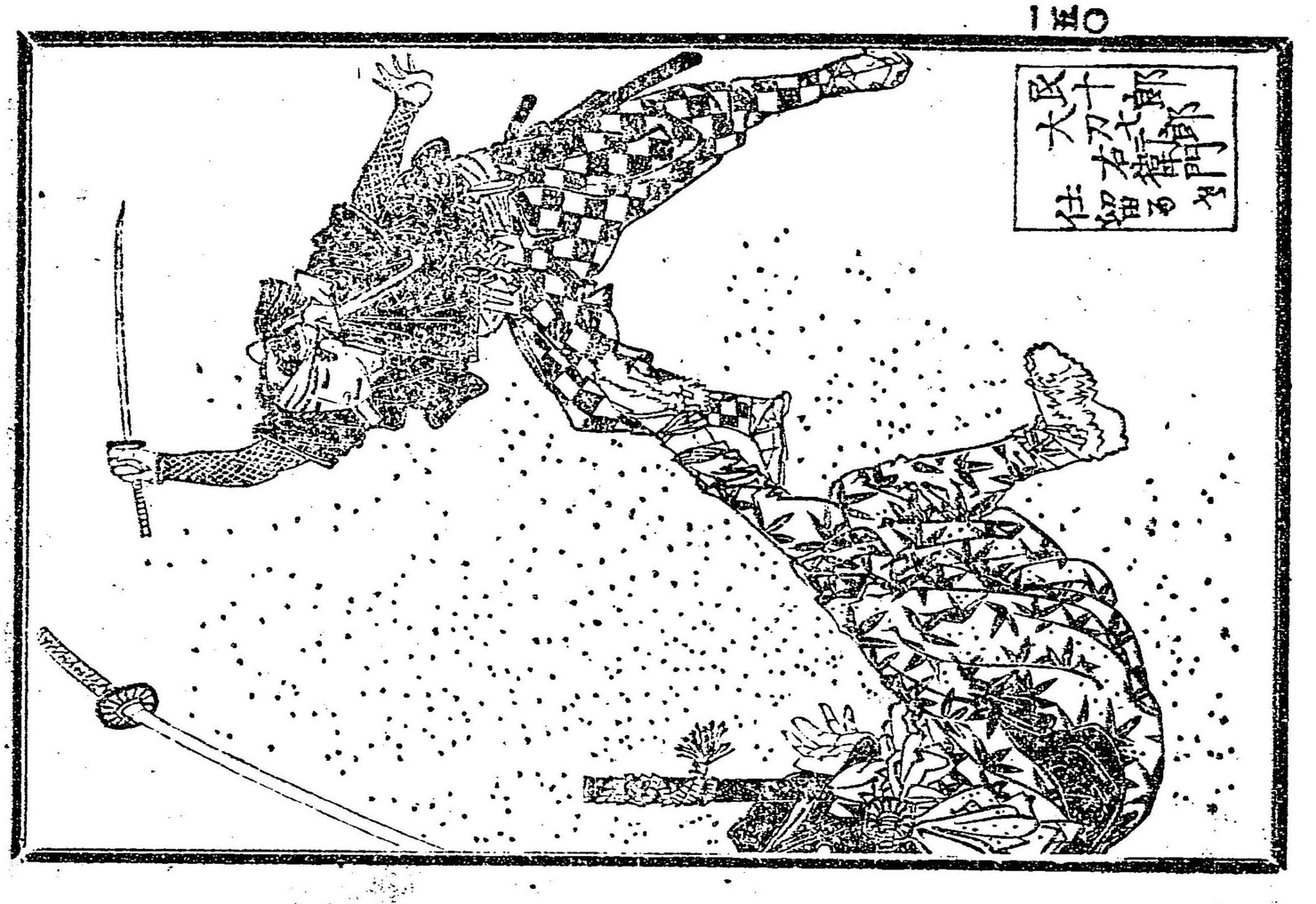
扨も民十郎は身命を惜まず敵七郎右衛門を討んと一身凝堅り阿修羅王の荒たる勢ひにて勇

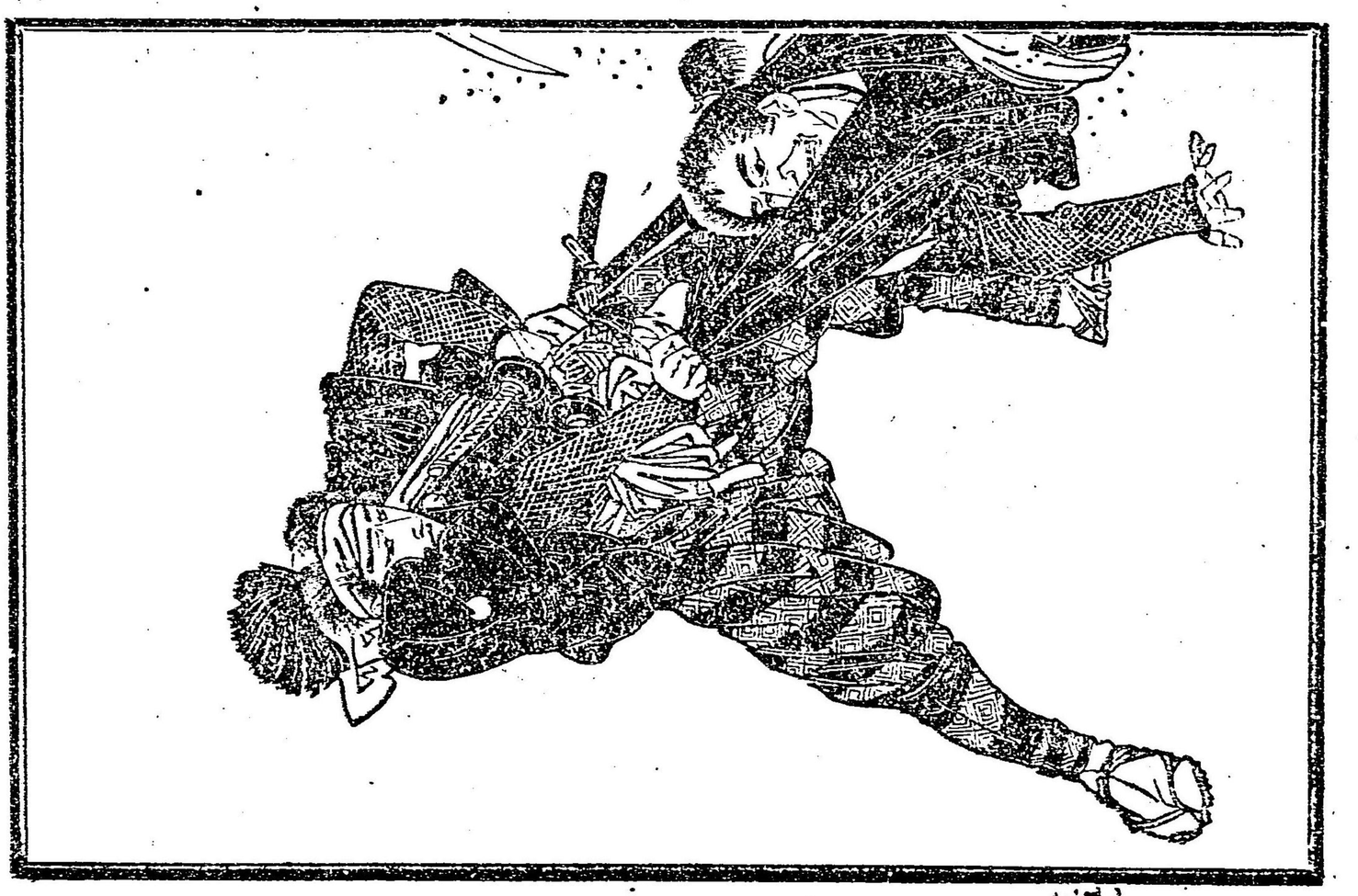
み進ひと雖も多勢に隔られ心焦るより息切て既に危かうしを鹿十郎は遙かに是を見て民十郎に怪我有ては一大事嚴早此上は是非に及ばずと今迄對戰居たりし當所の武士を片端より叩き倒し一草耿天の如く駈寄る處に民十郎と戰ひ居たる門人共又鹿十郎に討て懸るゆゑ小癪なりと右手左手に投付〳〵人礫を打あがらヤヨ民十郎目指て大刀一人助大刀の奴們は我引請たり早く七郎右衛門を討取れヤッと云に民十郎は是に氣を得て大刀を打て掛るを躱て大刀が片腕と顔みし當所の若者十人ばかり玄關の脇より破落〳〵と馳出及民十郎を打て掛りしかば民十郎も覺ずと一生懸命敵を眼前に見あがら討事ならざる殘念さに匹夫等何程來る共恐るゝに足らずと多勢の中へ眞一文字に切入四角八面に戰ふと雖も多勢を頼ひ門人等民十郎を追取卷追つ追れつ既に鹿十郎を思はず半町ばかり隔りたり此爭ひに市中の家々に戸を〆屋根に上りて曾見物なす又鹿十郎は成べくたけ助大刀に怪我をさせずと多勢を相手に刀も抜ず戰ひしが又もや多勢の助大刀民十郎を取卷ゐと以前の松の木を援に振廻し當るを幸ひ薙倒すに即死手負數知れず民十郎は段〻と宿外れへ追踏され殊に先刻よりの戰ひに心身勞れて又も危く見えたる處に多勢の者の後ろより三人の武士顯れ出今民十郎の危ふきを見て無二無三に切卷りしかば助大刀の多勢は大いに驚き四方へはッと逃散たり因て民十郎は再び危き處を逃れ是を見るに別人ならず鹿十郎と朋弟の約束なしたる

佐藤登之助藤丈之助眞田勘藏あり勘藏等三人は大昔に加勢の奴們は我等三人にて引請たり貴殿は早く敵を打給へと言を聞返答する間をわらばこと血路を開き一趨に道場指て馳行見るに大刀は什辭し面に饒として在けるに汝大刀觀念せよと切懸るを七郎右衛門は油斷の機から故大きに驚きしが心得たりと抜合せ丁〻發止と戰ふ故民十郎は數度の戰ひに勞れしかば思はず大刀筋の亂るゝを七郎右衛門は新手ゆゑ付込〳〵打太刀を右に飜し左に開き中小石に蹴き右の膝を著所を大刀得たりと上段より打下すを民十郎は居敷たるまゝ確かと受止るに大刀又疊掛て切込ると民十郎めとやと見えし處へ鹿十郎は忽然と走り來り大刀が太刀眞中に差翹したる襟首取て七八間先へ投出せしかば是に驚き七郎右衛門は飛起るや否や一趨に逃出すを兩人追しいせじと追行に又以前の加勢わりて掛隔るを鹿十郎をの〻くしやと取て投退何國までも追迫るに大刀は町中より東の方へと逃込しが終に行方を見失ひ邪魔あす者を投退〳〵切懲をなして立たる處へ民十郎を息を吐々馳來るに斯樣〳〵ありとヤせば民十郎は足摺して如何なれば斯遲强き大刀かあと歎息あすに鹿十郎假令大刀天ふ隱れ地に潜ひの術有とも嚴早天命盡たれば逃るとて逃さんや決て案じ給ふ事勿れ我先に切殺さんは易けれ共其時に初太刀を讓らんと思ふが故に取逃したり然れど此續道は外へ出る通路あき由なれば猶是より追行んと兩人談合の樣から眞田始め三人の者來りしに鹿十郎

め不審如何ある事よて貴所方此地へ參られしと云よ三人言葉を揃へ助太刀の申譯あけれど
を我々銘かよ申合せ万一危急あらば助力すさんと見之隱れよ參りし處指たる功いあけれ
ども先刻民十郎殿多勢よ圍れ給ふ故是を救はんと聊か微力を盡したりと云よ鹿十郎い其深
切を感じ民十郎も俱よ助太刀を謝したりけり然らば猶大刀の行方を尋ねとて三人を俱々七
郎右衛門を搜けるよ更よ影たよ見ゑず皆々倦厭たるよ最早日も酉へ傾き精申刻よを近け
れば民十郎い頓りよ心焦狂氣の如く儘近を尋ね廻る中北の方より數十人の警固を引連入
品能四十歳位の武士陣羽織を着去馬上よて此方へ來り民十郎を見て近習よ指揮なせば近習
の侍士馳來り民十郎よ向へ其許い今日敵討よ出たる本人よ哉主人ヤ付よ候間同道よて彼出
あるべしと申よ民十郎如何よも拙者儀い父の仇大刀七郎右衛門を討取らんと當所を爭かせ
候段御咎め有べく存候へ共口惜きい敵を取逃し只今尋ね居候處あり首尾能討取候上い御國
法よ相任せ申べしと言捨乂々心當りを探し行よど侍士い止る事能はず依て此段主人へ申聞
るよ道理ありと其儘行過たり是越前家の重臣本多内藏之助よして先刻宿屋の主人より願書
を出せしかば夫々警固を差出る又自身よも市中を見廻りしなり然れば東の町口を警固あり去
たるい同家の家老吉田修理あるが今此處へ一人の武士扮身を提て走り來る故修理い其者を
止めよと下知あすは大勢六尺棒を持て追取卷よ武士い猶通れんとするを修理い聲懸後い當

城下よ道場を出せし大刀玄蕃あらん今日細川家の家來より敵討を願出したるよ其方此處へ
來るい心得ずと咎むるよ大刀最早遁れぬ處と思ひ仰の如く拙者い大刀玄蕃よして細川家の
武士七八人徒黨候て理不盡よ敵呼ばり致し候間止む事を得ず其場を切拔是迄罷越候然るよ
御大身方御得心の敵討よ御座候い尋常よ立合申へしと答る中よ民十郎を始めとして鹿十
郎外三人を追々此處へ來りしかば彌々大刀い遁れ難く然れば勝負を決せんと云よ警固い遠
卷よして見物し因て民十郎と大いよ悦び勇む處よ本多吉田の兩人より最早夕刻よありしか
ば以方中飲を食し英氣を養ひて後よ立合れよと有よ鹿十郎い有難しとて充分よ食しけれ共
民十郎い逸る心より食の進ざれば白粥を與へ又冷酒をも出しけるよ外三人の者を酒食をあ
し敵七郎右衛門へも酒を飲せて皆々精神加りければ確勝負を決すべしと双方立合しよ民十
郎動もすれば危く見ゆる故鹿十郎い聲を懸氣を勵して戰いするよ大刀を剛者あれば一世の
秘術を盡して戰ひ一上一下と切込を民十郎も年來の宿意を達するい此時なりと前よ顯われ
後ろよ隱れ千變萬化よ切結びしが如何したりけん民十郎い大刀の大刀を請損じ肩先二寸程
切込れ蹌踉所を七郎右衛門い聲掛汝を返討成ぞと一聲高く切込を此時敏く彼の時遲く鹿
十郎い駈寄と見る間よ大刀が右の眉先を引掴み遂後方へ投付たり依て民十郎い眼蹌足を踏
直し七郎右衛門が傍よ駈寄胸元目懸て切付るを大刀い刎起あから民十郎が足を拂ふよ此方


大臣
大刀十郎
仕組の
本神戸
門郎



を後樣ゑ飛けるが尻居ゑ撞と倒るゝを七郎右衛門得たりと踏込切下すと見物の人々思いすハッと驚と立る時鹿十郎い又も腕をさし伸大刀を取て七八間碎の如く投付たり

○民十郎大刀七郎右衛門を仕留る事

井熊本へ首尾を知らする事

偖も民十郎と組上り横七郎右衛門が倒れたるを切付んと爲を鹿十郎押止め組て大刀を引起し民十郎と大刀を合させるゑ度々投られし痛處ゑ精神勞れ又民十郎も數刻の戰ひゑ勞れ果しかば双方共泥ゑ醉たる魚の如く然共民十郎い一心凝たる仇討なれば再び心を勵まし七郎右衛門が隙を見て大喝一聲切込を大刀是を請損じ馬手の肩先七八寸腋へ掛て切下られ後へ撞と倒れしが又起上りつゝ弓手ゑ刀を取直し死もの狂ひゑ振廻すを見て鹿十郎い浮田が初大刀を付たれば後と弟民之助が敵と云樣弓手をずんと討落すゑ大刀其儘倒れしかば兩人等しく飛懸り止めを刺頸て首を討落すを見て殘る三人を始め警固の人々一同聲を揚動とぺかりゑ驚たりけり因て浮田佐野の兩人い傳立右衛門民之助の戒名を取出し首を手向て重る讐大刀七郎右衛門を只今討取たれば修羅の忘執を晴し佛果を得給へと暫ゑ回向ゑ及び夫より當國の太守松平越前守殿家老本多吉田の兩所へ向ひ御見屆の通り我々本望い達すると雖も當御城下を爭せ候段其罪輕からず宜敷御國法ゑ行ハれ下さるべし斷心願成就の上い聊

か心殘りなしと云ゑ兩家老い二人ゑ向ひ其許方年來の本望を遂し嘸かし滿足おるべし兎を角を先城内ゑ入湯手なりとを發生致されよと申ければ兩人仰難有く候へ共御城下を爭せ候罪人おれば此儘入い恐れありと云ゑ然らば假ゑ警固を添て城内ゑ入べしと申故兩人其遂ゑ任せ又鹿十郎い眞田佐藤藏ゑ向ひ段々の御厚志忝けなし此上い只今敵討おしたる事と國元へ飛脚を以御知せ下さるべしとゆゑ三人い承知なし其儀い御安心おるべしと袂を別ちしが登之助一人い當所ゑ殘り浮田佐野の安否を聞屆たり扨夫より民十郎鹿十郎の兩人城中へ入しゑ早速醫師立出て民十郎の疵所を手當ゑ及びけり

○佐野鹿十郎浮田民十郎歸國の事

扨諸家より鹿十郎懇望本末落著の事

爰ゑ越前宰相忠昌卿い今日城下ゑ於て浮田民十郎佐野鹿十郎の兩人首尾ゑく讐敵を討たる旨聞及れ早速兩人へ面會せんと召出し汝等父員幷ゑ弟等の敵を討取多年の本望を遂したる段天晴美擧の働きの由嘸〻滿足おるべしと有て盃盞を賜りければ兩人い感ゑ有難き仰を蒙り冥加至極ゑ存じ奉つると厚く御禮をすて次へ下りたり其後民十郎と鹿十郎ゑ向ひ我が父の仇を討しい悦び此上おしと雖も未だ一ッの慈ひと言い朝日丸の寶劍左右手ゑ入され い主君へ申譯おし當處の所い我一人ゑて引請んゑより貴殿い早〻歸國有て敵討の儀を言上

有べしと言よ鹿十郎何横敵討い我と民之助への御墨付故其許い猶寶劔を探ぬ出せし上歸國ある方あらんと兩人閑談の處へ本多内藏之助出來り只今兩所の物語りを洩聞よ寶劔の紛失を案じちるゝ樣子あるが大刀が屋宅を調べい處一振の名劔藏しあり萬一紛失の品よをあちんとヤよ兩人扨い我〻も驚て勘付し如く是又彼奴が所業よして其品寶劔よ疑ひなからん一刻を早く拜見致し度と云けれバ内藏之助承知なし扨貴殿方よい天晴の武勇大守よも聞及ばれ何卒召抱へ度旨ヤされい此儀承引あるべきやと言よ兩人甚だ迷惑よ思ひけるが何れよも未熟の我〻を厚き思召有難く存ぜ候へ共今度の儀を故主へ一度ヤ達し其上御返答仕るべしとあるよぞ内藏之助を道理ありと此段大守へヤ陳しよ大守よりい飛脚を以て兩人の身分を問合せ且當家へ召抱へ度旨懇望有けれども兎を角も當所へ御送ゆ下さるべし其上何れ其仕つらんとの返答よ越前家よ於て甚だ惜むと雖も詮方なく細川家へ送る事よあり たて又々太守の御前へ召出され盃盞引出物等を賜り暇乞の時豫て太守が隠し置し名劔を見するよ全く紛失の寶劔よ相違あけれバ民十郎い押頂き内藏之助へ厚く禮を述て引取し所其日熊本より使者來りしかバ兩人を大よ悦び是迄越前家の手厚き世話よ相成し段御禮與々申陳て出立あし道中恙なく寛永九年壬申十二月廿日熊本の城下へ歸着なしけれバ家族いヤよ及バず家中の面々出迎ひ悦ぶ事大方あらず早々太守よも目見をヤ付られ懇切の仰せ有て盃盞等賜

りしかバ民十郎紛失の寶劔を主君へ呈しけるよ太守い深く悦バれ又傳五右衛門の跡式を賜り其上此度の褒美として百石の加増ありしよぞ重々有難き君恩なりと感涙を流して退出あし夫々吹聽よ及びけれバ母妹の悦び言ん方あく眞田佐藤等實よ目出度とて東西よ奔走あし翌日より勤めの支度あど調へけり扨又佐野鹿十郎へい新規八百石を賜り永〻の心苦思ひやるとの事あれバ冥加よ餘る仕合せと御禮申述べ御前を下り夫より親類始め同家中の面々と招き厚く饗應けるゆ勘藏登之助の兩人い此上暫時當地よ止まり貴所よ太刀筋を學び主家よ有附度此儀御許容有バ犬馬の勞を盡すべしとヤよ鹿十郎も承知あ玄寛々滯留あるべしと兩人を止めヒ致示よこそい及びけれ茲よ隣國の島津家よてい佐野の家名を再興せんと末孫を尋ね居たる所此節鹿十郎の噂ありしかバ細川侯へ使者と立て召歸し度由ヤ入らせしよ細川家ゆても鹿十郎を惜まるゝよより種々よヤ爲し延引よ及びけるを薩州侯より是非〻歸參致させ給ふべしと再應ヤ込れけれ共左右細川家よてい品能云あして時節を延されたり又浮田民十郎い獨身故諸方より緣談をヤ込と雖も未だ相應の者あき折柄奥州白川油屋德右衛門方より今度の喜び等よ來り殊よい德右衛門兄久藏い身代りよをありし當來の緣をある事故失敬成共娘を御嫁よ成下され度此段佐野氏宜しく御計らひ願ひ候と云を鹿十郎聞て堅極の民緣あらんとて早速取極り支度調へし處藤丈之助い此事を聞我樣て娘よ戀情の事より終よ

い一旦騒ぎし事を有しが鹿十郎の異見より今更後悔して本心に立帰りたり此度の媒妁人は是非〳〵文之助仕つらんとゆ故是幸ひありと頼みければ遠路も厭ず徳右衛門親子を同道あして熊本へ着し大守へも願ひ乃上方堀首尾能相調ひ徳右衛門の娘い民十郎と目出度夫婦となりて其後男女數多の子を誕け母親を大切にあし家富榮ゑけり又藤丈之助い近隣の大百姓の娘を貰ひ是又家榮ゑたり然るに佐野鹿十郎い諸國俯行中恩を酬て世話に成し人々の中死去なせしい法事をあし存命の人にい音物を贈り彼是する中尾州家より鹿十郎を懇望わり是先年敵討相濟上い參上仕つるとありし故あり細川侯い島津家よりも懇望又尾州家よりも懇望されば給ふにも當惑の餘り鹿十郎を呼出し汝が心い如何と尋ねらるゝに私しに於ていい斯御大身方より御望み下され候段面目身に餘り候併し大守の御厚恩い蒼海猶淺く須彌山も高しとせざれども薩州い故郷ゆゑ便宜に故郷へ錦を飾るとゆせば何卒薩州へ御遣し下され度斯ゆ上あば定めて御悪しみを之あるべく候へども此儀御聞濟願ひ奉つる尤も私しに二人の門弟あり是い某しより武術勝り候へ共義に依て師弟の約をなせる者共に候間御召抱へ下され候樣願ひ上奉つるとゆければ太守には不滿に思はれ共理を豎したる鹿十郎が言葉故餘儀なく聞濟に相成たり依て鹿十郎い退出あし眞田勘藏を呼て太守への首尾を申聞其許當家へ仕官致すべしとあるに勘藏大に悦びけれど早速大守へ目見ゑ申付られ武術を試されけるに鹿十郎に及ばざるにあらざれども是又一個の達人と云殊に鹿十郎の吹聴故迅速に召抱られたり然るに尾州家よりも度々の催促あれば鹿十郎い自身に名古屋へ罷越先年御厚恩の御禮を申上此度ゑ召抱の御沙汰い冥加至極有難く存じ候へ共故郷へ歸り父兄の家名を起し度心願故私し儀い薩州へ御暇下され度尤も私し師弟の交りある佐藤登之助是い先年御當所山田外記の宅に立會候者なるが其後諸國修行仕つり技前上達い勿論心掛を格別の者に相成候間此者を御召抱下され度とゆ陳ければ道理もあり然らば召連來るべし武術を試みんと有るに則ち登之助へをゆ聞尾州家へ同道あし大納言殿の御前に於て武術を御覽に入しに天晴の達人故直に召抱へられたり依て鹿十郎い彼是へも義理も立しかば漸々安堵あし尾張殿を始め細川殿其外へも暇乞に及び頓て島津家へ歸參あし再び父兄の家名を起せし事孝と云義と云信と云類ひ稀なる英勇と云つべし其後お梅との中を睦じく子供數多誕け增々家富榮ゑ又浮田民十郎佐藤登之助眞田勘藏等い子〻孫〻迄入魂に成たりけり尚又鹿十郎い彼の太左衛門と假に親子の義を結びし事あれば忌日〳〵を弔ひ遣したりとぞ嗚呼佐野鹿十郎英勇の名後の世までも芳しきい實に宜なるかな

佐野義勇傳畢

明治十九年十月十三日御届
同　年十一月　日出版

定價金十錢

編輯人　未詳
出版人　日本橋區蛎殼町三丁目十二番地　太田乙治
發兌　京橋區水挽町一丁目八番地　中島儀市
全　日本橋區新和泉町一番地　今古堂

大賣捌

横山町三丁目　辻岡文助
橋町四丁目　鶴鳴社
通四丁目　春陽堂
全　内藤加我
小網町二丁目　永昌堂
本材木町一丁目　自由閣
淺草三好町　大川錦吉
南鍋町一丁目　兎屋誠
本石町二丁目　上田屋三郎
藥研堀町　鈴木喜右衛門
馬喰町二丁目　山口屋藤兵衛
通り一丁目　伊勢屋金二郎
飯田町　水野幾太郎
上州富岡　木田るい